大正六年九月十四日（第三種郵便物認可）
昭和六年五月一日發行（毎月一回一日發行）（第拾四輯第五號）

建築と社會



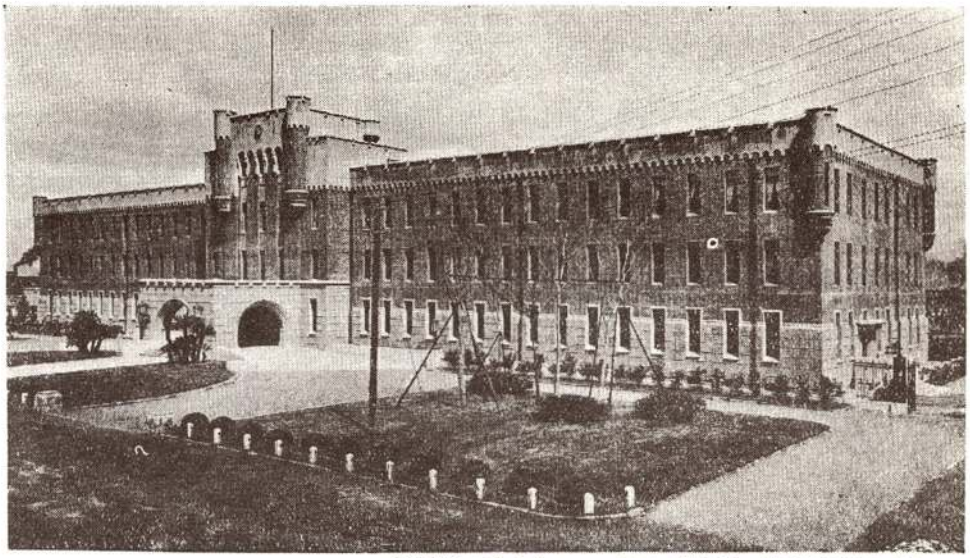
特輯　事記

郷土建築

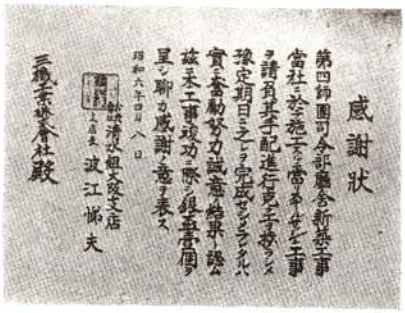
第十四輯第五號
昭和六年五月一日
日本建築協會

三建製造

三機販賣



（寫眞は三建式サッシ，ドアー御採用の第四師團司令部）



感謝狀

第四師團司令部廳舍新築工事
當社ニ於テ施工ノ榮ヲ荷ヒ
ヲ請負其ノ配進行竟ニ予想ヨリ
豫定期日ヨリモ完成セラルルハ
實ニ貴殿努力誠意ノ結果ニ
依ル本工事竣功ニ際シ銀盃貳個
ヲ聊カ感謝ノ意ヲ表ス

昭和六年四月八日

清水組大阪支店
波江悌夫

三機工業株式會社殿

竣工　昭和六年二月

設計　第四師團經理部殿

施工　清水組大阪支店殿

三建工業株式會社

總代理店

三機工業株式會社

本店　東京市麹町區有樂町一丁目一〇（三信ビル內）
電話銀座(57)5330—5335 (6)2831—2833(3)

支店　大阪市東區備後町二ノ二一（野村ビル內）
電話本町(24)1166・1167・1525

取扱店　各地三井物産株式會社支店出張所

（型錄贈呈）

社團法人 日本建築協會々報

報告

昭和六年三月三十日

社團法人日本建築協會々長
理事　工學博士　片岡　安

內務大臣　安達謙藏閣下

市街地建築物法令及規則改正の件に付建議

市街地建築物法施行令及同施行規則の改正の案成り近く其の發令せらるゝやに聞く關西に於ける建築關係者を以て組織せる我協會は曩に昭和二年十二月及昭和四年四月當局に對し該法規の改正に關する意見希望を述べ其の改正を促したり今や其の氣運に際會せるものあるを知り更めて調査研究の結果別紙の通改正意見及希望を開陳し併せて當局の改正案を示し當協會に諮問せられんことを懇請致候條可然御詮議有之度此段及建議候也

理由書

市街地建築物法、令及規則の制定せられてより茲に十數年を閱し其の間令及規則に付ては數次の改正を見たり惟ふに世運の進展、文化の發達に依り殊に最近重要都市に在りて都市計畫事業相次で起るあり建築物の構造設備は自ら著しき進境を伴ひ從來の法、令及規則に關しても種々不便を生ずるを免れず茲に當局に於て同法規改正の必要を認められたるは最も時機に適するものなりと信ず

抑も市街地建築物法は日本全國に亘り其の重要都市に施行せらるゝものにして其の間各地方の狀況を異にするものあり從て同法は極めて普遍的のものたるべきは論を俟たず然るに過去の事實に徵するに其の立法或は其の改正に當り餘りに東京本位に失し大阪其の他關西に於ける主要都市を閑却せるの感あるは本協會の最も遺憾とする所なり換言すれば東京に於ける事情のみを顧慮し警視廳、建築學會等の意見を偏重せらるゝの憾ありしからず今回の改正に際しても從來の傾向を踏襲せられんか啻に大阪其の他關西に於ける便宜得て望むべからざるのみならず却て徒に過去十數年に亘り涵養せられたる良慣習良功績を根本的に破壞し改正は時に改惡に墮するの虞無きやを憾む

我協會は設立以來既に十有五の星霜を閱し廣く關西に於ける建築關係者を網羅したる團體にして主として民間建築家の唯一代表機關たり常に建築界の健全なる進歩發達に努力し社會の指導的立場にあるを以て自認せり依て同法令の改正に關しては曩に當局に具陳せる處を更に反復精査し茲に意を新たにして改正の意見並に希望を開陳し建議するものにして充分之を重要視せらるゝと共に又一面同法令改正の如きは決して之を秘密に付するの必要なく廣く其の意見を天下に求めらるゝの寧ろ至當なるべきを確信す當局は宜しく其の改正案を明示し當協會に對し諮問を發せられんことを懇願する所以なり

市街地建築物法、令及規則に關する改正の意見及希望

甲　改正意見

一、法

一、法第一條の地域に依り指定したる殘餘の地は未指定地などの制限に依らず無制限にする樣改正すること、但し必要あらば地域の種類を增すこと

一、法第七條の建築線を道路敷地の境界線とする原則を改めて道路幅の境界線を以て建築線とするか又は夫れより何尺かを後退したる線を以て建築線とすること

一、法第九條

(イ)歩道を有する道路に於ては高地上八尺以上の庇に限り歩道境界迄突出せしめ得る樣改正すること

(ロ)歩道を有する道路に於ては建築物の基礎及地階の部分を歩道境界線迄突出せしめ得る樣改正すること

一、法第十條の制限は市街の體裁上のみならず交通上をも考慮に入れ得る樣改正すること

一、法第十一條「高」の次に「階數」を加ふること

一、法第十三條第二項中建物の部分を爲す防火壁とあるを單なる防火壁に改正すること

一、法第二十六條の道路の幅員を十二尺以上に改正すること

二、令

一、令第一條乃至第三條の內容を一層適確精密に厖捨すること

一、令第四條の建築物の高の最高限を單に漫然百尺又は六十五尺と規定したるは不可なり宜しく當該建築物の面積又は土地の狀況に應じ相當考慮し支障なき限りとが最高限を緩和し得る樣制限を改むること土地の狀況を考慮に入れたる但書の適用は其の範圍不明確なるを以て實際問題として設計に當り不安にして見解の相違に依り動もすれば不利を招く處あり依て出來得れば命令を以て具體的に條書の體裁に依り規定すること

一、令第七條の高の限度は道路幅及外廓を基準としピラミツト型の高を形成し得る樣改むること、從て二十五尺を加へたる限度は之を除くこと

一、建築物の高の最低限度の實施に伴ひ其の建築敷地に限り其の敷地境界線に接し建築する場合に於て其の基礎の深の最少限度に付適當なる制限を付すること

一、公道を越ゆるオーバーブリツヂ及隧道の出來得る樣特別の規定を設くること

一、令第三十一條を削除すること

三、規則

一、規則第四條中但書及「三尺迄」「二尺迄」を削除し前面突出部を緩和すること

一、規則第六條の屋上突出部の制限を今少し緩和すること

右制限中特に昇降機塔の幅又は面積の制限を緩和すること

一、規則第十八條の天井高は七尺五寸以上に改正すること

一、規則第十九條の制限は特に大なる居室及地階の居室に付不都合の場合なしとせず、一般的に規定の採光面積不足の場合は之に代ふるに適當なる照明方法あるときは除外し得る樣緩和すること

第二項中「稼側」の次に「又は廊下」を加ふること

中庭に於てトップライトガラスを以て被はれたるときの採光面は最上階より最下階に至る迄相當有効に認むること

地階採光のためデッキグラスを使用する場合に於て之を天窓と看做して採光面積を三倍に見るは過大に失す、尙地階通風に對しても非常なる缺陷を生ぜる實例多し

一、規則第四十二條に左の但書を加ふること

但し鐵骨又は鐵骨鐵板造のものにして鐵部の露出し且其の下部が地盤に接するものは此の限に在らず

一、規則第四十三條に左の但書を加ふること

但し社寺用建物又は工業用建物にして地方長官其の用途に依り已むを得ずと認むるものは此の限りに在らず

一、第三章の構造設備に關する規定適用に付ては大修繕又は大變更に限り其の一部を免除すること

一、規則第五十二條に左の但書を加ふること

但し止むを得ざる場合に於て之に代るべき適當なる補强方法を施したるときは此の限に在らず

一、規則第七十五條に左の但書を加ふること

但し地方長官特に必要と認むるときは此の限に在らず

一、規則第八十二條を左の通改むること

建物の構造に使用する鋼材の品質は商工省告示第二十三號構造用壓延鋼材に關する規格に依る（大正十五年十月二十六日官報告示）

一、規則第八十五條に左の但書を加ふること

但し適當なるミリングを施工する場合は剪力及曲能率によるものゝ外過半を柱に直接傳達し得るものとす

一、規則第八十七條の次に左の一條を加ふること

第八十七條の二　假設的の建物其の他構造輕微なる建物にして地方長官支障なしと認むるものに付ては第八十二條乃至第八十六條の三の規定を適要せざることを得

一、規則第九十一條に左の但書を加ふること

但しベヤリングウオールに於ては此の限に在らず

一、規則第百二條に左の三項を加ふること

リベットの抗壓力度は應剪力度の二倍までと爲すことを得

風壓算定に於ては鐵の應力度を適當に增加せしむることを得

鉄鋲繼手に於て鋲のベヤリングフオースは鋲の應剪力度の二倍（二萬一千二百听吋）までと爲すことを得

一、規則第百五條中左の通改むること

住家　二百瓩/㎡　事務室　三百瓩/㎡

本條の動荷重は震力算定に於ては七割以內を減ずることを得但し倉庫、書庫陳列室、觀覽席、集會室等に付ては之を輕減することを得ず

著しき振動衝撃等を生ずべき特殊の動荷重を受くる建築物に在りては地方長官其の實況に應じ特に該動荷重の增加其の他必要なる措置を命ずることを得

一、防火地區內に於ける建築物にして小規模の增築に付ては緩和する旨明記せる條項を追加すること

一、或種の工場を他の種の工場に其の用途を變更する場合及一の工場內に於て各建物の用途を部分的に變更する場合は果して規則第百四十三條第二項の用途變更と見做すべきや否疑義を生じ易きを以て明確に規定すること

乙　改正希望

一、令

一、住居の用に供する建物の空地は地域の如何を問はず相當の面積を强制する樣改正すること

一、住居地域內に於ては一定面積內に建て得る建物の戸數を制限すること

二、規則

一、規則第二十四條に關し非常口の外開扉を除外すること

一、規則第八十六條の規定に付構造適當なるときは柱脚をヒンヂ構造と爲し得る樣條文を改正すること

一、規則第九十條の二の複筋量の標準を規定すること

一、鐵筋コンクリート長柱の公式を定め第九十一條第三號を削除すること

一、鐵筋コンクリート用コンクリートの破壞强度の最小限を規定すること

一、主要なる鐵梁並に鐵筋コンクリート梁（突出梁を含む）の許容最大撓度を規定すること

一、鐵骨鐵筋コンクリート構造に關し其の規定及算式を定むること

一、高層建築物は鐵骨鐵筋コンクリート構造となさしむること

一、出願手續の形式は各都市共大々區々にして不便勘からず之が統一に付ては內務省令を以て規定しては如何

一、建築認可申請又は建築届出後二十日を過ぐるも當局より何等の通知なきときは建築手續完了せしものと看做し建築工事に着手することを得る旨の適當なる條項を追加すること

一、建築書類を同一知事に幾通も提出せざるべからざる事由なきが如し努めて重複認可を避けるの様せられたし他の法令に依る手續と建築法規に依る手續との重複煩瑣を避くる意味に於て市街地建築物法適用區域内に於ては他の法令の手續中建築に關する事項に付手續を要せざる旨夫々の關係法令を改むることを望む

常設委員會名稱變更

今回當協會常設委員會の名稱第何部委員會と稱するを廢し法制委員會、教化委員會、資料委員會、災害强度委員會、住宅委員會と稱することに改正致しました

會合

法制委員會第二分科會

時　三月二十三日午後五時三十分——同九時三十分
所　ライオン食堂
出席者　委員長池田
A班主査　工藤　B班主査　玉置
委員　梶垣　武田
記事
一、近く市街地建築物法施行令及同施行規則の改正せらるゝに付、當協會より曩年二回に亘り當局に改正意見を建議せしが此の際更に最も重要なる點を審議し成案を得て至急再建議すること尚同時に改正案に付當協會へも諮問を發せられんことを要求すること
一、右に關し從來の改正に際しては餘りに警視聽本位、建築學會本位の憾あり關西方面に建築協會なる有力なる團體あり夫等民間の切なる聲のある所を此の際大いに主張するの必要あるを以て可成强肉に當協會の意思を表示したし
一、依つて別紙の通、改正の意見及希望

會告

春季大會擧行

來ル五月十日(日曜日)本年度春季大會(晴雨不論)ヲ開催致シマス

見學　信貴山毘沙門天建築及生駒聖天建築
園遊會　生駒山頂上ニ於テ
會費　金壹圓五拾錢

昭和六年五月

社團法人日本建築協會

第一分科　佐々木、中山、赤松、山脇　渡邊
第二分科　岩崎
第三分科　魚田、木野山、鈴木、增山
記事
一、本夕は委員長、幹事、主査、何れも缺席に付總會を開くに至らず、第一、第三分科は各々分科會を開き研究の後散會したり

住宅委員總會

時　三月二十三日午後六時——同六時三十分
所　住友倶樂部三階
出席者
第一、建築關係者の失業救濟の件
第二、建築會館設置の件
第三、事業部設置に關する件
右三問題は目下急迫せる重要時事問題にして此の際會員相互の意見を交換し大いに業界の爲盡す處あらしめ且協會の爲すべき事業範圍の擴張、將來に對する發展策等に付腹藏なき意見を發表することは最も有意義なることにして、多數出席會員は各々各自の意見を述べ結局特別委員會を設ける事に滿場一致を以て贊成し、古宇田副會長は役員會に諮り夫々適當處理すべき旨を述べ盛會裡に散會せり。

三月例會

時　三月二十五日午後六時三十五分——同九時三十分
所　大同ビル八階集會室
出席者　片岡會長外四十一名
司會者　片岡會長、

教化委員會

時　三月二十七日午後六時——同七時三十分
所　本協會事務室
出席者　委員長　小笠原
委員　岡本、岡田、木村、芝田
主記　小川安
記事
一、第七回建築講習會に付別紙要項を協議決定し未決定のものは次回協議決定することゝし取敢ず會長宛に開催報告をなし且雜誌に會告として廣告し聽講者を募集することとす
一、次回協議事項として左の件を豫定せり
イ、講師決定の件
ロ、豫算の件
ハ、其他

法制委員會第三分科會

時　四月一日午後六時――同十時十分
所　ライオン食堂
出席者　委員長　池田　幹事　古塚
　委員　楠瀬　松井　松久保
　第一分科主査　鳥井
記事
一、左記問題に付研究協議の結果會長に建議追申及要求をなすことに決し其の案文を作成したり
イ、都市計畫法及市街地建築物法施行十年記念祭參加の件建議追申
ロ、失業救濟事業に依り建築計畫中の建築物有無の件に付照會發送要求照會文案作成
一、左の問題に付次回より研究することに決定
イ、郊外土地區劃整理地區中の一部を提供して住宅博其の他の方法に依り發展策を講ずる「有山終身賛助員」の說に付實行方法の研究
ロ、建築の合理化運動の實行方法に付研究
一、請負入札に關する件其の他に付意見の交換をなし散會したり

住宅委員會第一分科會

時　四月六日午後六時――同九時二十分
所　本協會事務室
出席者　主査　富士岡
　委員　淺野、佐々木、篠崎、中山、樋口
記事
一、エレベーションを進むるに先だち外部仕上材料に付て協議をなすことゝし先づ基礎より始む

法制委員會第一分科會

時　四月七日午後五時三十分――同八時三十分
所　本協會事務室
出席者　主査　鳥井
　委員　北垣、椎原、池田、佐藤正、加藤
記事
一、土地區劃整理地區中3%の公園敷地を保留の件に付前回に引續き鳥井主査より都市計畫の意向等述べられ委員相互にも種々意見交換の結果目下狀勢より見て市長府知事に陳情し尚當路の幹部に直接懇願すること最も有効ならんとのことに協議一決し右陳情書案次回總會の前迄に鳥井主査手許に於て作成し更に相談の上總會に提出のこと

資料委員會

時　四月七日午後六時――同八時三十分
所　ライオン食堂
出席者　幹事　三木
　第二分科　高岡
　第三分科　三木
　第四分科　山中、志村、須賀、伴
記事
一、今夕は出席者極めて少數にして、分科會を開き協議を進むること能はず食後懇談して散會せり

常務會

時　四月八日
所　本協會事務室
出席者　理事　片岡　古宇田
　監事　光安
　主記　小川陽、小川安、阪井、松本、森本
　主計　岡部
　編輯　本間
　報告
一、三月分會計報告
一、教化委員會より報告に係る第七回建築講習會開催の件
一、法制委員會より報告に係る市街地建築物法及附帶命令改正意見再建議の件並評議員に報告の件
一、住宅委員會より報告に係る住宅會議審議事項の件
　議事
一、春季大會に關する件
一、神戸に於ける生活改善健康住宅展覽會後援に關する件
　附　右に關し特別委員會設置の可否
一、香里に於ける小住宅展覽會後援申込に關する件
一、法制委員會より建議に係る都市計畫法及市街地建築物法施行十年記念祭參加に關する件
一、三月例會に於て希望せる三種の特別委員設置に關する件
一、世界最新建築圖集出版に關する件
一、法制委員會より報告に係る失業救濟事業に依り建築計畫中の建築物有無合せの件に付府縣町村長宛文書發送の件
一、委員會規程中名稱變更の件
一、雇辭職願出の件
一、會員詮衡　其他

災害强度委員會

時　四月九日午後六時――同九時三十分
所　住友倶樂部三階
出席者　委員長　增田、幹事　大野　古川
　第一分科　大野、落藤、關場、堀田
　第二分科　川口、黒田、中島、古川、三浦
記事
一、大西委員より提出されたるWelding Encyclopedia 外三册の參考書に付種々意見の交換をなしたり
一、關場委員に Welding Society の諮問に關する仕樣書を飜譯して次回御持參を願ふこと
一、孕石博士の招待座談會日取を四月二十五日と內定し種々交涉を進めること

教化委員會

時　四月十日午後五時三十分――同八時
所　本協會事務室
出席者　委員長　小笠原　幹事　池田谷
　委員　岡本、岡田、芝田、藤枝

山本

記事　一、講師の件
　　二、會場の件
　　三、豫算
　　一、活動寫眞及幻燈の件
右の諸件に付種々協議をなし、愈々決定的に準備をなすことを決議し散會せり

住宅委員會第二分科會

時　四月十三日午後六時――同九時十分
所　本協會事務室
出席者　主査　酒井
　　委員　岩尾、岩崎、丹藤
記事　前回委員會の決議に依り蒐集せし煖房の諸型錄に付意見の交換をなしたる結果、重ねて放熱曲線圖表、一時間の消費燃料、燃料熱料の名稱及種類等に付各會社に問合すことを申合せたり

逝去



會員佐藤彰美氏昭和六年二月十九日逝去さる玆に謹んで昭肯と略歷を揭げて哀悼の意を表す

佐藤彰美氏略歷

舊美濃今尾藩主竹腰男の臣佐藤小右衛門の長男として明治五年十一月十七日愛知縣海部郡南陽村に生る、明治二十五年二月私立東京工學院前身工手學校の造家學科を卒業す、同年九月遞信省に奉職し各地郵便電信局大阪梅田停車場其他各驛新築工事に從事したり。

明治三十三年五月住友本店臨時建築部に入り明治四十一年技師に任ぜらる、大正七年三月住友を辭する迄住友建築工事に對する實際的重要設計圖面の作製に當り製圖主任として精根を盡して活動せり同年四月大阪宗建築事務所へ勤務製圖主任及監督主任の職に就けり、大正十年三月同所を辭し大阪竹中工務店に勤務昭和三年三月病氣靜養の爲め同店を退く迄工事長又は監督長として關係活動せり。

明治三十九年より大正四年まで大阪私立關西商工學校の建築科講師又昭和四年より死去に至るまで神戸高等工業學校の建築科講師の職にあつた。

昭和四年十月神經衰弱症に罹り本年一月初腦溢血の前兆あり療養大いに努めつゝありしが二月十九日午前三時三十五分終に逝く、行年六十なり。

轉勤轉居

會員

米倉　威夫君　神戸市東須磨筒廣町一九
土居原亀之助君　兵庫縣武庫郡精道村打出三反田
田土　春一君　神戸市兵庫新在家町神戸市中央卸賣市場建築場大倉土木株式會社作業所
秋田喜代治君　府下北河內郡守口町守口狼島七五ノ一
大坊　榮助君　此花區四貫島大通一東洋紡績四貫島工場內
福島　祿壽君　市外千里山八七
宮田　益雄君　東成區大宮町八ノ三五
近藤　正造君　尼崎市南竹谷町一ノ一七
安井　武雄君　中尾惣右衛門氏方
佐々木兵部君　兵庫縣庫郡大社村森具字北蓮毛八四七ノ四七
根本　茂郎君　神戸市長田寺池町一ノ八二
落藤　藤吉君　府下中河內郡矢田村矢田一〇一四、營業所（北區堂島濱通一ノ二二）
　　兵庫縣武庫郡本山村北畑四七八
　　會員（地方在住）
高村　勝君　明石市東町五十六銀行工事場清水組事務所
池田　宮彥君　東京市芝區白金今里町三九
岸　平君　東京市麹町區丸ノ內二丁目明治生命保險株式會社建築場竹中工務店出張所內
橘高　壽君　廣島縣芦品郡岩谷村字目崎
日端　甚一君　福井市城町三ノ丸官舍
木津　孝雄君　兵庫縣乘水町西重水九八
藤塚　義一君　岡山市門田屋敷一〇五
　　終身贊助員
藤木　正一君　兵庫縣武庫郡長元村寶塚日ノ丘二三ノ二
　　特別贊助員
光井　福松君　東淀川區十三東ノ町四丁目ヒーロ化學工業所內
古賀　鄕實君　大阪市土木部建築課
　　普通贊助員
大野　竹一君　東京市牛込區北町二
藤本權四郎君　兵庫縣武庫郡今津町浦風一九
櫻間大丈夫君　東淀川區木川町二七九
小林　武夫君　井原氏方
村中　喜一君　市外豐中町新免九二五
川面　萬吉君　德島縣小松島町榮町一〇二
寺澤　林吉君　東京市下荏原郡玉川村奧澤五八一
藤本權四郎君　名古屋市中區御器所町砂田八
山田　貞夫君　兵庫縣武庫郡今津町浦風一九
佐田佐太郎君　西區江戶堀南通五丁目一二ノ一
　　福岡縣三井郡御井町廣手五二一
石井　富司君　京都府綾部町本町六丁目五二

入會者

會員

伊藤　和夫君　兵庫縣武庫郡大社村森具松ノ下四一三（大阪市電氣局高速鐵道部）

井手　正雄君　京都市中京區竹屋町通衣棚西入

岡田　孝男君　大阪市土木部建築課）

梶本　楠雅君　大阪府三島郡千里村千里山住宅地一九二（大阪市高麗橋三越住宅建築部）

貞永　直義君　大阪市浪速區鷗町一丁目七三（大阪市役所建築課）

鈴木　强君　大阪市豊能郡豊中町櫻塚一〇七五（大林組設計部）

内藤　亮一君　大阪市北區澤上江町五丁目三九（建築設計工務所自營）

野田　清三君　大阪市北區新川崎町一松岡由三郎方

福田　勇雄君　兵庫縣武庫郡住吉村畔倉（電氣局高速鐵道部）

吉田清三郎君　大阪府三島郡千里山住宅（大林組本店）

後藤　芳男君　兵庫縣武庫郡東菅屋字山の下（大阪市土木部建築課）

森田　勝三君　山口縣下關市豐町（下關市役所港灣殖產課）

山田　昭君　兵庫縣西宮市安井町三六（岡本工務店）

坪井　介爾君　大阪市東區横堀四丁目二三（紀之平材木店）

伊東　忠太君　東京市本鄉區西片町一（東京帝大名譽教授）

普通贊助員

會員（地方在住）

退會者

會員　木村喜代松君　多田　久男君　同

（地方在住）山本辰次郎君

普贊　南龜吉君、竹本末吉君、川口清太郎君、小林市太郎君、和田順三君

寄贈雜誌

建築雜誌　毎號　建築學會

日本建築士　毎號　其會

建築世界　毎號　其社

建築新潮　毎號　洪洋社

建築學研究　毎號　其會

建築畫報　毎號　其社

建築と築　毎號　中央建築會

住宅　毎號　住宅改良會

インターナショナル建築　毎號　其會

滿洲建築協會雜誌　毎號　其協會

新建築　毎號　其社

朝鮮と建築　毎號　朝鮮建築會

國際建築　毎號　其社

土木建築　毎號　其社

土木建築材料商報　毎號　其社

土木建築工事畫報　毎號　其社

臺灣建築會誌　毎號　其社

都人　毎號　其社

大阪工業俱樂部　毎號　其社

建築業協會々報　毎號　其協會

東京土木建築業組合報　其組合

大阪土木建業組合報　毎號　其組合

庭園と風景　毎號　日本庭園協會

日刊工業新聞　毎號　其社

東洋建材時報　毎號　其會

名古屋工業會々報　毎號　其社

日本建材新聞　毎號　其社

木材彙報　毎號　大阪木材協會

木材新聞　毎號　關西木材商報社

工業評論　毎號　其社

工業　毎號　大阪工業會

工業要錄　毎號　其發行所

大阪　毎號　大阪都市協會

都市問題　毎號　東京市政調査會

學士會月報　毎號　學士會

工政　毎號　其會

國立公園　毎號　其社

關西園藝　毎號　其社

塗料　毎號　日本ペイント株式會社

塗工の魁　毎號　其社

駿工　毎號　其會

電氣學會雜誌　毎號　其會

超科學　毎號　大阪網島工業會

電氣評論　毎號　其社

帝國鐵道協會會報　毎號　其會

朝鮮鐵道協會會誌　毎號　其協會

鐵道軌道經營資料　毎號　鐵道同志會

趣味の園藝　毎號　關西園藝會

セメント界彙報　毎號　日本ポートランドセメント同業會

エンヂニヤリング　毎號　其社

經濟資料　毎號　東亞經濟調査局

通俗衛生　毎號　大阪府衛生會

京都の實業　毎號　京都商工會議所

都市創作　毎號　其會

產業　毎號　其社

日本美術協會報告　毎號　其社

役員

會長　理事　評議員　片岡　安

副會長　理事　評議員　古宇田　實

副會長　理事　評議員　日高　胖

監事　波江悌夫

監事　光安梶之助

常務（主記）評議員　小川陽吉

常務（主記）評議員　小川安一郎

常務（主記）評議員　阪井米吉

常務（主記）評議員　松本儀八

常務　主記）評議員　森本藤吉

常務（主計）評議員　大原芳知

常務（主計）評議員　岡部顯則

常務（主計）評議員　德政金吾

常務（編輯）評議員　小西一良

常務（編輯）評議員　高橋榮治

常務（編輯）評議員　本間乙彦

常務（編輯）評議員　村野藤吾

評議員　池田　實　評議員　伊東宗太郎

評議員　岩尾　保衛　評議員　小笠原　銅

評議員　岡本新次郎　評議員　加藤　誠二

評議員　籠田　定憲　評議員　木村　寛一

評議員　久保田筆雄　評議員　小寺彌一

評議員　酒井勇三郎　評議員　白石登喜男

評議員　芝田　知重　評議員　篠原　太郎

評議員　須川廉太郎　評議員　須藤　隼人

評議員　武田　經一　評議員　高田利一郎

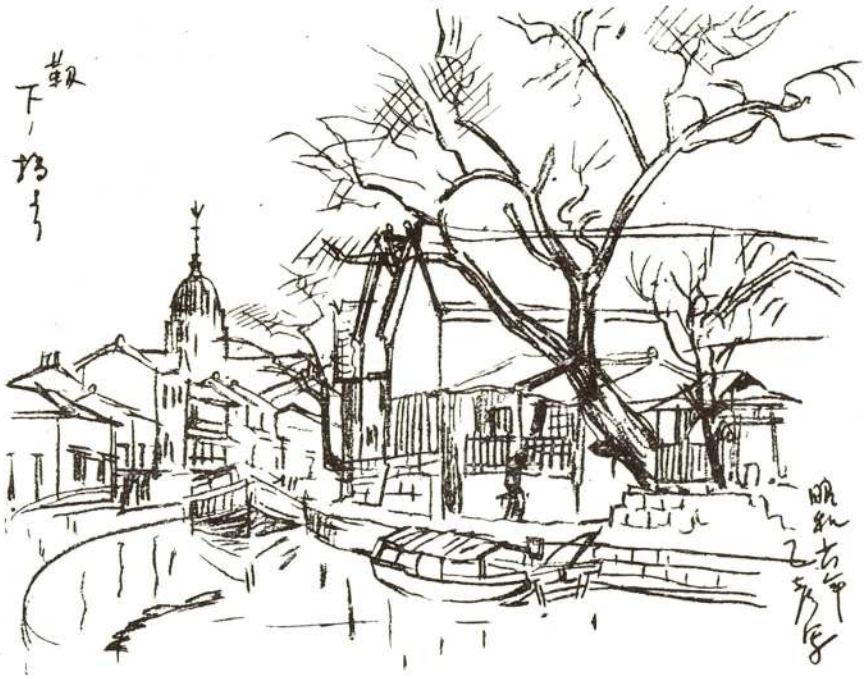
評議員　永田三次郎　評議員　原科　準平

評議員　前内文二郎　評議員　三木　來三

評議員　村上　徹一　評議員　八木幸次郎

評議員　山田　亟平　評議員　山田　初次

評議員　山中　茂一　評議員　渡部　圭吾



大阪・靱下の橋

建築と社會鄉土建築號

昭和六年五月發行　第十四輯第五號

目次

卷頭插畫・大阪・靱下の橋……（一）
日本民家基本平面計劃への一疑問……田邊泰…（三）
滿洲の民家……村田治郎…（五）
靜岡の東本陣跡……松本儀八…（一〇）
濃尾平野の農家……城戸久…（一三）
祖先の鄉土建築……德政金吾…（一四）
舊府廳舍の建築……葛野壯一郎…（一八）
與力屋敷を捜す……鶴丸呆二…（二二）
鄉土建築座談會……（二三）
失業救濟事業と建築……鳥井信…（四五）
史蹟・信貴山と生駒山……池田谷久吉…（五三）
山口市に於ける國寶建築…（下）……天沼俊一（特附二七）
國際新建築集……（附二一）
京阪神新建築集……（附三五）
分讓住宅設計圖案懸賞募集規程……（五七）

日本民家基本平面計劃への一疑問

早稻田大學助教授 工學士 田邊泰

一

從來の建築史なるものが、其の取扱ふ範圍を殆んど紀念的建造物や宗教建築の類に限つた觀があるが、これは英雄史を規準とする古い歷史學の方法を其の儘建築に適用したのだから致し方がない。然しこれからの建築史なるものは從來のもので滿足されないことは明かである。斯ふ云ふ學的檢討の過渡期にある現在、民家建築の研究は、未來の正しい建築史組織の上に大なる要素となるべきことは云ふまでもない。

世界の建築を通觀するに、民家建築ほど各國の特質を最もよく如實に表現してゐるものは他に尠いであらう。其處には英雄的な豪快さも、天才的の超時代感も無い。僅かに氣候・風土と云ふ樣な地理的狀勢の然らしむる必然的なものと、又一方には長い歷史にはぐゝまれた國民性、或は民族性と云ふ樣な宿命的なものとに支配されて遲々とした素朴な歩みを續けてゐるのである。このことは國や民族を異にする場合は勿論であるが、更に一國內に於ても同樣の現象が認められる。例へば我國の樣な大陸から分離した島國に於ても其の差異は、各地に於て知られ、所謂地方色を表はしてゐる點が多々認められるのである。

然し余は茲に民家建築が提出する多くの問題への考察をしやうとするものではない。余が數年研究の一對象としてゐる日本建築史の一部をなす日本住宅史の研究の中で、平面計劃の基本形成とも云ふべきものへの一二の疑問を提出して識者の示教を乞はんとするのである。然し余は今書齋を離れて研究旅行の途次、奈良の旅舍にあつて、此の一文を草して居るので、元より手元に一冊の參考書も無いので論に幾分不徹底の點もあるであらうが寬恕を乞ふ次第である。

二

均しく日本民家と云つても、地方的に各々特質を持つて居ることは既に述べたが、平面計劃、構造及び意匠等の點に就て詳細に觀察すれば、大凡そ同一の基本形式から成立して居ることが認められる。であるからこれ等の解釋は一見極めて簡單の樣であるが、其の原流の考察に向つて精密なる檢討を加へるならば、問題は多岐に分れて甚だ複雜となり、其の解釋に苦しむ問題に屢々逢着するのである。殊に平面計劃の問題は、土俗學的或は民族學的な方面へも交涉を持つものであるから、更に複雜となるわけである。

日本民家の基本形式は『田字形の間取り』即ち俗に『四つ目の間取り』と云はれてゐるものであるが、此の形式發生以前の住宅形式として『天地根元の宮造』のあることは屢々云はれてゐる。此の形式は日本建築の起源として建仁寺流傳書の中にある傳說的のものであるが、竪穴式、矩形平面で間取りなどは無い。そして壁と床の無い堀立式のものであるから、建築學的推理に依つても、或は其の形式の延長とも認められる飛彈白川村の民家、或は栃木縣河內郡地方の冬期の仕事場の『ムロ』と稱するもの等の土俗學的遺物から見ても、上代に於ける住宅建築の一形式としての天地根元の宮造の存在は否定されないであらう。

然し此の形式以前即ち先史時代の住宅趾の存在が考古學的發堀によつて近年續々發見されてゐるが其れは圓形、竪穴式、中央に爐を設けた形式で、土俗學的にはカムチヤツカ其他北方に現存する住宅形式と凡そ同一のものである。代表的の例は下野姥山貝塚、武藏高ヶ坂、八幡平等の住居趾である。

此れ以前に遡れば越中氷見郡から發見された橫穴式の洞窟住居が

あるが、これは自然の洞窟利用で、人爲的の工作が加へられてゐないから住宅と認め難いので、茲には省略する。兎に角原始的の住宅形式としては、時代の順序として先づ圓形竪穴式から、天地根元の宮造形式へ續くものであるが、其の過程を如何に解釋すべきであらうか、余は此の問題は寧ろ、殆んど關係の無い民族的の相異と認めてゐるのであるが、他に考察の餘地があるであらうか。

三

更に間取りの形式に就ては、前に述べた田字形即ち四つ目の間取りが日本民家の基本形式となつてゐることは誰れしも認め得る所である。

此の形式で最も古い遺物は出雲大社の平面形式で、方二間、正方形の平面で、うづ柱を中央に置いて、如何にも田字形の平面であり、又此の社は大巳貴命の住宅であつたと云ふのであるから、上代既に斯かる形式の住宅があつたと考へられるのである。そして其の構造意匠等の結構は前述の天地根源の宮造から進化したものと認めて何等不合理な所は無い。然し之れに續く時代の僅かな遺例は何等此の傳統が認められないのである。即ち天平時代のもので藤原不比等の室橘三千代夫人の住宅と傳へられる法隆寺東院の傳法堂、或は正倉院文書に依つて復原され得る同時代の住宅等に依れば、云ふまでも無く何等間取り等は認められない。更に藤原時代初期の寢殿造にも一棟の建物の中に間取りは認められないのである。そして間取りの發展は藤原時代頃からで、塗籠乃至は庇の間等から漸次進化することは繪卷物或は物語り類から明かに推定されるのである。

そして鎌倉時代末乃至室町時代頃になれば、武家造及び書院造が完成され、茲に再び田字形の平面形式が生れるのである。即ち大熊博士所藏の所謂『鎌倉御所圖』乃至『室町殿屋形私考』中の主殿の形式は室町時代の田字形平面を持つものであり、近江の園城寺勸學院客殿、同光淨院客殿、護國寺月光殿等は桃山時代の主殿形式を持つ書院造であり、更に德川氏の柳營の主要部分の如きも少し複雜ではあるが、同樣に田字形の變化したものとなつてゐる。

斯樣に觀察すれば、現在日本民家平面の基本と認められる田字形の平面形式の源流に就ては、當然二樣の考察が生ずる事となる。

即ち其の第一は上代既に出雲大社等の造營に表はれてゐる如く、當時から發生し、其れが民家の傳統として基調を作り、飛鳥、天平時代には隆盛なる佛敎文化が時代を壓倒したので、古い傳統が省みられず、更に民家と別に藤原氏の貴族文化は寢殿造を構成して發展し、鎌倉末乃至室町時代に至つて、初めて潛行的に民家にのみ存在した古い田字形の形式が武家に採用さるゝ所となつて、武家造主殿の形式を生じ、書院造となつて今日に迄傳へてゐるとするのである。恩師伊東博士は大體此の說に贊意を表され、更に鎌倉の田舍武士は中央の華美な貴族文化に無智であつたから、當時の民家の基調形式を採つて、所謂武家造主殿形式を構成したものではあるまいか、と云はれたことを記憶してゐるが、傾聽すべき說であると思ふ。

次に第二の考察は鎌倉乃至室町の武家時代に至つて初めて田字形の形式が生れ、此の頃から民家の基調となつたとするものである。上代の出雲大社は、建築の構造上必然的に中央にうづ柱を設置したもので、必ずしも田字形の間取りとする爲めの特殊な考案からではない。前述の樣に飛鳥、天平、弘仁、藤原と甚だ長期に亘つて此の間取り形式が忘れられてゐるのは云ふまでも無く民族的なもので無かつた事を物語るものである。元來住宅形式、特に間取りと云ふ樣な深い民族的な傳統を根底に持ち然も生活と直接に交涉を持つ形式が容易に變改され得るものでは無い。であるから恐らく鎌倉時代乃至室町時代頃に至つて武家が武家造主殿の形式を完成して以後民家に其の風が始まつたとするのである。藤原時代の寢殿造の發達を見ても、一棟一室から漸次塗籠、庇の間等となり、其の發達には極めて自然的なものがあり、民族的の田字形形式が當時存在したとすれば、其の影響を受けるべき筈であるに關らず、何等其の跡が認められない事等は其の證據であると考へられるのである。

四

滿洲の民家

村田治郎

田字形の間取りの源流に關する以上二つの考察は何れも余の愚見であるが、余は未だ其の何れを主張すべき實證にも接しないのである。然し更に此の問題と別に、田字形の間取りが我國に於ける獨創的の發案に基くものであるか否かに就て、土俗學的に檢討するならば、先づ上代以來我國と交渉の深い四隣の國々に就て其の實例を求めなければなるまい。更に根本的に云へば、我が日本民族が何れから移動して來たものであるか、或は如何なるものと如何なるものとの複合であるか等の人類學的方面の事にも考究を進めねばならぬが元より之れ等專門外の事は余獨りのよくする所でない。

然し先學者の研究に據れば、我が田字形の間取りの源流とも考へ得られる程度に類似するもので、朝鮮北部の或地方の民家に斯かる形式の存在することは、今和次郎氏の報告に依つて明かであり、印度支那(?)のシャンとカチン族の住宅も亦我が田字形間取りと髣髴するものがある事を既に古く伊東博士が報告されてゐる。我が上代文化が各種族の複合文化であることは既に定説のある所である。されば此の間取り形式の如きも、勿論我國に於て案出されたものでなく、種族移動に依つて將來された形式が、天地根源の宮造或は其の發展形式と結ばれて茲に特質あるものとなつたのではあるまいか。

以上略記した所に依つて、余は疑問一二ならず、三乃至四を提出した事となるが、識者諸賢の批判並に示教を乞ふ次第である。

(附記) 本文に詳說し得なかつたもので、既に余の發表したもの、左記の如きがある。御參照を乞ふ。

一、A Study of the Prehistoric Dwellings in Japan (萬國工業會議プロシーデイング)

二、日本住宅史(雄山閣發行、日本風俗史講座)

三、春日權現靈現記住宅攷(早稻田建築學報、第七號)

四、護國寺月光殿(蘇苑巡禮、第一册)

—(奈良猿澤池畔旅舍にて)—

一

滿洲の面積は日本よりも廣く、住んでゐる民族も雜多であるが、ここで取り扱はうとするのは古來在住してゐる民族の住家に限ることゝし、露西亞人の傳へた北歐系の民家や、日露戰爭以後に於ける本邦人の住宅については一切觸れないことにする。

滿洲在來の民家を大別すれば、次のやうな系統になると考へて大過なからうと思ふ。

I 支那系民家
- a 切妻(瓦葺)屋根型
- b 陸(又は圓弧)屋根型

II 滿洲固有系民家

III 蒙古系民家

この中、最後の蒙古系、即ち半球形の移動(又は固定)民家は次第に西方に退却し、今では黑龍江省の西部、遼寧省(即ち奉天省)の西端方面に於いて見ることが出來るだけであるから、滿洲民家の中には加へない方がよからうと考へるので記さない。

以下右の順序に從つて、簡單ながら要點だけを說明しよう。足りない所は寫眞で補つて置く。

二

滿洲は支那と朝鮮との中間にあるため、民族や政治の史的關係が複雜であり、從つて滿洲文化の消長なども簡單には述べ難い。しかし大體に於いて、支那本土から絶へず支那文化が流れ込み、一方では滿洲固有の民族が支那文化を攝取しながら固有の風も發展せしめるといふ有樣であつた。

南滿、特に遼東半島に支那人が移住したのは漢代以前からであることが、文獻ばかりでなく考古學的遺蹟遺物の研究によつても明か

第一圖　影壁（支那系）。これは門の前とか又は門の内側などに設ける。邪惡の意味がある。



である。だから支那系の民家も亦隨分早くから滿洲に出現したことが推察せられるが、遺物の上では漢代の墳墓から出た明器の中に瓦製の竈や住家の模型が見出されるのみである。その模型から見ると漢代の住家の中には、既に瓦を葺いた切妻のものがあつたらしく、特に起り破風の傾向を示してゐる點を珍らしく思ふが、さうした民家がどれだけ廣く行はれてゐたかについては疑問としか言へない。

支那人が古來移住し、且つその子孫の定住繁殖したのは遼陽以南の地域であつた。つまり渤海や黄海の沿岸と遼東半島とであつた。政治又は軍事的勢力は一時更に北方まで伸びたことがあつても、間もなく固有民族に壓迫されて放棄するのが定則であつた遼東半島さへも高勾麗のやうな強大な民族が勢力を張ると支那民族は影をひそめざるを得なかつたのである。

支那民族が南滿のみでなく北滿地方へまで入りこんで根を下ろしたのは、全く清朝になつてからと言つてよく、著しくその傾向を強めたのは、清朝中期以後、特に十九世紀になつてからと見てよい。現在でも北滿へ入り込む支那人の數は（假令勞働者階級で過半は冬期歸鄉するものではあつても）年々百萬を下らない。時には政府の力で數萬の百姓を移住せしめて開墾せしめてゐる。かういふ情況であるから支那系民家が今では滿洲全般を席卷する勢を呈してゐるのは當然である。

それに反して滿洲古來の民族は益々影がうすくなる。三百年近くも支那を支配してゐた滿洲民族の如きものまでが今では全く支那化して滿洲固有の文化などは一小部に殘存してゐるのみと言はれてゐる。從つて滿洲風の民家なども遠からずして絶滅すべき運命を持つてゐるものと思ふ。

第二圖　門（支那系）。簡單な例。



第三圖　門（支那系）。中央が門で左右が門房である。屋根の大棟を三つに別ける所を注意。



三

現在至るところで見る支那風の民家について述べよう、いふまでもなく、單に支那風といつても滿洲の民家は北支那の系統に屬するものであつて、南支那の民家とは全く違つてゐる。

支那建築術では主建築を南面せしめ、主建築を通る南北の中心線に對し左右均齊に各種建築物を配置するのをきまりとする。上は宮殿から下は極めてささやかな民家に至るまでそれが守られてゐる。すべての建物は長方形の平面で、長邊に出入口や窓などをとり、短

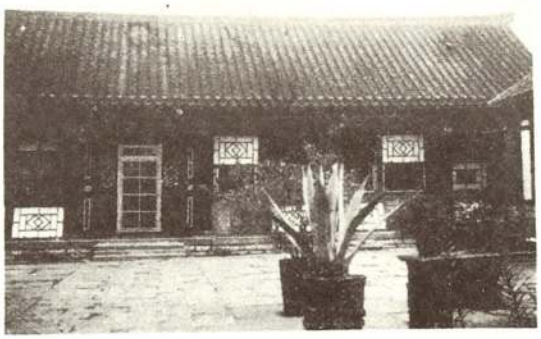
邊は大抵厚い壁に止まる。さうした矩形ブロックが東、西、南に向けて建てられ、互の間をつなぐ廊下などは一切用ゐないから、連絡がなく切れ切れのやうに感ずる。建物の大きさを表はすには、日本と同じように長邊の柱間の數により、三間房子とか五間房子などと呼ぶ。一間の長さは七尺位から十一尺位までであり、一定した長さではない。

門は普通南の中央に設けるが、市街地では敷地と道路との關係から東又は西に置くこともある。簡單なのは一間、切妻屋根、兩開扉の程度であるが、少しよい家になると三間、五間房子などで、中央一間を門とし、左右の各一間又は二間を門房といつて使傭人の居室にあててゐる。大きな家では更に奥に中門をとるのが普通である

第四圖　門（支那系）。中央の門の部分。支那瓦や欄間、持送などを注意。大門と中門とは一直線上に置かない。



第五圖　正房（支那系）。内庭には石が敷きつめてある。



門を入つたところには院子といつて廣い庭がある。庭の東西に三間又は五間の廂房があり、是は厨房、倉庫、家人の居室などに用ゐられる。庭の北に三間以上（五間、七間など）の正房があり、主人夫婦の住むところであつて、親しい客の應接室を加へてある場合が多い。

大きい家では以上のやうな配置を奥へ奥へと繰り返すだけで、極めて單調且つ平面的である。

重要な建物ならば必らず出入口が中央にあり、それによつて建物が左右に二分されて使はれる。居室は勿論靴をはいたまま居る所であるから、土間、煉瓦敷或は板敷になつて居り、室内の南壁に沿うて（時には北壁のこともある）高さ二尺位、幅五尺餘ある煉瓦造の高床を設け、日中は腰掛けとし夜は寢臺として用ゐる。寒い時には下に煙を通して床を暖める設備になつてゐるが朝鮮のオンドルよりも優れた點が少くない。是を炕（カン）といふ。

朝鮮のオンドルは室の全床を煙で暖めるのであるが、支那の炕は室の一部分のみに止まる。だから支那の有識者はカンとオンドルとを區別して呼んでゐるが、日本人は非常識にも混同して總てをオンドルと言つてゐる。辭書にまでオンドルとしてゐるのは感心出來ない。

外觀も亦單調そのもので、煉瓦壁から瓦に至るまで一切黒灰色の一色である。屋根は普通切妻に照りをつけてゐるが軒反りはない。前庭などにも日本風の築山などはなく、桶とか鉢に植えた花卉を對

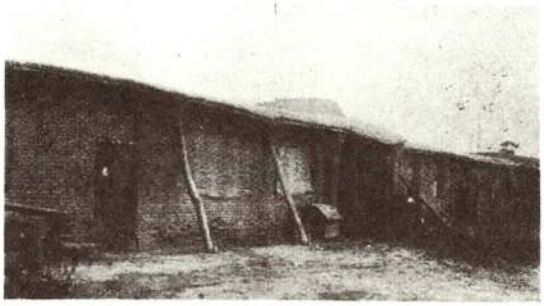
第六圖　主人の居室兼應接室の一部（支那風化されてゐるが、それでも未だ多分に支那系）。これは正房の一室で全く近代化した室を見える。



第七圖　陸屋根の家。これは南滿の家だから石積みの壁を用ゐてゐる。道に沿うた外壁には餘り大きな窓をとらないのが普通である。



第八圖　糧棧の外觀。穀物問屋には陸屋根の家が多い。基礎が淺いときは凍害をうけて壁が倒れることが多くかうした支柱を設けなければならない。



照的にならべただけである　日本の庭園に親しんだ者にとつては、驚くばかりの無味乾燥さであるがそれでも他の系統のものに比べると是は遙かに優れてゐると言つてよい。

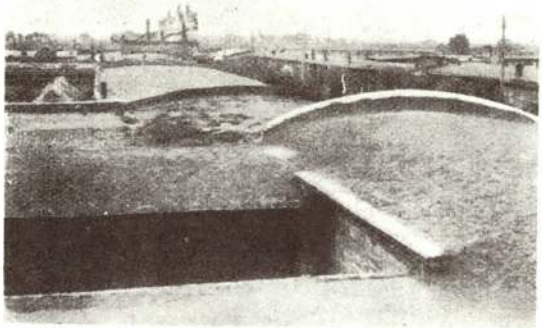
四

陸屋根といつても直線的ではなく圓弧をなしてゐるから、カマボコ屋根などと呼ぶ人もある。この系統の民家は滿洲の西半部、特に昔の東蒙古に屬してゐた新開地に多く、支那本土では河北、山西二省の北部、察哈爾省、それから西へ走つて中亞方面まで連續する。故に陸屋根系は西アジア、中央アジアなどの文化に屬するものと思つてよい。滿洲へ入つたのは僅か百五十年この方であるが、安價に出來るのと、土質が都合よいのとで新開地で喜んで用ゐられるため、數の上から言へば非常に優勢であるが、雨に對する抵抗力が少ないので、次第に支那瓦を葺いた家に變化すべき運命を持つてゐると思はれる。

泥をかためた日乾し煉瓦をつんで壁とし、細い丸太で圓弧狀の小屋組を設けた上に、高粱殻を敷きつめ、更に泥を表面に塗つて踏みかためる。我々は七月の雨期になる毎に、泥屋根が陷沒したありさまや、屋根に鹽をまいて踏みかためてゐる姿を見ることが出來る。勿論よい家になると石灰を表面に塗つてゐるのもあるが、さういふ例は決して多くない。

家の間取りや室內設備などは全く切妻屋根の民家と變りはない。

第九圖　陸屋根を俯瞰する。



第十圖　安奉線で見る民家（滿洲系）



住んでゐるのが同じ支那民族であるから當然であらう。住んでゐる人達もこんな家で滿足してゐるのではないが、諸事儉約の支那人であるし、瓦葺にして後の軍閥から課せられる莫大な賦金を恐れる點もあらう。

五

國家の治安に賴ることが出來ない支那人にとつては、一家が同時に一つの城廓でなくてはならぬ。特に馬賊の活躍する滿洲の田舍では、屢々高い煉瓦塀をめぐらし、四隅に一段高い樓を築いて銃眼が

設けてある例を見出す。

その防禦的構築のある家は、陸屋根系に屬するものが多いやうに思ふ。だから此の種のものは單に支那の城壁を小さくしたとのみ考へないで、むしろ新疆省や中央アジアなどで見る城堡式民家と關聯するものではなからうか。

六

滿洲固有系といふのは現在北滿の齊々哈爾（チチハル）附近や東部山地、例へば安奉線に沿う地方で見るものであつて、高粱殻を葺いた切妻屋根に泥壁、時には千木に似た交叉木さへも置いたものがある。門は日本の鳥居に類するものを用ひ、まはりの塀も丸太や板を以て造つてゐる。それから內庭には校倉に似た高倉のあるものが少くない。

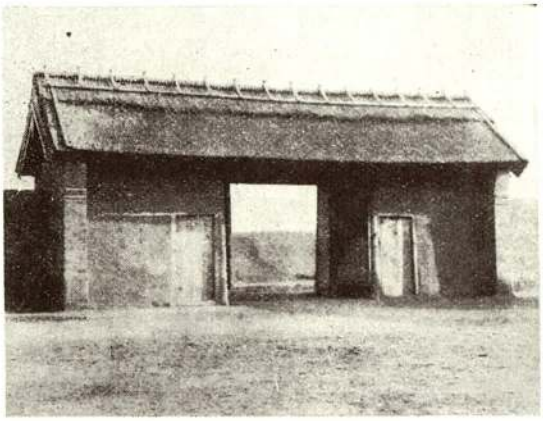
しかし滿洲系とは言つても、今では煉瓦壁や室の間取りなどが全く支那風になつてしまつたのがあるのは、二千年來東漸してゐる支那文化のことであるから、當然の影響といふべきであらう。それでも室內の炕（カン）は北支那風と違つて、南、西、北の三方に連續したものとし、來客も一家の者達も同室で臥床する風がある點に古風が殘つてゐる。未知の客でも行き暮れて一夜の宿を賴めば、心よく宿泊せしめ、支那とは違つて主婦が出て歡待するのが滿洲の古風であつたが、支那移民の增加と共に、さうした素朴な風が次第に消えつつある。

滿洲の民家は主建築が東南に向く風があることは昔から文獻に出てゐるが、今ではそれも全く支那化して南面するやうに變つた。斯ういふ風に滿洲固有の民家も、眞實の昔の姿は最早や正確なことが見られなくなつてしまつた。

吉林の町は支那化し

第十一圖　北滿チチハル附近の民家の門（滿洲系）。支那系の門に近いが屋根に滿洲風が殘つてゐる。

（亞細亞寫眞大觀寫眞）



第十二圖　高倉（滿洲系）。（東亞印畫協會寫眞）



第十三圖　吉林に於ける民家の門。これは勿論西洋風が加味せられたものであらう。



第十四圖　吉林に於ける民家の門。塀は支那風であるが、板による支那系構造の門は、全く滿洲の一特色と見てよからう。



靜岡の東本陣跡

松本儀八

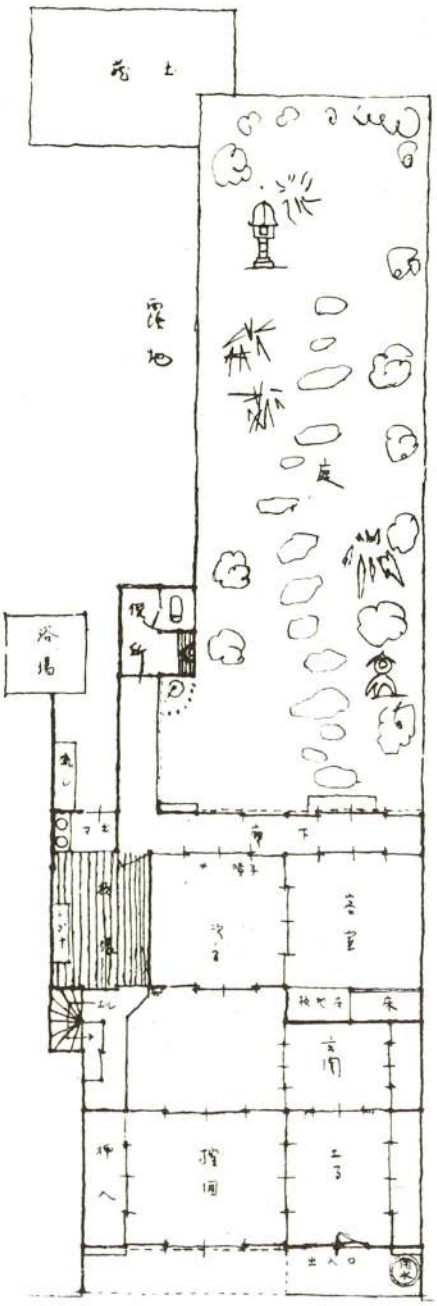
靜岡と云へば史上から其昔天領の地であつたことを思起さるゝものである。

東海道は五十三次の時代、諸大名達の道中の砌り其宿坊としてのつとめを果して居つた、東本陣が今に其ありし昔の面影を止めて居る。

本當の町名を正せば靜岡市傳馬町の平尾某氏所有の家が夫れである、其外觀も實にオツトリとした構へで、出入口の關係ハタゴヤとしての室の配置、特に高位の人の客間として、庭に面した、奥まつた坐敷のオチツキ、夫れに附屬したる便所の構へなど殊に面白い風情が夫れ等を通して認め得らるゝ其後此家は再度の補修を加へられたり當ては一軒であつたものを今では二軒の家として分割されたり して殘つて居る、夫から近く又或會社の事務所に宛てらるゝ樣子で、時代の變遷とは云へけなげにも色々と身輕をして奉仕してゐる譯である。

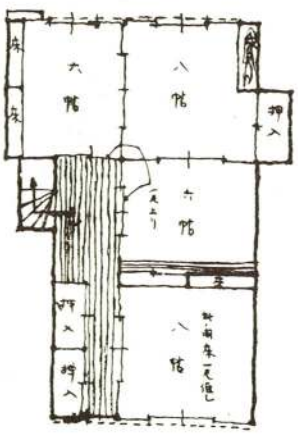
現存せる靜岡東本陣平面圖

一階平面圖



二階平面圖

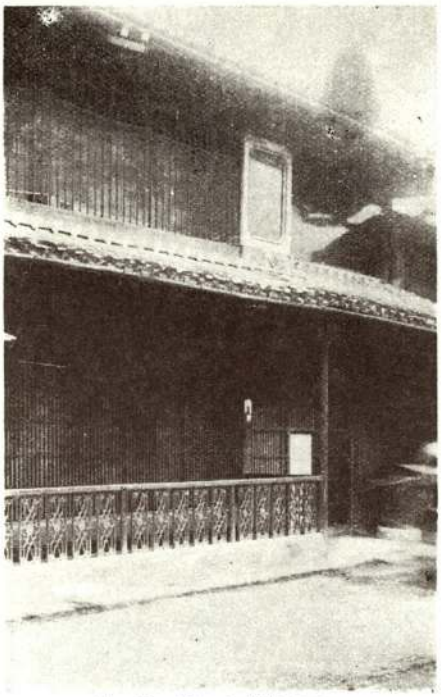
（在來の儘とす）



ではあても比較的滿洲風の名殘りが見え、附近から木材の產出が豐富であるから、煉瓦を餘り使はない建築が多い。特に塀とか門などには支那で見られないものがあり板で支那建築を模造したものも少くない。この板による模造は實に八百年も昔から北滿地方で行なはれてゐた形式である。

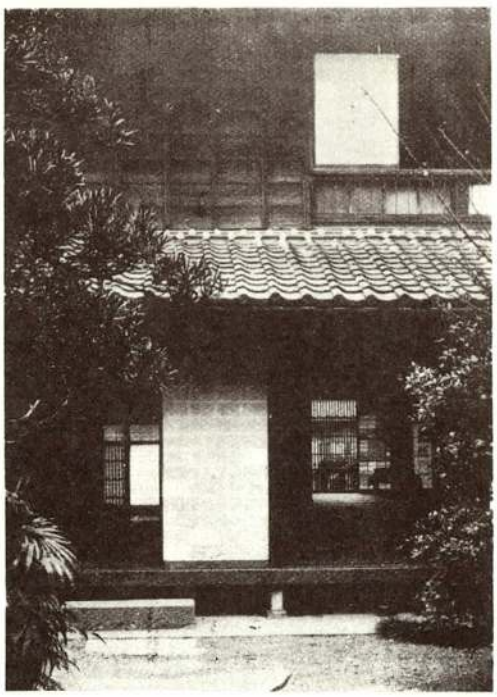
滿洲系は地理的位置から言つても、朝鮮と支那との中間に立つ建築型式を示すのが當然であるが、同時に日本固有民家ともつながりがあるらしい點を見逃がすことが出來ないように思ふ。

（昭六・四・八）



第一圖　靜岡東本陣表廻り

第二圖　靜岡東本陣主要な客間と庭との取合せ



第三圖　靜岡東本陣客間先の庭園



濃尾平野の農家

城戸久

一

昨年の本誌郷土建築號に於て、『名古屋の郷土建築』と題して一般商家建築、社本建築等の概畧は記したが、この地方に於ける農家建築に就ては何等記述を試みなかつた。從つて本年はその補足として茲に二三の貧弱な資料に依つて農家建築の概畧を紹介することゝする。

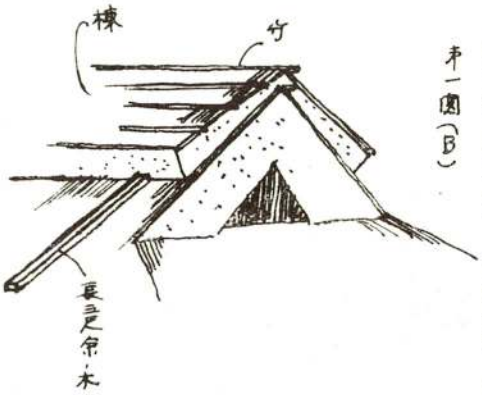
濃尾の平野は木曾、揖斐の兩大河の恩惠を受けて、土地肥沃、大古より相當文化の開發せられて居つたことはかの日本武尊東征の史實に依つても明であり、殊に中世になつては織田、豊臣、德川三氏の發祥地として、一時本邦文化の中樞を劃した地である。從つてこの地方に於ける民家の現存せるものには興味ある舊態を示せるものも多く見受けられ、郷土建築研究に好參考資料ともなるであらうと考へられる

二

濃尾の平野といふも、甚だ廣大であり、些細に觀察すれば一概には論じ難いと思はれるが、大畧名古屋近郊の農家に就て言へば、各農家は一軒毎に雜木の木立とか、竹籔とかで背面を覆はれたものが多く、あたかも武藏野の民家を見るが様である。そして此等の農家の建築形態で特に注意を惹くのは屋根で、屋根は一般に草葺入母屋であるが、その入母屋も京都の西郊あたりに見るやうな大きな立派なものでなく、甚だ小さくて申譯け的のものであり、或は四阿の寄棟から變じたものではあるまいかとも思へる。棟は箱棟の如くに大屋根と一段の段違ひがあり、この段違ひは名古屋近郊のものは約一尺ばかりもあるやうであるが、木曾、揖斐の兩河を渡ると甚だしく少くなり、なほ南に行くと全然消滅して、大屋根がずんべらに延び



第一圖（A）



第一圖（B）

て直ちに棟となつて居るものも見られる。そしてこの棟で特筆せなければならぬと思ふのは、棟飾りとも言ふべき二本の一寸角位の木が交叉されて、棟の兩端にのつて居ることである。第一圖Aは一般の棟飾りを示して居るが、中にはこれが二本の竹に置きかへられて居るものもあり、又この棟飾りが朽ちてその後そのまゝとなつてしまつたものか、或ひは最初から全然省畧したものかは判然としないが、この二本の交叉せる棟飾りの全く無いものも多くある。そしてなほ些細に觀察するとBの如く棟飾りが棟の中に納つてしまつて、足だけを長く大屋根の兩端に延ばして居るものもある。

此等の興味ある棟飾りの手法を考へて見るに、極く一小部落の中でさへも各入交つて居るので、何れが最古の手法で、何れが新しい

ものであるかは一寸想像もつかない。然し私の臆測かも知れないが、恐らく此等の手法は一括して原始住居の千木の變形ではあるまいかと考へられる。現にこの棟飾りの消滅したものも見受けられるのであるから、屋根葺の構造上必須用材とも受けとれないし、又全然獨自の裝飾手法とも思へない。從つて原始住居に見る千木の手法がかく一寸角位の長い木片を交叉して棟の兩端にのせることに遺こされたものであらう。そしてやがてこれが竹で代用せられ、竹ならば數年で朽ちるから、取りかへることもしないで今日見るやうに色々な形態となつたものと思はれる。



第二圖　名古屋市東郊の農家（屋根棟飾りに注意）



第三圖　名古屋市北郊の農家

この棟飾りの手法は特に興味ある點で、濃尾の平野は大古より文化の開發せられて居つた地でありながら、現在なほかゝる原始住居の俤を留めて居る農家の發見出來るのには、甚だ學ぶべきところが多い。即ち千木の形式は古くはかの寢殿造にも、書院造にも見ることの出來ない手法であり、又近くは町家建築、若しくは武家屋敷の建築にしろ、今日に遺るものは只に夫等の建築せられた當時に於ける建築形態を示すに過ぎないのであるが、農家の建築に於てのみ獨り千木の手法の如き原始住居の手法を今なほ顯示して居ることである。そして鄉土建築研究の一目的は實に此等の發展形態を研究し、かゝる事實の原因を探索究明することに寧ろあるのではないかと思はれる。

第四圖　名古屋市東郊の農家棟飾り屋根



三

次に平面に就ては一般各地の典型的農家平面とは大差なく、桁行は一定せないが、梁間は必ず二間半か若しくは三間に限られて居る。此れは當然德川幕府の家作制限の結果で幕府の施政方針は農民の生活をして極度に縮少させるといふ主義であつたから、住居に對する家作の制限も屢々行はれたのである。

家作制限の最初は寛永十九年五月に町村諸法度が出て『不似合家作自今已後拵仕間敷事』と記し、甚だ漠然として居るが、その後寛永廿年三月、元祿十二年、享保六年同七年寛政十二年（この年の尼張藩の制限では武士の邸、家作、間數、疊割等を定めて居る。――昭和五年五月本誌鄉土建築號に於ける拙稿參照）等回を重ねる毎に嚴重となつて居る。即ち享保六年の七十五個條御法度書には『新規に建候家は梁間可限三間候』とあり、同十四年の御條目では『新造の家梁間二間半庇一間、桁行六間』とあり、この享保の家作制限は全

國に行き渉つたものらしく、殊に濃尾の平野は御三家の所領であつたから嚴重に實行されたものが、忠實に裏書して居るものが存在する。即ち寫眞第一は梁間二間半のもので一間の瓦葺庇を葺下して居る譯けである。

四

濃尾平野の農家は以上の如く何等特殊の建築形態を示さないが、これを些細に觀察すればなほ幾多の興味ある問題を發見し得ることであらうと思はれる。思ふに今日『鄉土』の研究は益々盛ならうとし最近に於ては『鄉土教育』といふ一つの新しいテーマが教育界に興つて居る。これは眞に結構なことではあるが、その問題とする處を吟味考察して見れば、只都市的教育家の一時的な氣まぐれでもあるやうに考へられる。經濟的に疲弊して居る上に、あまつさへ都市より來る奢侈の誘惑を受けて居る農村の子弟にとつて、只漠然と鄉土美や、鄉土愛を教へ込まれた處で何等の糧にもならないのである。鄉土教育の提唱は實に欣ぶべき現象ではあるが、なほ多大の缺陷がありはしまいかと思ふ。と同時に鄉土建築の研究に對しても注意しなければならぬのは、農民の勞働所でもあり安息所である彼等の家をあたかも別莊でもあるかの如く觀察するやうなことは避けねばならぬことである。そして鄉土建築の研究は決して聲なき山川の讃美で絶對にあつてはならないのである。

（一九三一・四・八・四夜）

祖先の鄉土建築

德政金吾

吾々の祖先！其れは此國の先住民族である。コロボツクルやアイヌや熊襲、土蜘蛛ではない、外來者であるところの大和民族の祖先の鄉土建築とは果して何んであらふ？。

彼の天地根元の宮と稱する甚だしくプリミチーヴなものが吾々の祖先の鄉土建築であると吾々は教へられて居る。丁度其れは今日北海道に遺るアイヌ人の家屋に比すべき程度のものに過ぎない、否より以上に簡單なる半穴居的堀立小屋に過ぎないものである。

大和民族が此國への移住民であつた事は考古學や人種學にて證明して居り、只其れが朝鮮方面からと、南洋方面から渡來したとの二つの議論に別れて居り、何れも其れを明確に立證し得る域に達して居ないが、併しながら其移民當時即ち今より二千五百餘年前に於ける此國民族の文化は、決して、今日吾人の見る所のアイヌ族と同一なる文化の水準にあるものとは思はれない。

彼等は長さ四尺（八握―一握五寸として）に超ゆる銳利なる劍を持つて居る。其鞘には黃金を以て五十の鈴と天宮とを彫刻して居る（人皇正統記）白銅製の八花の鏡がある。白銅の神璽がある、蜂の比領、蛇の比領、其れは多分蜂の羽の如き薄物の布及蛇の皮の如き紋樣ある麻製の織物であつたであらふ。又瀛津鏡とは航海圖で、邊津鏡とは地圖で、生玉死反主とは藥品であつたものと推定さるゝ。然らば其文化は非常に進歩發達して居た民族と認めらるべく、決して彼の天地根元の宮が其鄉土建築でない事は明かであつて、其れは先住民族の建築であつて大和民族本來の建築ではなく、此國土に存在せる建築を借用したに過ぎないと推定さるゝ。

天地根元の宮に比すべき多分に類似點を持つ建物が南洋方面や又マダガスカル島の一部に現存する事に依つて、又ジヤワ島やフイリツピン島の一部に其風俗や言語やの類似せるものあるを以つて、其處を大和民族發祥の地と斷定するは如何なるものであらふ。無論其れは或過程の關係を有するものと認むるが、其過去の國家的文化に

照して、大和民族の故郷はモツト〳〵強大なる高程の國家を形つて居たものでなければならぬ。

　畔倉の建築法が彼の丸太を組合せて造る現在のシベリヤ農家と類似せるを以て、吾々の鄉土が其處に在ると斷じ其建築を吾々祖先の鄉土建築と認定することも早計である。

　吾々の建國の以前に遡つて其鄉土がヒリツピンや、シベリヤ又は滿洲の一部にあるならば、我々の中世に於ける勇士達は其故國との交通を續けたであらふ。丁度支那や朝鮮又は印度とに於けると同樣に其交通と文化とは不可分にあつたであろふ。

　此點よりしても吾々大和民族の鄉土が支那や朝鮮や印度ではない事は明瞭である。然らば西藏か、馬來か、此等の東洋諸國は吾人と關係はあるが其鄉土とは思はれない、然らば何處に求むべきであろふ?。

　吾々の祖先の鄉土は吾建國の以前に於ては强盛たる國家を形成し吾建國の前後に於て衰退したる國家であると推定すべきことは、我國最古の國史なる古事記上の記述より歸納し得る。即ち天神五代地神七代の所謂神代時代には其本國高天原との交通及交涉は相當强度の關係にあつた事は、同族にして、先住移民たる出雲族に對する本國の壓迫大和民族中に主權者を選任せる等の重要事項の決定權は、一に高天原に於ける神々の掌中に存在して居た事は、如何に本國が强大なる文化國であつて、單なる南洋や滿洲やの一首長國でない事は明瞭である。然るに神武建國の前後よりして歷史は其本國と何等の交通の事を示さず、今日吾人をして神代時代の史實を疑はしむるに到つたことは、實は其當時に於て其本國は衰亡し、高天原は覆滅したる爲め本國との交通は永久に杜絕した結果であると推定すべきである。

　斯の如き條件に適合する、即ちBC六百六十年（我建國の元年）前に於ては高度の文化國に達したる國にして、其前後に於いて衰退したる國家は果して何處に存在するであらふ?

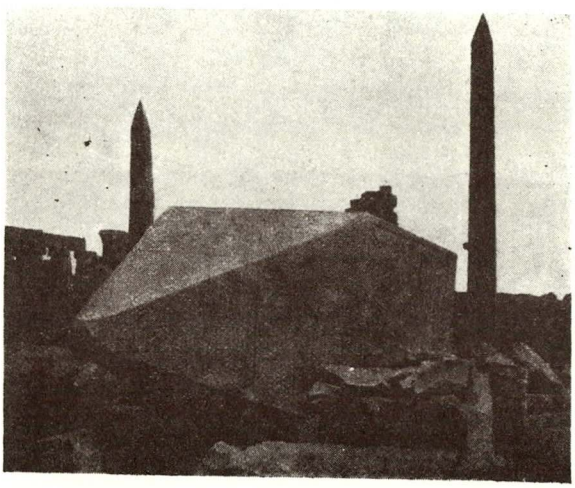
　吾々大和民族が移民であり、先住民族たるアイヌ其他の種族に代つて此國土を開拓した事は前述の如く、我考古學や人種學の權威者の等しく認識する所で、又一般にも而く信ぜらるゝ所であるにも拘らず、其本國に就いては今日尙杳として不明に屬して居る。

　大和民族の祖先を語る神話も只其儘に受け入れるには現代は餘りに科學的である。然しながら若し假りに吾々が信仰の上より其史實を明かにする事を欲せず、其研究に目を覆ひ耳を塞ぐとしても、世

アメン神殿の入口



アメン神殿の現在



界の科學は其鋭いメスを遠慮なく吾々の神話に加へて其れを解剖し實證して、吾々の承認を餘儀なくして其不明固陋を笑ふであらふ。

吾々は吾々自身其問題を解決すべきである。

高天原が何處であるかと言ふ過去への探究は吾々の祖先が何處から來たかと言ふ事を立證する鍵である。從來高天原の解釋は歷代の學者に依りて種々異つて居り、或は天空説又は胸裡説等が勢力を占めて居たが、素より滿足すべき程度に到らないので、最近には非科學説は漸次省みられず、地上説が有力になりつゝある。

地上説では北方派と南方派とに別れて、一は高天原を滿洲にありと推し、他はヒリツピン群島中に其存在を探求して居る。然しながら前述の如く大和民族の祖先の本國は高度の文化國であつたのであるから、假りに其處に何等かの遺跡があるとしても、其れは此國土に來る途中の滯在の遺跡にして、其本據は遙かに遠く西方にあつたのである。

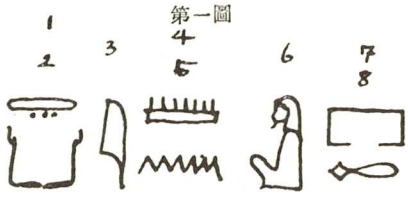
埃及史を繙くときアメンと言ふ神があり、其れは始めはテーベ市の氏神であつたが、第十二王朝の始めの王の登極を支持して一躍國神となり、其王は其神名を冠してアメン・ムヒト一世と稱せる事は餘りに有名である。其後此神は歷代王の最高神としてアメンの神殿又はカルナツク神殿として、其建築の壯大秀麗なるは今日尙其廢跡でさへ世界の驚異となつて居る。此神殿は紀元前六百六十三年神武建國の三年前、アツシリヤ王アスウルバシパルの爲めにテーベ市と共に無人の廢跡として破壞奪掠される迄國民信仰の的であつた。其後十八王朝にはアメンヘテプ一世又はアメノホリスと言ふ英主が出で、其他アメンを冠する王は多數輩出して居るが、皆アメン神の子と言ふ意味で、其名號を冠して居る。アメン神殿はアモン又はアンモンとも呼ばれて居るが、其は多分羅馬領後の稱呼ではないかと思はるゝ、正しくは即ち象形文字の發音はアメン又はアメノである。

我々の神代及建國後に於て王にも臣下にも天の即ちアメノを冠する神、又は、人の多きことは、顯著なる事實である。而して其れは姓氏とも思はれない點に疑問がある。

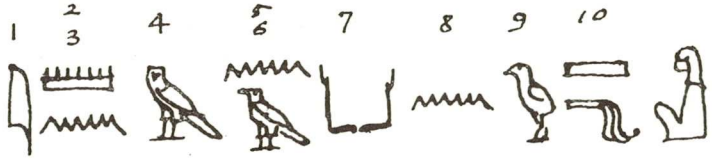
高天原を埃及象形文字で解いて見る。元來高天原は歷史の上から見て、或場所を指したる事は明かである。而して其文字の上から『タカ』は形容詞でアメノは名詞でハラは場所を表して居ると解すべきである

第一圖の埃及象形文字(1)はタ(2)はカ(3)はア(4)はメン(5)はヌ又はノ(6)は神を表す(7)はパル(8)はヤと夫々發音する、即ち其發音

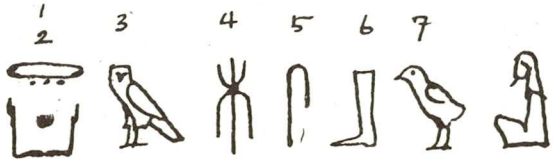
第一圖



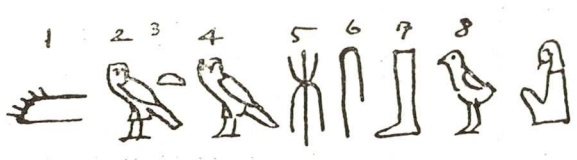
第二圖



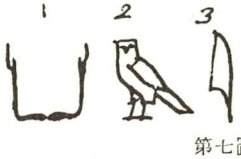
第三圖



第四圖



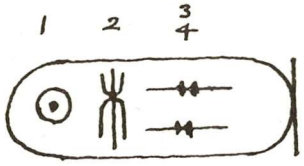
第五圖



第六圖



第七圖



はタカアメノパル(ヤ)となる。而して其意味はタは土地と言ふ意味でカは靈又は高聲と言ふ意味で只單に高いと言ふときは第六圖の(1)(2)がカと發音し上と言ふ意味で、第一圖の(2)は其代用として入れたもので斯の文字の方が適當であると信して置代へたものである。(3)(4)(5)のアメンは其本來の意味は『隱る』と言ふ意味であるが(6)の記號でアメン神となる。(7)は建物の意味で(8)を附すとき大建物即ち宮殿、大神殿と言ふ意味となる。

我が國語原即ちハラは又パルとも發音さるゝ。然らば我が高天原は上埃及のアメンの大神殿を指して居る事となる。

アメン神は又太陽神ラーを合祠してアメンラーと稱して居る、而して神聖と言ふ意味はヘルと言ふ。是も又高天原に近い發音となる、何れにしてもアメン大神殿を指す事に變りはない。

吾々の祖先の鄉土建築はアメンの大神殿である!!

我が高天原とは上埃及アメノ神殿である!!

此神殿の覆滅と共に埃及王朝も事實に於いて我建國の三年前永久に亡びて居る。アメン神殿には多數の神官があり、又國王は神官の長であり、又此神團は王の廢立を左右する程の勢力を有して居り、時には此神團から出でて王位に登つた事もあり、要するに政教一致であつた。

吾々の上代人が『アメノ』を冠する人が多いと前に述べたが、其れはアメ神團から派遣された人々であつたからで、其名稱が姓氏と思はれないのは其爲めである。

埃及第十九王朝のラムセス三世が商業を奬勵した爲めに、埃及は當時世界(西半球の)の商業の中心となり、各國より埃及に集合する商船は頗る多く、埃及も又地中海及紅海に艦隊を置きて商船を保護せし爲め海外との交易は非常に發達し、埃及の商船はアラビヤの港灣を介して、極東よりの商船と交易したと歷史は記述して居る。極東とは果して何れの國を指したであらふ?多分當時相當の文化に達せる支那の商船ではなかつたか。果して然らば其支那の東に蓬萊の島があるとの物語りは埃及人に知られたものとしての推測は不合理の事ではない。

遠征好の埃及人。又日の神への絶對の信者なるアメン神團の人々が、其光明を尋ねて、又未知の土地への好奇心とは其遠征を實行するに充分の力を持ち、其文化と富とは王の同意を得るに易々たるもので、先づ陸行隊はウラルアルタイ系の語原を遺して、朝鮮を經て出雲民族を形成し、又海上隊はマダカスカル島より赤道に沿ふて東航しジヤバ島に其遺跡を止めて更に東北に向ひヒリツピン群島より台灣東海岸を沿ひ琉球を經て日向南端に到達したものと推定さる。此實證に就ては我國よりヒリツピン島迄は、北里蘭氏の『日本語の根本的研究』が或程度の史實を物語つて居る。勿論其主張に就いては茲に言ふ所のものとは相違して居るが、恐らく同氏の研究を進むる場合は當然茲に言ふ所の根元に到達する筈である。

高天原が上埃及のアメンの神殿とするならば、其處に存在する神名は又我國史の內に存在しなくては、單にアメンと言ふ名と『天の』と言ふ名が一致せるとの理由丈けでは信ずるに足らない。是は誰しも言ふ所である。嘗て木村鷹太郎氏が、埃及のギゼの第三ピラミツドの建設王ミケリヲスと我神武の皇兄三毛入野命と同一人なりと主張されて居る。所が此ミケリノウスは紀元前三千年頃であつて、神武の建國は紀元前六百六十年であるから、其年代の相違は實に二千三百四十年で餘りに年代が相違するので、世の認識を得なかつたではないかと思はるゝ。元來此王の神聖名はメンカウラーであつて、其第二の名がミケリノウスであるが、此第二名に疑ふ點がある。其れは語尾のウスであるが、元來埃及固有の名には少なくも中古以前にはウスと言ふ如き名前はなく、多くはペルシヤに征服されたる以後、乃ち希臘名の影響後のものではなからふか、其れから歷代王のミイラは時とすると、他の古き王の墓を借用する例があるから、紀元前六百六十年頃の皇兄のミイラがたま〳〵第四王朝の墓に合祠されてあつたと解釋するは不可能ではない。現に第廿五王朝には或神官出の王の如き其ミイラを隱匿するに古代の王墓を借用した史實がある。隨つて此皇兄の問題が年代の相違のみを以つて荒唐なりと片

付ける事は粗忽である。殊に吾々の祖先の鄕土建築が、アメン神殿であると主張し得る今日尙研究の餘地あるものとすべきである。

アメンと天のが似てゐるとの理由丈けで、アメン神殿が高天原だと斷定するは早計であると批難さるを避くる爲めに、更に古事記中の神名を象形文字に譯して見る。

第二圖は天の御中主の神の譯である。(1)(2)(3)は前揭の如くアメノと發言する(4)はム又はミ(5)(6)はナと發音し、調和又は一致の意味で(7)は既出(8)はノ(9)(10)はウシと發音し、大人又は古老の意即ち此神の日本名は埃及語にては、アメン神と一致する至上の神——アメンラー神を指したものである。

次は高御産巢比神

第三圖は此神名の埃及譯なり、(1)(2)はタカにして既出の如く上埃及を指す、(3)はムにして英語のFrom又はWithに相當する、(4)はムスと發音し產むと言ふ意、(5)はスと發音し接尾語にして(4)と合してムスと讀む、(6)(7)はブにして場所と言ふ意、即ち上埃及に於いて產まれし神と言ふ意味である

次は神御產巢比神

第四圖は此神の埃及譯なり、(1)(2)(3)はカムトと發音し『黑い土』との意味を表し埃及の國名であるが、主として下埃及の肥沃の地を指す、而して(3)のトは土地の意味であるが此場合省略して差支なく(4)以下は前記の三圖と同一なるを以て此神名の意味は下埃及に於いて生れ給ふ神との意味である。

王朝時代の埃及には丁度我國に於ける夫れの如く村、町、市等に夫々氏神を持つて居る。而して其神は様々の種類がある。アメンラー神は埃及最高にして萬神の親である、故に其中央に天の御中主神を祭り、左右は上下埃及の產巢比神即ち兩地の八百萬神の代表神を祠ることは當然である。

第五圖は神の象形文字で是をカムイと發音する靈來るの意味である。吾々が今日神を祭るときは降神の祝詞を奉つて靈を招來して居ることは、此象形文字の意味に合致して居て面白き事實である。

第七圖はラムセス三世の記號で(1)はラー即ち太陽神、(2)は第二圖の(4)と同じくムスで、(3)(4)は第三圖の(5)と同様にスと發言す、即ちラ、ムス、ススとなる。然るに是は英書ではラムセスと發音して居る。意味は太陽神より生れたる王の意である。吾々の國語の產巢は埃及語のムスと意味も發音も全然同一であるとは、又其他の吾人の神名や意味が、埃及語に置き代へて何等の無理もなきとは抑々何を語るものであろふ。埃及の歷史は吾が建國の以前には、其文化は燦として世界の何れよりも高度に輝き、而も吾紀元の三年前衰退して且我移民の本體なる高天原は破壞され、其交通は永久に失はれたのである。從來歲月は約二千六百年其言語も文字も多大の變化を生じて居り、是が對照は至難の事であるが又必ずしも不可能の事ではない、且又無用の詮索でもない。

天地根元の宮の代りに自分はアメンの大神殿を大和民族の鄕土建築であると發表し得た事を愉快と思ふと同時に、此發表に先つて伊勢と畝火とに參拜した事を附記して置く。尙前述の次第で埃及の象形文字は我國の何處かに遺つてゐると思ふ。彼の肥人の書の如きは其一例ではあるが、若し讀者中に其等の疑問のものを發見されたら御一報を願ふて共に研究をしたいと思ふ。

舊府廳舍の建築

葛野壯一郎

大阪に殘つて居る洋風建築の最も古いものと言へば江之子島に現存する舊大阪府廳舍、今の大阪府工業奬勵館である。造幣局内にも古いものが殘つて居るが舊府廳舍はそれと殆んど同時代、明治六年(?)の建設とあるから最注目に値する好個の紀念建築と言つてよからふ。

建築當時の一件書類は今も府の土木課に保管されて居る筈である自分は府に在職中しらべて見た事

が有るが凡て直營工事で、材料にしても手間にしても今からは想像もつかない程安値なもので有つた事を記憶する。それで居て總工費六萬圓を要したと言ふので有るから、當時の大阪に在つてはと言ふより初期明治政府の事業として、可なり刀こぶを入れられた大工事で有つたに違ひはない。

當時の事情が如何うで有つたか吾々には委しくは分らないが、無論政府は相當貧乏で有つたに違ひない。其貧乏政府が六萬圓と言ふ當時にあつては可なりの大金を投じてかゝる大建築をやつた事にはそれ相當の理由が無くてはならない。勿論工費の大部分は大阪の富豪から體のよい御用金を命ぜられたものと想像する。これは私の想像に過ぎないけれど其頃の事情から考へるときつと左樣で有つたらふと思はれるので有る。事實としても一二の古老からそんな話も聞いた樣に記憶する。



第一圖　建增前の江の子島の舊大阪府廳舍（建增は明治四十三年（?）野氏府營繕課長時代）

大阪の人はつい先頃まで府廳舍とは呼ばずに『政府』と呼んで居つた。是れは頗る面白い事實で府縣廳舍を『政府』と呼びならされた例は恐らくは他にないと信ずる。つまり建築當初の目的では一府縣廳舍では無く明治政府の威力を示す代表的建物で在たのである。

當時の政府人は此建設によつて、大阪人に一大威壓を試みたものと考へるのが至當で有らふ。たしか前記の府土木課にある建築當時の一件書類にも『新政府建築云々』と言つた樣な文句があつたと記憶する。『政府』と言ふのは單に大阪人の呼びならはしでは無く、お役人自らが『新政府』と呼んだので有る。決して府廳とは言はなかつたらしい。其爲に一般大阪人も『政府』『々々』と呼びなれてつい近年まで其習慣が殘つたものらしい。

次に面白いのは位置の撰定である。明治初期の大阪の狀況からすれば、今の江之子島は西の端に當つて居る。決して市の中心ではない。當時誰れが知事であつたか調べても見ないが斯樣に偏在した位置を撰んだには有力な理由が在つたに相違ない。

神戸大阪間の鐵道の開けたのはたしか明治八年(?)と記憶するから、『政府』建築當時には未だ鐵道はない。主として水路海路に重きを置かれるのが當然で有る。卽ち安治川を前に木津川に面して海から入る大阪の目貫の位置と目さるゝ今の場所が撰定され、建物も西向に嚴然と威力を示したので有る。現在の府廳舍がわざ〳〵上町に持つて來て、然も大大阪をおしり向けに東面して建つて居るのとは面白い對照の樣に感ずる。當局の頭の程度が思ひ浮べられるでは無いか。

『新政府』の建築と共に附近がめき〳〵と發展した事は想像にがたくない。『新政府』の對岸川口町一帶は外人居留地で有つた。柳の並木のある美くしい道路が有つて、外人の住宅やら商舘、學校、教會



第二圖　現在の舊府廳舍（現在は大阪府工業奬勵館と改稱）（協會藏版 No.3033）



第三圖　舊府廳舍正門（現大阪府工業奬勵館）（協會藏版 No.3034）

病院なぞゝ言つたものがならんで居た。今では殆んど其面影すら無くなつたが、自分の小學時代は此邊は非常にハイカラな綺麗なところで有つた。

船津橋の下に今一つ安治川橋と言ふのが有つた。古くは『磁石橋』と一般に呼ばれて居たが大船の出入を自由にするため、磁石の様に廻轉する構造であつたらしい。何んな構造で有つたか今はつきりしないが、其當時の寫眞でも有れば面白いもので有つたらふと思はれる。

舊府廳舍の設計は常時造幣局のお雇外人技師であつたさうで有る。たしかキンデルソンとか言つたよふに記憶する。現存造幣局の諸建物も同人の設計であるは勿論である。專門の建築家では無かつたらうと思ふが果して如何だかよくわからない。

自分の府在職當時大阪の事情に通じた議員などの話にきくとキンデルソンに設計は依頼したが報酬が高すぎるので、そつと圖面だけを寫しとつて外人の方はお流れとし、日本人の手で全部やつて了つたのだと言ふ事であつた。其頃の政府人のやりさうな隨分とずるいやり方で有る。棟梁は堂島邊の人であつたさうであるが成る程左様聞けば、左様かと思はれる節が無いではない。

現存のものは建築當初の面影が大分失はれて居る。大正三四年度にわたつて時の大久保知事の發意で大改造をやつたのである。今から考へると慌しい事をしたやうに感ぜられるが止を得ない。今日見る兩ウイングは其時の增築で、元はペジメントのついたもつと小いさなものが翼をなして全體の形をまとめて居た。

正面玄關や中央塔屋は大體に於て元形を保存して居る。內部は凡べて改造して了つたが只中央ホールだけが略々昔のまゝで有る。デテイルの大まかな天井の高い凡てが堂々たるものであつた。

窓廻りや軒蛇腹の繰形や正面玄關コリント形石柱のキヤピタル等當時の日本人が外人の圖面にまねて造つた稚拙な面白さがよく味はれる。全く無經驗のものがこれだけに仕上げたのは稱讃に値すると思はれる。

增築の部分は木造で有るが舊府廳舍は全部煉瓦造で有る。堺邊で燒いたものであらう。取こはしの際にしらべて見たが、燒きも相當な煉瓦がつかつて有つた。セメントの我國で初めて造られたのは明治四年であるが、未だ府廳舍新築頃には間に合はなかつたか、全部石灰モルタルで入念に積まれて居る。增築の際しらべて見たが龜裂らしい箇所も見當らなかつた。濃尾の震災の時にも玄關左の柱に四分ばかりの目違ひを生じただけで有る。是れは增築當時石屋に目立たぬやう叩かせて了つた。

基礎も入念に出來て居る。厚三尺ばかりの石灰コンクリートの上



第四圖　安治川に架けてあつた磁石橋向ふの塔の見えてゐる建築物は江の子島の舊大阪府廳舍
（鶴丸梅太郎氏祕藏實體眼鏡寫眞による）

に御影の尺角程の切石を並べて、其上に煉瓦の根積が有つた様に記憶する。木製の間仕切等は殆んど無く、壁體は凡て煉瓦積で有つた。

床は木造で有るがそれが全部檜であつたには驚かされた。增築の場合檜の古い梁をひかせて窯出入口の建具や腰羽目材に利用した。木材界の事情が今日と全くちがつて居つた事が知られる。

正面玄關の片蓋柱は欅材である。たしか池田近在の村社の森かなにかに有つた巨材をひかせたのだと話した人も有つた。事實が如何か知らないが、そんな事も有つたので有らう。前記土木課にある一件書類中の明細帳によると、木材の如きも才何錢と言ふ驚く可き安いもので有つた。

當時はひとり府廳舍に限らず他の郡役所等の最も古いものを見ても、凡て檜造りで有つたから檜材の如きも可なり豐富にあつたものであらふ。檜造りの郡役所建物が坪當り十數圓程度で出來たので有る。實に今から思ふと夢の様に感ぜられる。

大阪名物の『政府』も現府廳舍の新築と共にあぶなく取こわされさうで有つたが、やつと命だけは取とめて今は大阪府工業奬勵館の名稱の下に保存せられて居る。誠に結構な話しである。只遺憾に感ぜられるのは大切な雨翼をこはして了つて增築やら修築のために、折角の舊觀がいたく損ぜられて居る事實で有る。しかもそれが自分在職中にやつた仕事で有るから、今となつて見ると誠に殘念でならない様な心持がするので有る。（了）

與力屋敷を捜す

鶴丸呆二

私は今與力町を歩いてゐる。

昔は練塀の屋敷が續いて町奉行與力衆が式台を踏んで出入した靜かな屋敷町であつたらうが、今では小賣商人が軒を接して、硝子工場からは盛んに煤烟を降らし午后の日ざしが暗澹としてゐる。硝子工場に働く朝鮮の人々が三々五々菜葉や干魚を購つたり軒先に無爲に蹲つたりしてゐる、横町には漢藥の店舗まであつて一間に間中の軒店に白衣の朝鮮老醫が草根木皮を並べて白髯をしごき乍ら故國其儘の衣冠をつけた老人と長い煙管を口にして閑談に耽つてゐるなど



第一圖　天滿與力町に殘れる與力屋敷關根氏邸正門（藏版協會 No.3035）

これが大阪の昔の與力屋敷であつたとは夢想だに及ばない、漸く尋ねあてた一軒は市場と軒切りとに煽はされて今は其一部より存してゐない尙最近迄一軒八田某といふのがあつたそうだが今は何處かへ移つて見當らない、元祿八年刻の公私要覽に西與力町の北側に八田軍平といふ御普請與力があつたそうだ、かの明元元年正月に朝鮮から鷹を獻上に使した使節の中の崔天宇といふものを鈴木傳藏といふ對州の士が双傷に及んだ時これは明和四年亥二月十八日より角の芝居嵐雛助座にて新狂言として並木



第二圖　與力屋敷關根氏邸玄關（協會藏版No.3036）

正三作世話料理鮓庖丁と題して芝居に仕組まれてゐる池田の饅頭屋といふ旅籠屋で取押へた御町奉行組下八田五郎左衛門といふ人があるが彼の最近迄あつた八田といふ姓の家がこれと何等かの關係があつたなら求めてゐるよき料材が得られたのだが惜しいことである、それにしても朝鮮の使節と關係のある與力町に現に殆ど朝鮮街を髣髴してゐるとは皮肉にも面白い。

失望して南同心町へ廻る。

與力町より稍明るくはありあの喧雜も少ないが小さな長屋が建て連らねられてこゝにも屋敷町の面影を止めてゐない東を見ると煤けながらも芽をふいた樹の影を認めたのでもしやと勢づいて歩を速めた果して昔其儘らしい表構を見ることが出來た、主人を訪ねて敷間から玄關台所を撮らしてもらう、玄關の天井から釣つた鎗掛け、台所の揚げ下げ障子、流し、總べてが舊幕時代の匂ひで漲つてゐる霰小紋の上下に二本さした姿が眼に浮ぶ、黄昏が近づいたので再調を期し辭しての歸るさ街角に造花の花環業々しいので近づくと近頃ぼつ〳〵と出現した揚弓場の開業で近所の若い人達が弓を握つてゐるあのあたりには舊記をくると確かに與力同心衆の射場があつた譯だ皮肉に今復活してゐるのが可笑しい。(昭和五年春記)

附記玉造に御族抱方與力の家が一軒位は殘つてある筈だが調べて見たいと思つてゐる。



阿彌陀池の圖

鄕土建築座談會

小林利昌
南木芳太郎
江崎政忠
鶴丸梅太郎
今井貫一郎

編輯同人
高橋榮治
小西一良
本間乙彦

春雨の烟る若葉の宵ここ『アミダ』池『二葉』亭で落ちついて、話題も環境ととけやつた『鄕土建築』をおのがじし心ゆくばかり語り過ぎ語り來て春宵一刻價千金まことに收穫多き一夕であつた。

(記者)

本間　御挨拶を申上げます、今日は態々雨が降り路の悪い所をお運びを願ひまして、甚だ恐縮でございました、實は是まで建築協會の編輯部の方では年に一回づゝ鄕土建築の研究號として、餘り世間から顧みられないで、段々壞されたり、廢つて行きます建築物を今に於て成べく記錄して置きたいと云ふやうな意味で、斯う云ふ風（實物）な特輯號を出して來たのでありますが、併し私等若い者のやることでございまして、どうも餘り鄕土知識に詳しくないものでございますから、珍しいものを見落したり、又判りませなんだりしまして、甚だ遺憾な點がございますので、今年は一つ皆樣にお集りを願ひまして、座談會の形式で色々お話を伺ひましたら、大變得る所が多いだらうと云ふので、お運びを願つたやうな譯でございます、それでお話は建築協會の催しであるからと云つて、決して堅苦しい建築の技術上のことに關してと云ふのではございませぬで、唯建築に聯關したことは何なりとお聽かせ下さいましたら、洵に仕合せでございます。

小林　古い鄕土的の建築なら、今の中に速く堺へ手を着けたら可いでせう。

本間　所が大阪には區劃整理なんかが盛に行はれまして、昨日あつたものが今日は無くなると云ふやうな狀態でありますから、兎に角手近からやらなくちやなりませぬのと、もう一つは社寺だとか其の他由緒ある建築は割合に保護されて居ります、史蹟に指定された

り、國寶となつたり致しますが、一般の民家、商家だとか云つた類のものは何等の保護が無いのですから、どし〳〵遠慮會釋もなしに壞はされるのです、それが甚だ殘念なものですから、是までも氣づきましたものは成べく寫眞を撮りまして、其の數も大分のものになつて居るのでございます。

今井 マア江崎さんが見えたら鴻池のことをお話し願ふのですね

小林 マア何ですね平野屋とか加島屋、それに長田と云ふのを御存じですか、あれは矢張り加島と云つて、住友銀行になつて居る所で、古くは銀行集會所になつて居りましたが、立派なものでありました、それから大體昔は表を粗末にして中を綺麗にしましたな。

南木 大阪では皆さうでしたね

本間 何とか民家のやうなものの保存法ですね、無論全部を保存すると云ふやうな馬鹿なことも出來ませぬが、其の外觀の一部なり或は特長のある部分を保存すると云ふやうなことが出來ないものでございませうか。

高橋 どうも段々日本の古い建築は滅びてしまふものと思ひますな。

本間 それを何處か一部分移して保存すると云ふやうなことが出來ると可いのですがね。

今井 マア段々あゝ云ふ高層建築が出來て行くと云ふやうになりますと、誰でもが古い建築を全く滅くしてしまふと云ふのは惜しいものだと云ふ氣になるものと見えて、あの倫敦の何とか云ふ町には特にオールド・ハウスと云ふものが遺されて居りますが、ステープルイン(馬宿と云ひますか)と云ふ矢張り二三百年以前の建物と思はれるものが町の誇りとして立派な建築の中に遺されて、それを一つの見物場所として居ります、詰り立派な建築を見に行くと同時に倫敦の古い建築を見に行く一つの名所になつて居る譯であります、マアさう云ふことが必要ですね。

本間 それは僅なものでも可いのです、例へば防火地區とか何とか云ふやうなことで、建築の取締上さうしたものを置けない場所もありますけれども、何處か公園の一部なり、或は裏町の方に一廓を劃してでも、其處に壞し屋に賣つてしまふやうな建物で極くテイヒカルなものを持つて來て建てゝ置くとかしたならば、昔の大阪の町が何時までも遺つて居ると云ふことになつて可からうと思ひますから、是非一つ有力な方々の御後援でさう云ふ計畫を實行したいものだと思ひます。

南木 私なんかも御尤もに思ひます、新しいものをどん〳〵建築すると同時に古い建築を保存すると云ふことが兩立しなければ止むを得ませぬけれども、方法に依つては全然保存せられぬと云ふことはないから新しいものをどん〳〵拵えると同時に古いものを保存すると云ふやうなことにしたいものですね。

鶴丸 瑞典には內部まで其の儘にして農民を住はして居ると云ふやうなものがあるやうですね。

小西 其處までは難しいでせうけれどね。

本間 それは有名な人が居つた家であるとか云ふやうな意味のものと違ひまして、單に家屋としてでありますが、寫眞を見ますと、丘陵の森や林のある所に昔の儘の農家と云ふやうなものを集めて列べてある譯ですが、市中の殊に路幅の狹かつた大阪の家なんですから、さう大して廣い場所も取らないと思ひますがね。

今井 何ですな、大阪は大阪で何か特有な住宅とか店舖と云ふやうなものがありませうな、京都は京都の特異のもの、江戸は江戸の特異なもの、大阪は大阪の特異なものと云ふのがね。

南木 さうですね、京都へ行くと、格子や柱を紅柄で塗つたりして居りますね、あゝ云つたものは京都の建築の特長らしいですが、大阪は一見して一寸特長とすべき所が無いやうに思はれますが、矢張り島の內や船場邊の格子の間の附いた家などは大阪らしくないでせうか、それから入つた所の間取の工合は先程お話のやうな、這入ると直ぐ中庭があつて、玄關があつて、中庭から台所へ入つて行くと云ふあの式に定つて居るやうですね。

小林 それは定つて居りますな決して入つた所から上れない。

小西 あれは中庭と云ふのですね、玄關までの間は。

小林 さうです、千種屋の家が矢張りさうですな。

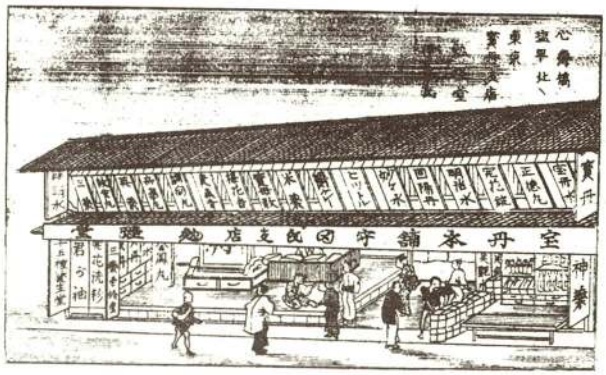
昔の大阪商家圖譜（一）

（明治十二年版浪花御商獨案内に依る鶴丸梅太郎氏藏）

















昔の大阪商家圖譜（二）

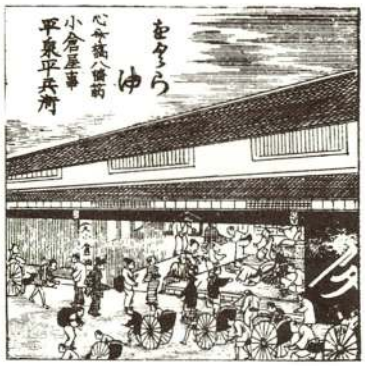
（明治十二年版浪花御商獨案内に依る鶴丸梅太郎氏藏）



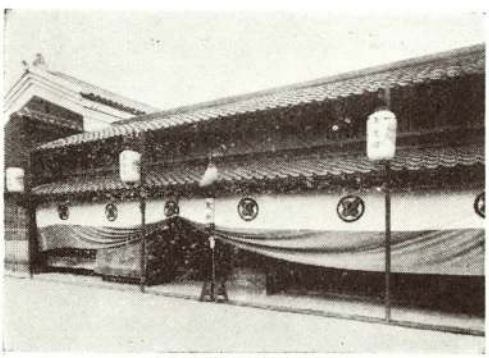






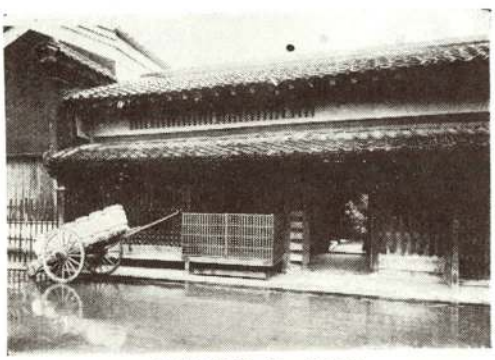


大阪の地に昔のまま殘る商家（一）



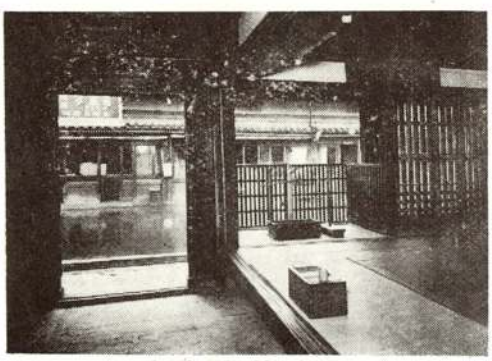
瀧村氏邸祭禮の飾付け

（協會藏版 No. 3002）



島の内間屋瀧村氏邸

（協會藏版 No. 3001）



瀧村氏邸内部

（協會藏版 No. 3004）



瀧村氏邸の内部

（協會藏版 No. 3003）

大阪の地に昔のまゝ殘る商家（二）



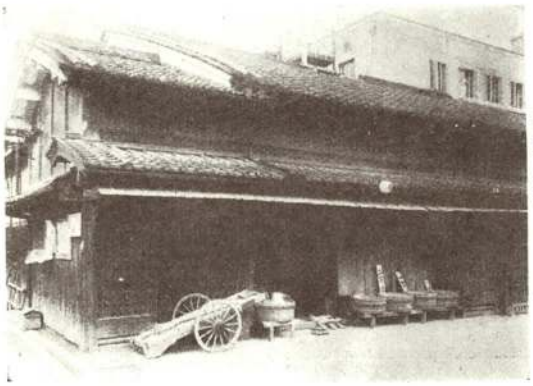
あつし屋（島の内千年町大谷商店）
（協會藏版 No. 3008）



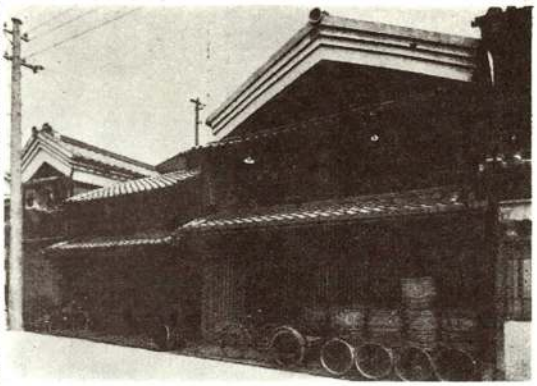
あつし屋店の間（協會藏版 No. 3009）



商家鍛冶屋町（協會藏版 No. 3010）



米屋（千年町松下商店）
（協會藏版 No. 3011）



奈良漬屋（東區魚ノ棚町逸見仁之助氏商店）
（協會藏版 No. 3005）



葉茶屋笠牛（島の内木綿橋笠谷茶舖）
（協會藏版 No. 3006）



葉茶屋笠谷氏邸内部
（協會藏版 No. 3007）

鶴丸　あれが特長ですな。

高橋　大抵皆平面は同じやうな工合ですね。

南木　此の間住友銀行の建築を見せて貰つたのですが、會議室の壁はどう云ふものかと云ふと、音響が大變ボンヤリすると云ふことです。

今井　あの住友さんが茶臼山の邸を造る時の話ですが、柱の上に跨がらす牛と云ふものがありますね、牛掛と云ひますか、あれは松に限つたものださうですね、矢張り緣喜を祝つたものでせうが、而もあゝ云ふ舊家になると、非常に古い松の木を選ぶものと見えて、どうしても千年以上經つた松の木が欲しいと云ふので大分方々捜した、工作部の方では堅牢と云ふことなら、鐵の梁掛が一番可いと云ふ話であつたが、八木甚兵衛（大工）は顔を顰めてからにそれに反對して、どうしても古い松の木が欲しいと云ふので、方々捜したが何處にも無い、ようゝ〳〵九州の何處かにあつたのを持つて來た、八木甚兵衛は普請中に死んださうですが、非常に喜んで立派に仕上げて牛掛の用材にした、其の餘材を以て故の男爵が盆なごを造り、裏に色々なものを書いたりして、關係者に記念として配られた、私は一向建築のことは知りませぬけれども、さう云ふふうに緣喜を祝つて目出度いものを使ふので、決してあれは他のものを使はぬ、必ず松に限ると云ふことです。

高橋　梁には松が一番良いのです。

今井　強くもあり目出度くもありと云ふ譯ですな。

本間　大阪の商家には玄關が無いと云ふ風に聞いて居りますが、さうですか。

小林　玄關のある家は餘程大きな家ですね。

鶴丸　住友さんも玄關が無いやうですな。

高橋　それは前を壞して居りますから、原形はありませぬ、壞したのは何十年も前です。

今井　併しあの家はそんなに古い家ではないやうですね。

小林　住友さんの一寸變つて居りますのは、半ば工場（吹所）で半ば住宅であつたのを、明治の初年に吹所は他へ移したのですが、以前は工場であり店であり住宅であつた譯です。

高橋　平面圖を見ますと、すつかり纏つて居りますけれども、玄關なんかは變な所から入ります。

小林　だから彼處のは一寸變つて居りますが、表の店は恰度先代さんが御養子にならるる前に壞して居りますよ。

高橋　兎に角家はさう古くないやうです。

今井　あの玄關は普通の玄關ではありませぬか、鰻谷のは。

小林　あれは普通の玄關で、前の男爵が造つたのです、私等が覺えて居りますのは、矢張り太い格子の長いものがありました、それから私等の中年前位の時分ですが大きな掛聲で金何千何百圓也、何萬何千圓也と云つて算盤を置いて居つた、大變なものだなアと云ふと、イヤあれは借金の勘定だと言ふた人があります、マア店の者等が稽古にやつて居つたのかどうか知りませぬが、始終大きな聲で算盤を置いて居りましたよ。

本間　先から大分大阪の住宅の特長に就てお話を伺ひましたが、まだ何か外には一寸見られないと云ふやうな所がありますまいか。

南木　ありませうね。

小林　南本町と云ふ所は呉服問屋ばかりであつたのですが、道路を廣くするまでは、二階が非常に長かつた、普通のものではない、店が大屋根より低くなつて居る、あれは妙なもので、南本町の特長です、こゝに天窓が開いて居るがそれは何でかと云ふと、餘り明いと、アラが見える、薄暗うして置くと品物が良く見えると云ふ譯です。

鶴丸　妙な所に秘傳があつたのですね。

南木　揚店が無くなつて居りますが、あれは特長でしたね。

鶴丸　天水桶なんかも無くなりましたな。

南木　夏なんかは揚店を利用して涼みをやつたものです。

本間　穗村さんあたりでは其處を何とか云ひましたな「けつかい」で圍みまして、其處に枠を置いたものださうですね。

南木　それからは揚店の上に腰障子と云ふものを出したものです近頃まで藍屋で一軒ありましたがそれももう無くなりました。

今井　水野さんの家がさうなつ

て居りますね。

小林　藍屋でなくても腰障子をやつた所はありました。

南木　それから二階が皆低くなつて居るのは非常に特色だらうと思ひます。

本間　あれは前の方に限つて低くしたものですか。

小林　天井は殆ど使はなかつたものです。

南木　マア物入ですね、或は店の者が寢るやうな所であつたのです。

本間　何か規則でもあつたのですか。

高橋　今でも建て替へぬ所は矢張り低いやうですな。

本間　いつか舊東海道を歩きました時に土山あたりで聽きますと彼處では二階から大名の行列を覗くと云ふことは可けないと云ふので二階を造らなかつたのださうですが、大阪はさう云ふことはありませぬか。

今井　ありませぬね、大阪の町人學者でやかましい人ですが、山縣蟠桃は非常に火事を恐れた、マア火事にも遭つて、新に家を造つた場合に、丁度今の愛日小學校の北の方の北濱の通に向いた家ですが、防火設備として、今なら何か消火器でも置く譯ですけれども、其の代りに、あの低い二階に若干の莚を蓄へて、近火で火の粉が飛んで來ると云ふやうな時分には、其の莚を屋根の上に敷いて水を掛ける、さうすると一寸位火の粉が飛んで來ても差支ないと云ふのでそんな用意をしたと云ふことです又先生は大阪の大火事を防禦する方法として、恰度今の二十四間道路の淀屋橋通をズツと北から南へ掛けて道幅を廣くし、眞中に大きな堤防を築いて、其處に樹木を植えれば、西が燒けても、東へは移らぬし、東が燒けても西へは移らぬ、兎に角半分だけはそれで救へると云ふやうなことを夢の城と云ふ隨筆に書いて居ります、今から考へれば、幼稚なものですれどもさう云ふ火災の豫防法や火災の場合に執るべき手段を書いて居る譯です。

小西　今で言へば、防火地區を拵える譯ですね。

南木　火事と云ふと、以前は大きな團扇に長い柄を付けて玄關に三本程置いたものですよ。あれは御堂さんなんかへ行つて見ると、まだありますね。

小林　少し大きな家では皆それを置いたものです。

小西　火事をどうするのです。

南木　向ふへ煽くのです、私等子供の時分に置いてありました、戎橋北詰の東側が燒けた時に丸萬からあれを持出してやつて居た、迎も火を防げさうなものではないけれど。

小林　あれが立派に役立つたこともある、本願寺の北の方が燒けた時に、本願寺にあの團扇が澤山あつたので、それを皆持つて居つて、號令を掛けて一齊に斯う（煽ぐ）やる、さうすると一時火が向ふへ行つたさうです、之を區々にやつて居つては可けないし、無論三本や四本あつた所が何にもならぬ。

小西　さうでせうな。

本間　大分火事のお話が出ましたが、土藏と云ふものは可なり大阪では研究されたものだらうと思ひます、何かそれに就て面白い話はありませぬでせうか。

今井　私等が聞いて居るのには漆喰建築と云ふものは江戸に敵ふものはなかつたと云ひますね、それは或時東京へ行つて、恰度藏の建築をして居たさう云ふ方に巧者な人から初て聽いて成程と思ひましたが、迎も上方では東京のやうな仕事は出來ない、東京は火事の多い火の速い所だけに、特に土藏の壁塗と云ふものはなか〳〵優れたもので、東京の土藏は滅多に落ちはしないけれども、大阪や京都神戸あたりの土藏は落ちると云ふことです、又私は大阪の土藏が火事に會つて崩壞するのを眼前に澤山見ました、それは御承知の明治四十二年の北區の大火の時ですがあれは一晝夜から燃えた大火で、朝から其の日の晩もズツと燃え續いたのですが、翌日の朝圖書館へ出勤しまして、高い所から見渡しますと、彼方此方に土藏だけ殘つて居りましたが、見て居ると、上から飛行機か何かが彈丸でも落したやうに、屋根の方に煙が出て來ると、パーツと崩壞して落ちる、あゝ惜しいなアと思うて見て居ると、又向ふの方の土藏がホーツと解けよる、十分な目塗も出來なかつたのかも知れませぬが、見て居る中に土藏が三つも四つも落ちる



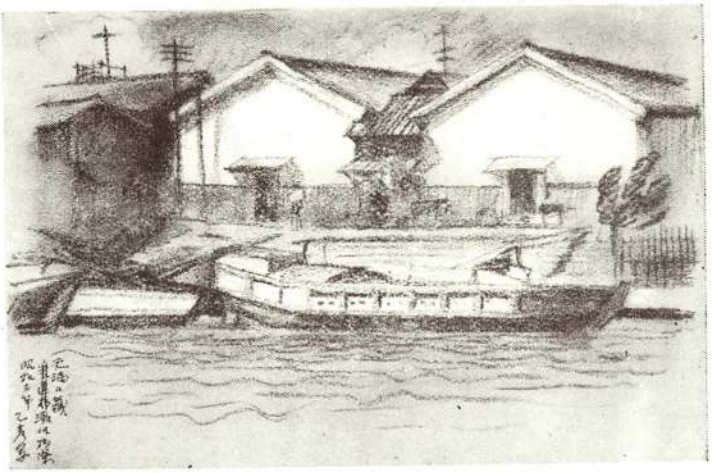
天滿菅原町の藏並 (協會藏版 No. 1314)



靱にある藏並 (鶴丸氏所藏寫眞)



天滿の某藏 (協會藏版 No. 3012)



のを見ました、それは中に火が一ぱい滿ちて崩壞するのでせうけれど。

小林 あゝ云ふ大火になりましたら、迚も保ちませぬな。

今井 附近が少し燒ける位のなら、保ちもしませうが、數町の間が一面に火になつてしまつたら駄目ですね。

小林 流石に土藏だけは後に殘つて居るのですが、火が籠つて內側から燒けて行つて、到頭解けてしまふのですね。

今井 北の大火の時は可なり時間に餘裕があつたのですから、十分に目塗も出來たのでせうが、全く大火の爲にやられたのですね。

小林 目塗をしても、あゝなつたら、いきませぬな。

今井 あれは蒸燒けになつてしまふのですね、小さな火事でも土藏を直ぐ開けると、火を引くと云ひますね、翌日行つても、先づ水を掛けて、冷してから、開けぬといかぬさうですね。

本間 大分色々なことを伺ひましたが、今度は大阪の古い町家で現在殘つて居ります代表的なものをお聽かせ願へませぬでせうか、例へば殿村さんのお宅ですとか云ふやうな。

小林 マア鴻池さん、殿村さん鰻谷の方の吉野さん。

今井 高安もさうでせう。

鶴丸 あれは電車で半分壞された。

小林 あれを市會に居る時分にやかましく言ふたのですがね。

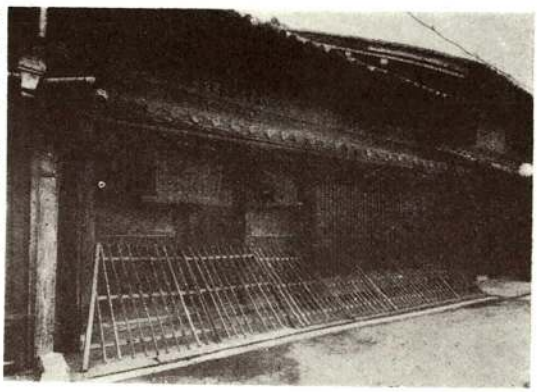
今井 それから中位の所では上野理一君の家。

小林 それから長柄の人柱の吉野さんの別莊、あれは珍らしいものです、あの太い南天の床柱を狹い所へ持つて行つたのが面白い。

今井 今現存して居る大中小の大阪の代表的な建築の寫眞を撮つて置いて貰ふのですな。

本間 そして成べく特長のある部分の澁所あたりまでの平面を取らして戴きたい、奥の方はお嫌ひになるかも知れませぬが。

鶴丸 奥の方はさう特長はあり



龍斗水のある民家（西區江の子島）
（寫眞撮影 No. 3013）

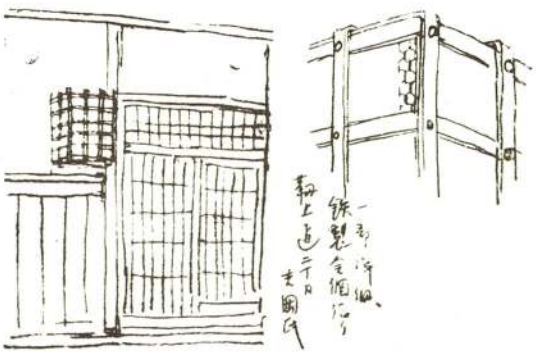


ませぬね、店の間と中庭、臺所の關係に大變面白い特長があるのです。

小林　吉野の別莊の茶の間を除いてしまつたのは惜しいことだつた、えらう大きな普請ではないけれども、狹い庭を巧く利用して上げたり下げたりした所が面白い。

今井　今の大きな殿村、鴻池さんと云ふやうなもの丶外に小さい所で極く代表的なものはありませぬかな。

高橋　ありさうなものですね、何處か。



南木　あるのですが、よく二三日經たぬ中に壞されてしまふのがあります新屋敷にかげま茶屋の面影があつたのです、例の三角格子などがあつて、迚も面白いのですが、此の間行きましたら、もう無くなつてしまひました、あゝ云ふ家が小さなもので面白いですね、油屋近八と云つたやうな家でね。

今井　普通の町家や又吉田屋のやうなもの。

南木　是も段々變りますね。

今井　僕は今に富田屋さんなんかも西洋館にしてしまひはせぬかと思ふ、西洋館にはせぬにせよ、あれを大和屋風にしてしまつても面白くない、ズツとあの長い格子があるので、あの町を通ると、如何にも廓を通つて居るやうな感じがするのですからね。

本間　それから大分場所は違ひますけれども、天王寺の西門の通りですね、あの山田病院のある家並には大分古いのがありますね、あの天王寺丸と云ふ話を聞くやうな。

南木　ありますね、天王寺の前に白酒屋と云ふのがありますが、彼處は迚も面白いです。

鶴丸　あれは倉ですか。

南木　さうですね、あれはへんてこな倉みたやうな長い屋根ですね、一寸變つて居りますな。

今井　あの山田病院は小林さんのお婆さんのお家ださうですね。

南木　さうです小林さんは幼少の時分に暫く彼處に行つて居られたのですね。

今井　さう云ふお話ですね、彼處で大分暮されたと云ふ譯です。

本間　何處か手頃な穉村さん程度の家で、ありませぬかね。

今井　北方面はありませぬか。

本間　もつと小さな所で、此の家（No.3010）なんかよろしうございますね。

南木　よいですね此揚店が無くなつて居りますが、是は何か商賣屋でしたか。

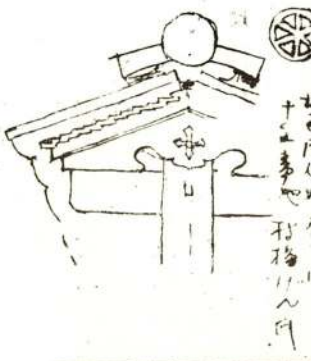
本間　今は『しもたや』です。

南木　『しもたや』は揚店が無いですね。

今井　お家は何時の建築ですか（小林氏に）

小林　私の方は慶應四年に燒けましてね、其の折に建替へたのです。

今井　小林さんのお家はどつち



村橋邸塀破風板裝飾は十字架文にあらざるか



北同心屋敷（天滿同心町）（協會藏版 No. 3014）



南同心屋敷玄關（協會藏版 No. 3016）



南同心屋敷（天滿同心町）（協會藏版 No. 3015）



南同心屋敷玄關露地（協會藏版 No. 3018）



南同心屋敷天井見上（協會藏版 No. 3017）

かと云ふと、一寸變つて居りますね。

南木　私は先達て伺ひまして、表の間に汽船問屋のですか、長い紙をお貼りになつて居りましたが米屋ですか。

小林　米屋か株式屋です。

南木　實際あゝ云ふものを貼つた所が有ませぬね、前は店に入りますと、何々丸と云つた汽船の名なんかが貼つてあつたものですね

小林　米は納め相場を貼つたものです。

今井　それはどう云ふなんで。

小林　どう云ふものでしたかな米屋から持つて來るのです、仙廻の厚い紙で繼いであつて、あれを又書く者が今は段々下手になつて來ましたが、昔は上手でした、殊に堂島あたりの提灯屋が巧く書いたものです、肥後米何圓何十錢と云ふ風に一石の相場を書いて來るのですね。

本間　大分商店のお話が濟みましたが、今度は一つ硬い方で、武家屋敷に就て何か伺ひたいと思ひます、協會の方でも同心町と與力町を捜して、面影の遺つて居る家を多少見付けはしましたが。

南木 玉造にお出でになりましたか。

今井 同心町に關根と云ふ家がありますね。

本間 伺ひました、是(寫眞)です、面白いお宅ですが、座敷の方は元の儘に殘つて居ります、去年見ました時には、矢張り一間の大きな縁が立つたお座敷がありました、床の間には刀懸に刀が載つて居たと云ふやうな譯であります。

今井 是(寫眞)は結構ですなア

本間 それは一部分切つたのださうです、市場が出來るのでね、それは北の同心町の同心屋敷です

今井 關根の家は與力の家ですからね、何百石取つて居りました。

小林 そんなに取つて居りましたかな、親父さんは私の方の弟子でしてね、長らく監獄の典獄をして居りました、恰度高崎舊大阪府知事の後に大久保さんが來ました時に大阪の古い話を聽かして呉れと云ふことで、大阪の古いこと云ふたら、關根より知つて居る者は無いと云ふて呼んで來ましたが私は知らぬ〳〵と言ふて、何にも言ひませぬでした。

本間 南木さんさつきお話の玉造のと云ふのは。

南木 玉造に在る同心町で。

鶴丸 鐵砲組ですか。

今井 大阪の與力同心には定番附屬の與力同心と町奉行附屬の與力同心とありまして、天滿のは皆町奉行附の與力同心で、玉造と十二軒町のは皆定番附の與力同心です、役目は違ひますけれども、同じく與力と云ひ同心と云はれて、與力が上役ですが、同心の中でも小さいやつは十人扶持とか何人扶持と云ふので、大きいやつは百石以上のもあつた。

本間 十二軒町あたりのは隨分小さいものですな。

今井 あれは城與力ですな

本間 竹村秋峰さんの家もさうですな。

今井 さうですね。

鶴丸 十二軒町方面でも段々無くなりますね、今の上本町二丁目の桃谷……

本間 彼處には隨分あるやうですね。

鶴丸 玉造でも私の知つて居るのは澤山あつたが、玉造は一番速く滅びてしまつた、あれなんかも捜して止めて置きたいものですね

本間 關根さん(舊天滿與力へ)でも御紹介を願ひたいものですね

小林 一度私が行けば可いのですけれども、もう亡くなりましたからな。

本間 未亡人はおゐでございます。

今井 それは矢張りあなた位が可いかも知れませぬな、彼處の家には色々書いたものがありますから、さう云ふものから、何か家に關するヒントも得られませうし、與力生活に關するものも得られますから、一寸暇を貰して、建築を御覽になると同時にさう云ふものも御覽になると可いと思ひますね

小林 それなら私が一遍行つて名乘つて來ませう、何處らです、家は。

本間 與力町の市場の横と仰しやいましたら、直ぐ分ります、表を教會にお貸しです。

小林 未亡人が居つた所が八十近いでせう。

本間 イヤ八十にはおなりぢやございませぬよ、もつとお若い方ですよ、五六十位の。

小林 關根さんが居つたら驚て九十位だね。

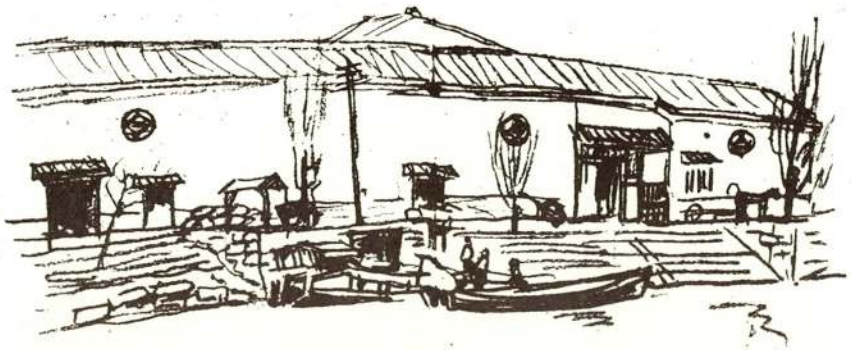
今井 大阪に居た頃には盛に話をして居つた、圖書館に來ても能く話をしてね、此の老人は大事にして能く話を聽いて置かぬと可かぬと思うて居る中に死んでしまつたがね。

本間 それから造幣局の舍宅の一部に、元お寺かお宮がありました、川崎權現ですかね、彼處の一角にありました武家屋敷の長屋門がそつくり保存されて居ります、それは造幣局の建築技師の中村さんと云ふ人が大變さう云ふことに趣味のある方でございまして、それをそつくり持つて來ましてね、今道場に使つて居ります。

江崎 まだありませう、私の列びにも、修繕を加へてしまつたけれども、門長屋が殘つて居ります私は今遲れて來たのですが、京都のを今度毎日新聞で寫したものを取敢へず買つて見て居りますがねあゝ云ふ風にやつて、豪所まで寫すと、あの中でもまだ大分面白いものが殘つて居りはせぬかと思ふ。

本間 それから武家屋敷とは一寸違ふかも知れませぬが、藏屋敷ですね、是も大阪の特長の一つで

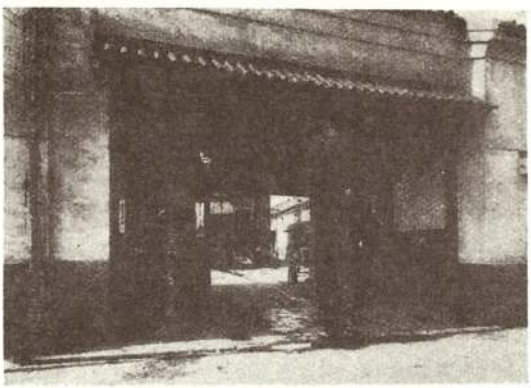
現存の藏屋敷（大阪）



中の島三丁目濱側（東神倉庫）
（本間乙彦氏寫）



藏屋敷跡（中の島二丁目）（協會藏版 No. 3019）



藏屋敷跡（現東神倉庫）（協會藏版 No. 3020）



藏屋敷跡（中の島二丁目）（協會藏版 No. 3021）

せうが、堂島大橋の西に一つ殘つて居ります、それから日本銀行のこちらの方は。

今井　あれは元と高木さんの居つた家ですね。

江崎　東神倉庫の門が殘つて居りますが、此の間から東神倉庫に就て色々なことを聽きまして、後藤又兵衛があの門をどうかしたと云ふ傳說があるが、其の由來を調べて呉れと云ふので、色々調べて見ましたけれども、何しろ難波戰記の時分でなければ後藤又兵衛は居りはせぬので、其の後に出來たものだから、そんなことはないと云ふのですが、それぢや黒田の邸にあつたのを移したものでないかと云ふ議論もあるのです、兎に角それが一寸面白いのは確か楠で出來て居るので、あの門の古いことは事實です、彼處は門までは壞さないと思ひますが、あの門はなか〳〵面白いものですよ。

小西　彼處までホテルになるのですね。

南木　あれは逆も可い。

本間　あれは何處の藏屋敷ですか。

江崎　調べて見れば、直ぐ分りますが、確か黒田でせう。

鶴丸　それから日本銀行の少し西の方に在る武者窓のある所は大變面白いですね。

江崎　西に一棟へありますね。

鶴丸　藏屋敷は今殘つて居るだけ撮つて置きたいですね。

江崎　門は確に藏屋敷の門ですあの脇に稻荷さんがあつたのは取拂はれたが、門だけは殘つて居ります、それから鴻池の方でいくとあの鶴の居る中の所は一寸も變つて居りませぬから、あれは面白うございます。

今井　藏屋敷では私の所に藝州の藏屋敷の平面圖があります。平面圖ですから見たつて判らぬけれども、可なり大藩の藏屋敷で、稻荷さんを祀つてあつたり、入堀の所など、當時どう云ふ設備をして居つたかといふことは分ります、寫すならお手のものですし、あの平面圖は何時でも貸しますから、寫眞にでもしてはどうです。

江崎　鴻池さんの昔の儘なのは瓦屋橋の別邸です、門は新しい、是は博覽會少し前に造つたのですが、中の玄關から臺所向の方は昔の儘です

本間　一度寫眞を撮らさして戴きたいのですがね

江崎　それは能く都合を聽いてから。

本間　今はお取込でせうから、もう少し先で宜しうございます。

江崎　それは寫眞を撮ると云ふことになると、幾つも撮りたいと思ふものがありますね、やかましいものでは業平の井筒、それから南木さんなんかに伺つたら判ると思ひますが、例へば小林さん所の看板のやうな昔からあるものを寫して貰ふと可くはないかと思ひます。

南木　それは面白うございますね

江崎　是非さう云ふものも願ひしたいと思ひます、マア藥屋の五臟圓の看板のやうなものもね。

本間　是（寫眞）は『みすや針』の看板です、是ももう壞されてしまひました。

南木　小生君のはどうしました。

本間　あれは市民博物館に納つて居りますから大丈夫です。

今井　建築に直接關係は無けれども、看板は寫して置いて貰ひたいね。

江崎　それから天王寺で古い家は山田ですね。

本間　あれは前に載きました、唯間取が無いのです

小林　間取は行つ　見れば判る

本間　みすや針のお話が出ましたが、あの近所の佛光寺が昨日屋根の瓦を剝がして、そろ〳〵壞はされて居ます、あのお寺の白壁塗は、武者格子ではないのですが、何となく城のやうな感じのするお寺があるのは大阪の特長の一つだらうと思ひます、南の御堂、北の御堂を首めとして。

今井　澤の鶴の櫓も壞してしまひましたね。

南木　米喜だけが殘つて居つたのですがね、可なり考慮されたのですけれども、高層建築とした爲に一寸工合が悪い、高麗橋にも立つて居りましたね。

小林　高麗橋は南側と北側と兩方にあつた

南木　六萬體町の奈良漬屋も其の儘ですよ。

今井　六萬體町の奈良漬屋の看板ですか。

南木　あの看板は貫名が書いて居ります、表から見たら何も特長が無いやうですが、家が其の儘殘つて居ます、それからあの隣が三成亭と云ふ料理屋で、ズツと奥に古い庭があつたのですがね。

本間　大阪の寺は大變面白いと思ひますが、何故あゝ云ふ風に武裝をしたか、お話を伺ひたいと思ひますが。

今井　あれは矢張り石山本願寺時代に對武家の防禦をやつたのが元ですね、それが石山も亡びてしまひ、豐臣時代になつても矢張り武家は恐いものと考へ、德川時代になつてはもうさう云ふ氣遣ひは無かつたのですがね。

江崎　後には形式になつてしまつたのだらう。

今井　初は武家を恐がつて、此處（寫眞）から弓でも引かうと思つたのだね。

本間　南の御堂が最近一部改造になりましたが、何か南の御堂のお話はございませぬでせうか。

江崎　あの南の御堂の書院なんかは變つたものですね。

本間　あちらは大丈夫でせう、あの南御堂の學校は何時頃出來たのです。

南木　あれは最近ですよ、

今井　南の御堂の學校は阿部野の方へ移つたのでせう。

南木　さう〳〵さうですね。

今井　其の跡を矢張り學校にして居りますか。

南木　此の間まで學校に使つて居りました、詰り分校ですね。

江崎　新しいもので古くなるものも撮つて置いて可いですね、例へて見ると、江の子島の府廳舍の如き、又天滿橋や天神橋も壞してしまふからね。

今井　造幣局の川邊の非常に佳

大阪市内の寺院



興正寺掛所の鐘樓（天満）（協會藏版 No. 1315）



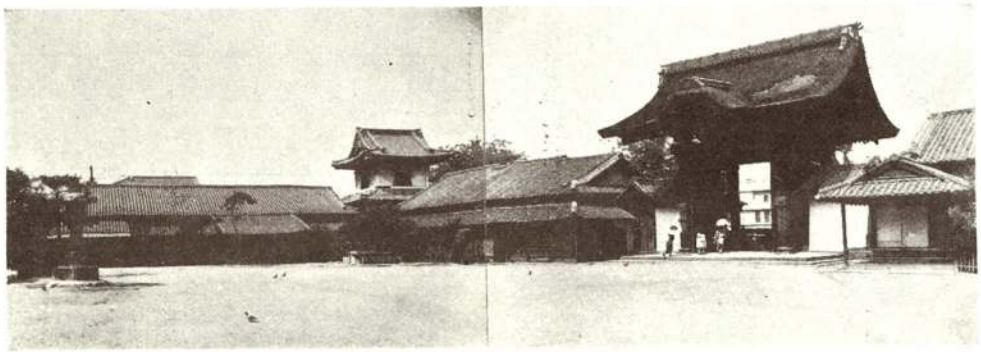
佛光寺掛所の鐘樓（船場平の町）（協會藏版 No. 1316）



南の御堂鐘樓（協會藏版 No. 3021）



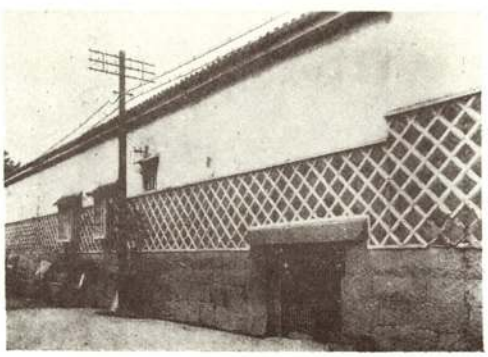
佛光寺掛所正門（協會藏版 No. 1317）



南の御堂六本間乙彦氏所藏寫眞）



南の御堂さんの塀（協會藏版 No. 3022）



南の御堂さんの塀及穴門（協會藏版 No. 3023）

い色の煉瓦建のものはどうです。

南木　あれは明治の初期の建築として保存しなければいかぬでせう、住友さんの家、泉布館、府廳又衛戍病院の建築なんかもなか〳〵住いですよ。

本間　泉布館の寫眞も良いものを撮りました、造幣局に就ては設計圖が全部殘つて居りますが、美濃紙に『ござさ』を引いて、折本になつて居ります、それを去年重要なものは殆ど皆複寫いたしましたまだ文献の方が集らないものですから、能う發表しないのですけれども、是は一寸大事業でしたが、複本が出來た譯です、向ふでも非常に貴重にして居りまして、門外不出のものになつて居りますが、圖面としては實に古色蒼然として居ります。

南木　古建築の保存に就ては本當に効果を擧げて行けなければなりませぬが、僕の常に遺憾に思うて居るのは、少し建築の方と違ひますけれども、茶室で、來山の遺跡である六萬堂ですね、市川新升の居た時分はあのお父さんが茶人でしたから、まだ能く保存して居りましたが、市川君が出てから飛田の遊廓の事務所かなんかにしてしまつて、悲慘な茶室の面影が無いらしい、と云ふのは建築を繼ぎ足したりしたらしいのですね

今井　あの前に何とか云ふ藏がありましたね、新升君が能く言つて居ましたが。

江崎　それからあの八軒家ですね、天神橋と天滿橋の間の所ですね、彼處に何處か昔の儘の家があるさうですね。

鶴丸　あつたのですが、壞しました、淀川情緒を味はうのに宜い所でしたがね。

江崎　京屋なんかがさうでしたが、今は宿替してしまひましたね

南木　天滿橋の停留所から少し東を今すつかり取除けて居りますね。



河に依つて京伏見と聯結した八軒家
（大阪名所便覽圖繪に依る）

本間　あすこに昔の面影はありませぬか、太い格子の嵌まつた宿屋はありますが

南木　あれは新しいのですが、石屋の所に京屋と云ふ宿屋があつたのです。

本間　新しいと云つても、もう明治のものも段々見られなくなりますから、遺さなくちやならぬことになります。

江崎　少し距つた所では枚方の鍵家なんかも元の儘です、私は一遍『くらはぬか』のことを聽きに行きましたがね。

本間　先程明治年間の重要建築のお話が出ましたが、今度壞されさうなのは湊町驛です、之に就て何かお話はありませぬか。

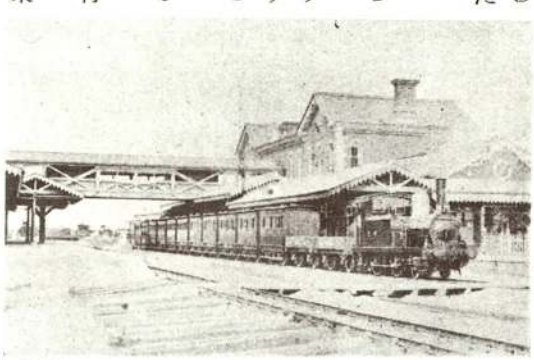
今井　湊町驛は可いですね、あ



梅田ステンション（大阪驛）
（大阪名所便覽圖繪に依る）



舊梅田ステンション（鶴丸氏所藏實體鏡寫眞に依る）
（協會藏版 No. 3037）



舊梅田ステンション　（右同）（協會藏版 No. 3038）



難波湊町驛(現)(明治卅年頃の建築)（協會藏版 No. 3024）



難波湊町驛(現)内部待合室（協會藏版 No. 3025）

れはどう せ壊されるから、壊されない前に撮つて置くのですね。

本間　小林さんどうです、明治初年の西洋建築の御記憶を一つ。

小林　さうですね、今寫眞がありましたのと、湊町驛と大阪驛と製藥會社と。

今井　住友さんのは寫つて居りますか。

本間　あります

今井　あれなんぞは廣瀬宰平の書いて居るものもありますが、あの文章なんかを寫して置くと可いですね

高橋　三回ばかりに亘つて擴張して居りますね。

鶴丸　出入橋が殘つて居りますね

今井　あれは舊



鰻谷舊住友男爵邸　（協會藏版 No. 3027）



造幣局北側泉布館　（協會藏版 No 3026）



内北濱舊大阪藥品試驗株式會社（協會藏版 No. 1350）

明治初期に於ける大阪の西洋建築

此處に揭げた建築の外に造幣局（明治六年建築）大阪舊府廳舍（前揭葛野氏舊府廳舍の建築參照）等がある。

郵船會社、それから靜觀樓の裏門の西側の

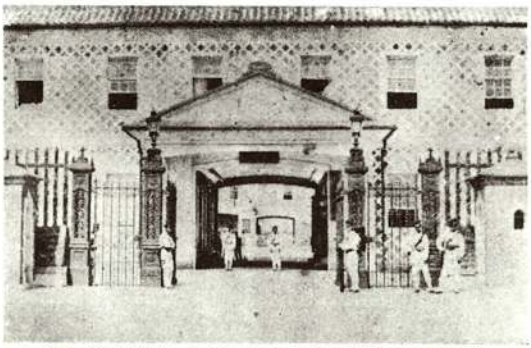
今井　衛戍病院なんかも今では舊式の西洋館の中に入れても可いでせう。

本間　それから彼處には將校集會舍があります。

鶴丸　あれは城内にあつたのを移したものです。

南木　親父に聞いて居りますが住友さんの家が出來た時分には皆勝手に見せて呉れたさうですね

小林　さう云ふ時もございましたね、あれは妙な家で、ぐるりに手摺があつて、泉布館と同じやうなたちです、あの風の西洋館は皆さうだつた。



大阪八聯隊營舍　（鶴丸氏所藏實體鏡寫眞に依る）
（協會藏版 No. 3039）

南木　全く怪體です。

小林　それからあの隣の三菱の精錬所が矢張り西洋館として古いものです、極く舊式な精錬所で、宮内省で建てたものですが、今もすつくりあります、造幣局より新しいけれども、明治二十何年頃にやつたものです。

本間　私は此の（寫眞）大阪驛の姿が面白いと思ひますが、是は何年頃なんですか。

今井　明治三十年頃までは是であつたと思ひますがね、どうですか。

南木　今の建物は明治三十年でせう。

本間　矢張り八九年頃のものですか。

小林　さうです、八九年頃でせう、神戸大阪の鐵道の開通がさうです。

江崎　十年の役の時に軍艦で神戸へ上つて、京都へ來たのだから。

本間　湊町の驛はどうです。

今井　それはズツと新しい明治二十七八年頃でせう。

小林　あれは變つた、西南戰爭の頃に野田八兵衛などが計畫して奈良までやつたので、大和川を國分へ越える橋があるだらう、あの橋を野田等と三人で向ふへ渡つて三日間樣子を眺め、平均何人通つた　是なら引合ふと云ふことでやつたのだ。

今井　他に西洋建築の古いのはありませぬか——あの下鄉君の中の島の製紙所はありませぬか

鶴丸　廢屋のやうになつてまだあつたやうに思ひますがね。

今井　大ビル邊りではございませぬか。

鶴丸　もつと西です。

今井　それならだゞつ廣い所がありますね。

小林　あれは下鄉ではござんせぬ、初は何とか云ふ人でしたよ。

本間　今度　芝居茶屋でございます、今日も新聞を見ましたら、芝居茶屋も祝儀全廢で悲鳴を擧げて居るやうですが、もう見えなくなるやうです、是も間取や何かも一つ遣して置きたいと思うて居ります、是（寫眞）は此の軒並が面白うございませう。

鶴丸　一番初めいろは茶屋が四十八軒あつた。



道頓堀芝居茶屋　（協會藏版 No. 3028）

南木　一體大阪では川筋を利用したものですから、川船で芝居見物に行つたので、裏から上るやうに出來て居るのです、今はすつかり變つて居りますが。

今井　南木さん、私は冬の顔見世や何かの寒い時分に朝早く芝居茶屋へ行くと、冷たい板の間に火鉢を置いて熊野炭のカン〳〵するやつを熾して居つた、あの感じだけは未だに忘れませぬね。

南木　さう〳〵股火をしてね。

今井　今のお話の通り船から上つて行くのですが、向ふへ着いたら、そろ〳〵夜が明けると云ふ時

分からね。

南木 今は表からばかり這入るのですが、昔は裏から入つたものですから、裏から上るやうに出來て居ました。

本間 道頓堀に若干殘つて居るのは昔の儘ですか

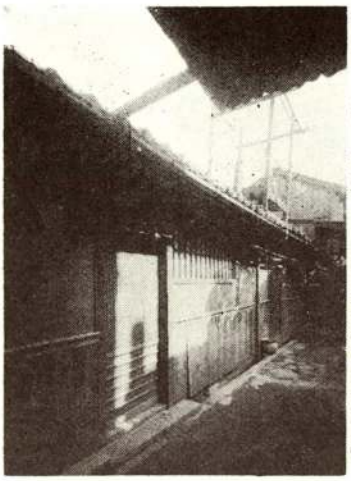
小林 燒けて、すつかり變つて居ります。

今井 變つても昔の通りぢやございませぬか。

小林 それは船の棧橋がズツと出してあつたが、あゝ云ふものがありませぬ。

江崎 路地で堀江にはまだなか〳〵面白いものが殘つて居るね、昔の柳格子と云ふものがある。

鶴丸 御池橋邊りにもありますね。



北濱の裏長屋と路地 (藝術寫眞 No. 1315)



路地(船場) (協會藏版 No. 3029)

南木 路地は大阪の特長のあるもので、研究する必要がありますね。

本間 路地の中の長屋建は面白いものですね。

今井 あれは面白いものです、石を敷いた路を抜けて行くと、兩方に家が立つて居りましてね。

本間 此處に長屋の寫眞がありますが、兩側に家がありまして、突當りに共同の便所があります是は正しいものでないのでせうか、船場邊りのですが。

小林 拔路地は各戸になつて居ります、船場、上町の方はさう云ふのが多い。

南木 一軒路地は皆共同です。

本間 一軒路地と拔路地と違ふのですね、北濱に難波橋から一寸西へ行きますと、神本と云ふ散髪屋があります、あの横に路地がありまして、大變の亂にも燒けなかつたと云ふのですが、是は矢張り突當りが便所でして、プランもありますが、實に對照が面白いのです。

鶴丸 それを一軒路地と云ふのですか。

小林 さうです。

南木 路地と云ふてもなか〳〵綺麗な路地もあります、住んで居る人がね。

小西 あれは妾なんかの住む所ではないのですか。

今井 マア通ひ番頭が泊る所だね、大阪の路地は確に特色がありますから、路地の研究は可いでせう。

本間 小林さん先程松島の松鶴樓と云ふお話がありましたが。

小林 あれは松島の鼻です。

本間 それは古いものですか。

小林 あれは新しいものです。

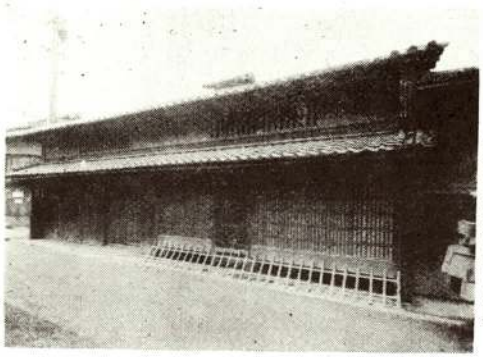
今井 松島の肉屋であつたか、大阪の博覽會の時分に餘り有名なので、態々見に行つたことがありますが、便所へ行つて見ると。

小林 あれは現長だ、物の安い時に雪隱に千圓妾けた、便所のさんかくしを跨げて下を見ると、硝子が張つてあつて、錦魚が游いで居るのです、それを角の芝居が眞似をしたが薩張り人が入らなかつた、現長が失敗したのは、女や何か前が見えると云ふので、批難が起つて、又變へよつた。

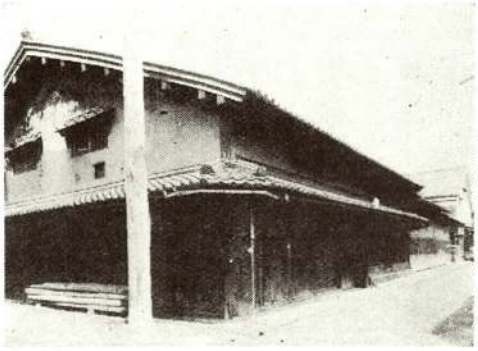
鶴丸 それから南の中筋を南へ



松島廓櫻通 (鶴丸氏所藏實體鏡寫眞に依る) (協會藏版 No. 3040)



造り酒屋（天滿旅籠町田中總一氏邸）
（寫眞寫眞 No. 3030）



造り酒屋（天滿旅籠町田中總一氏邸）
（寫眞寫眞 No. 3031）

行つた所に萬安と云ふ鳥屋がありましたが。

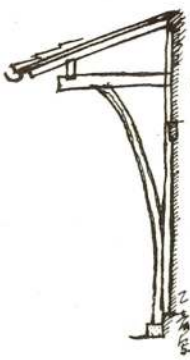
今井 もうありますまいね。

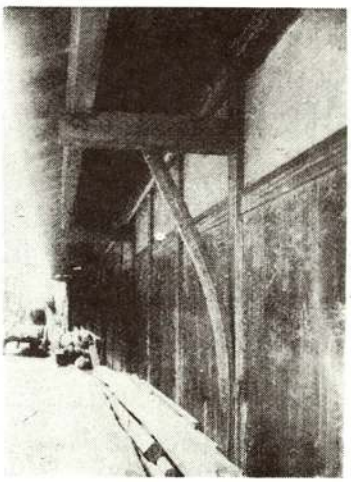
鶴丸 此の間寫しに行つたのですが、すつかり新築して駄目なんですがね、あれはお茶屋だつたんだらうと思ひます。

南木 さうですよ、あの邊は一寸風變りのお茶屋があります。

本間 それからごうしても分らないのは天滿の造酒屋です、澤山あつたのでせうがね。

南木 それは有名なものです。





同上南側軒廻木
（寫眞寫眞 No. 3032）

本間 今の電車筋の西側です。

南木 大阪の地酒と云つたら天滿ですからね。

本間 それより堺にあるやうです、矢張り酒井と云ふ造酒屋で今は帥子屋に變つて居りますが、先代が大變文字の好きな人で、未だに書いたものが長持に二三ばい遺してあるさうです、現在の主人はさう云ふことに些とも氣の無い方ですが、保存は良いやうです、其の人が家主ですから、一部分持つて來たのを見ましたが、實に面白い、蕎麥屋の看板に斯ふ云ふものを使ふのはどう云ふ譯だとか色々なことが克明に書いてある、あゝ云ふものを一度お調べになつたら可いと思ひますね。

今井 さう云ふものを借りて來て調べて見たいものですね。

小林 前の酒屋と云へば、二百石か三百石造つて居たら、それで裕なものでした。

南木 酒屋で思ひ出したが、堀川の川の水が酒を釀すに非常に良かつたのです、所で又彼處で色々なものが獲れたさうですが、其の獲れた鼈や色々の魚の味が非常に佳つたさうです、それは何故かと云ふと米の汁を吸ふて居るからだと云ふのです。

本間 斯う云ふ(寫眞)藏が殘つて居りますが、是は遞信局か何處かで使つて居ります。

南木 此の窓は面白いですね。

本間 面白い恰好です——で、私の方から無理押にお聽きしたいと思ひますことは、大概濟みましたが、此次はどうぞ御自由にお願いたします、今まで進行係として甚だ專横を極めましたことをお許し願ひます。

今井 今までお話が出るかと思うて待つて居りましたが北濱一丁目の築地の宿屋は下へ下りたら座敷があつて、向ふは川です、あんな所はありませぬね

江崎 一寸申し後れましたが、此の頃は大分祈しくなつてしまつたけれども、船の料理屋などは東京邊りの人が見たら、珍しいもので、網彦なんかでどん〳〵船の中へ這入て行く所は外に無いもので面白いですね、矢張り大阪の建築の一つの特長でせう、もう一つ面



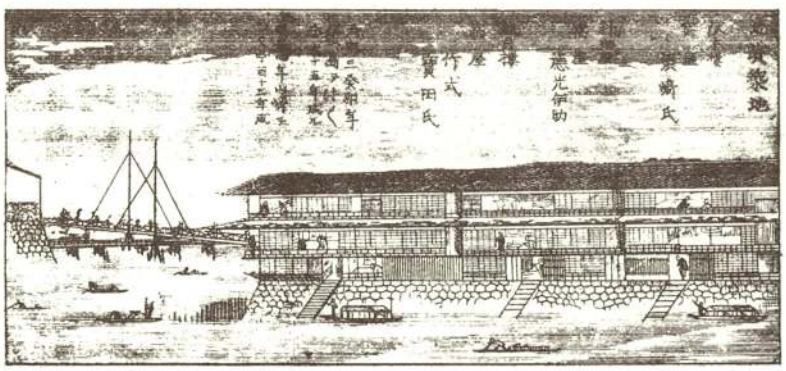
昔の河岸永代濱（明治十二年版浪花御商獨案内に依る）

白いのは、私が一度東横堀から西横堀、道頓堀と云ふやうな所を船でズツと通つて見た、さうすると橋は各々皆違つて居るので、技師の手本臺にして居るのだらうと悪口を言ふた所が、島崎君はさうでない、それは素人の言ふことだと言つて笑つて居つたけれども、川筋を船で通ると、色々の裏面が見えて面白いですよ、一遍川筋を通つて、裏面を寫すと云ふこともお考へ願つたら面白いだらうと思ふ。

小林　併し船で行つても、昔のやうに面白くないな。

江崎　もう一つ東横堀の高麗橋から思案橋の間の石垣や犬走りなんかも大分姿は變りましたが、面白い、あの石垣は昔の三の丸の石垣だらうと思ひますが、あんなのは外にありませぬね。

鶴丸　本町の曲りは面白いですね。



昔の河岸北濱築地（明治十二年版浪花御商獨案内に依る）

南木　けれども、あの曲りも大分變りましたな、昔はもつと深かつた。

今井　川の話の序ですが、子供の時分に江戸堀北通に住んで居まして、裏は川でした、中の島に在つた泰西學館と云ふ學校に英語を習ひに行つて居りましたが、偶々大水の日に料理屋船みたやうな所へ土左衛門がかかつて居て、大勢行つて見た、私はそれを見ると、何だか怖いと云ふよりは、厭な氣がして家へ歸つて來た、所が女中が川端へ下りて洗濯をして居たが私が見て居ると、どうした機みか洗濯物を手放して、あゝ坊ちやん取つて下さいと言つた、私は二三里位泳げたし、大水で可なり水は出て居たけれども、江戸堀は始終泳いで居たから、能く知つて居た、併し土左衛門を見て來たから、どうしても川へ入る氣がしませぬ、女中はあんたは不親切だと言つて居ましたが、あの川緣で洗濯をするのも大阪の一種の情緒ですよ。

南木　さうです川端へ下りて尻からげして洗つて居るのは大阪情緒です。

鶴丸　江戸堀の一番尻の大垣屋の前は料理屋らしいですね。

小林　元料理屋です。

本間　あの川を隔てゝ向角に古い銀杏がありますね、あれは何か由緒のあるものですか。

南木　それは娘銀杏とか云ふのですね、あれは因緣があるのです娘の姿が見えたと云ふので、其の由來は前に上方へ書きました。



由緒の深い「むすめ銀杏」

本間　川から見た大阪と云ふのは面白いですね、建築家の方から見ても。

南木　僕は巡航船で廻つたことがあります。

鶴丸　薩摩堀の方も面白いですね。

本間　願教寺の邊も變りましたね。

南木　先程お話の川沿ひの下屋ですね、是は研究したら面白でせ

う、下に座敷がある、所謂ちよんの間で、建築の工合が非常に面白いですね。

鶴丸 築地なんかもさうです。

本間 築地は二十年頃から餘り變つて居りませぬね。

今井 それはさうだ、電車が出來る前までは竹籔であつた。

江崎 庭はまだちよい〳〵古いのが殘つて居りますぜ。

本間 今井さんにお聽きしますが、清堀町に和田さんと云ふのがありますね、家光公の手植の櫻があると云ふ家ですが。

小林 それは餌差町でないですか、木原の別莊と違ふのですか。

本間 和田高彦氏と云ふ家です今お話しのも矢張り三百年以上の家です、建築は全然駄目ですけれども。

江崎 さうです、古い建物で昔の儘な所は和田久左衛門さんの家です、庭の古いのは住吉に一つあるさうです、是非見に來て呉れと言つて居るのですが、なには園とか云ふのです。

本間 確か福島と云ふ方が今有つて居られるのですが、加賀屋下屋敷が遺つて居るのです。

今井 一寸名前は忘れましたが大變立派な昔の儘のものだと云ふことです。

南木 百花村の福田宏一君が言ふて居つたのです。

本間 私も福田君から聞いたのです。

江崎 一遍調べて見ませう。

南木 それは近休の下屋敷と云ふのです、生玉の表門をズツと南へ行くと、竹田出雲の墓のある青蓮寺と云ふお寺がありますが、其の向ひです、迚も佳い庭で昔の儘です、其の代り手を入れて居りませぬので、雜草が茂つて居ります、茶室が三つもあつて、紀州便所があります、近休の別業で、是は庭の何を見る上に於て非常に參考になりますし、又あの邊に如何に別業が多かつたかと云ふことが判るのであります、あの邊は昔の別莊地ですが、淺妻あたりの建築は非常に特長のあるものです。

今井 確か安土の城門を移したものが殘つて居ると思ひます。

南木 商業倶樂部と云ふのがありましたね。

鶴丸 あれは日本橋の突當りで私も子供心に覺えて居ります。

南木 本町の病院。

今井 藤澤さんの泊園書院は何時建つたのですか、なか〳〵變つて居りますね。

小林 あれは可なり古いです。

今井 今の泊園書院は無論明治ですけれども、建物は學校に造つたものです。

南木 豐田さんが建てたのです

江崎 鴻池の本宅の前の銀行は明治に出來た古い建物ですが、もう直き潰れますよ。

本間 山中の店は大分古いものださうですね。あれは東區役所に使つたさうですね。

鶴丸 それは山中商會の方です

南木 あれは一時稅務署でした前に岩城と云ふ呉服屋のあつた所であります。天王寺の椎寺町に田中屋と云ふのがあります、花月庵向ふは其の儘ですね。

南木 あれは其の儘です。

本間 表に竹垣のある家ですか

南木 今は煎茶のね。

江崎 お茶と云ふことになるとお茶室はお茶室で集めたら、どうですか。

本間 是は可なり集めておねでになる方がありますから、割合に減くならないのですが、唯民家と云ふものは一番速く減くなります。

鶴丸 前に難波邊に茅葺の家が殘つて居りましたな。

今井 圓珠庵は茅葺ですか。

南木 あれは確かさうぢやありませぬよ。

江崎 來山の居つた所は上から鋲力で張つてしまひましたね。

鶴丸 梅田に在る茅葺を鋲力で張つたのを御存じですか。

本間 あの家は未だに百姓家そつくりの家です、門長屋の家で、米を乾すやうな廣庭があつて、宅は藁葺に覆ひをしてあります、それから難波元町の覺道と云ふ家もさうらしいです、又一度大仁を捜しましたら、二軒ありました、一軒は藁葺で、矢張り上を覆ふたやうです、一軒は瓦葺ですけれどもマア農家らしいものです。

江崎 さう云ふことを云へば、少し離れた所で鴻池新田の建物はなか〳〵古いものです、應擧なんかも居つたと云ふことで、冠木門は明治になつてからのものですが中のものは古いもので、新田を開發した事務所です、開發當時の制

札なんぞもそつくりあります、又豪所なんかも大勢の炊出しが出來るやうになつて居りまして、槍なんかも其の儘掛けてありますし、米倉なんかもそつくり殘つて居ります。

南木 河内の吉村はどうです。

今井 あれは古いですね。

本間 あれは可なり詳しく寫眞に撮りました。

南木 中さんは。

今井 中甚兵衛、それは××と云ふのが養子に行つて、學校教員をして居たが、それが發狂して死んで、其の後がどうなつたか知らぬ、家は殘つて居らなければならぬと思ひますが。

鶴丸 河内の本陣も面白いですな。

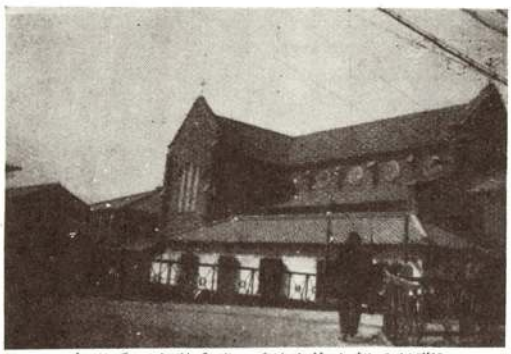
南木 先月見學に行つた椿の本陣なんかも是非必要ですね。

鶴丸 それから廣田屋の家は古くないですか。

今井 あの奥座敷も面白いですが、何か別業ではなかつたのですか。

江崎 富島町の天守堂はありますか。

鶴丸 あります、玉造の方は八



古川橋天主教會堂 (鶴丸梅太郎氏所藏)

十年近くなりますが、彼處の話を聽きましたら、富島町のが一番古いと云ふことでありました。

註 會場「二葉」亭はあみだ池和光寺の一部で後もと大三輪氏邸であつたが最近料亭と變つたものでその庭園は有名なものである

今井 此處(二葉)は昔から池があつたのでありまか。

小林 さうですね、此處は元々洲で砂が固つて出來上つて來たものでありますから、淀屋辰五郎の先代が金を拵えたのです、辰五郎は金を拵えるのでなく、金を潰しに生れて來たのですが。

今井 淀屋ケ菴と云ふ人ですな初は三郎右衛門と云ふて居りましたが、辰五郎と云ふ人は其曾孫になるやうです、ケ菴と云ふ人は色々書いたものに現れて來る所では徳川の初の人ですがね、淀屋の墓はもつと大きいのが遺つて居りますね。

小林 此處(アミダ池)の分家の善光寺の緣起が此處にしてある、攝津の國、難波堀江になつて居りますが、寺の緣起などと云ふものは好い加減なもので、何れ拵えたものであらうと思ひます。

今井 さうですね、善光寺の如來は此處から掘出して來たことになつて居りますね。

小林 此の池に就ては面白いことがある、此處に紫雲樓と云ふのがあつて、戸長役場になつて居つた、其の後木谷伊助と云ふのが、名を忘れましたが、加賀の何とか云ふ人に池の石を皆賣つてしまつて、其の人が持つて行つてしまつたが、紫雲樓と云ふ名の起つたのは、其處に紫石と云ふのがあつて其の石に柱を雲てゝあつた、其の石は何だか知らぬが、えらい喧しい石で、何でも或關西の大名から大阪の藏屋敷の留守居に向つて、其の石を買取るやうに命じた、所がごうしてもそれを賣らないので其の藏屋敷の役人は到頭腹を切つて其の石の上で死んでしまつた、それからけちが付いたと云ふ話ですが、其の後誰の持主の時代であつたか其の石を賣つてしまつたらしい、私の知つて居るのは初は下宿屋でしたが、それから又古い家が立つて居りましたが、大三輪長太郎が名古屋銀行を辭めて、此處へ來た時にそれを壞して、名古屋の家を持つて來たのですが、又それを壞して借屋にしてしまつた、元大三輪の家の入口はこつちにあつたので、一番家相の悪い鬼門に拵えたのですが、大三輪自身も其處で死んだ。

今井 大三輪長兵衛の關係ですか。

小林 長兵衛の一人息子です、早うに亞米利加へ遊學しましてな其の當時私や家内が可なり懇意にして居つて、神戸まで送つてやつたことがあります。

本間 小林さん大阪の古いことをお聽かせ下さいませぬか。

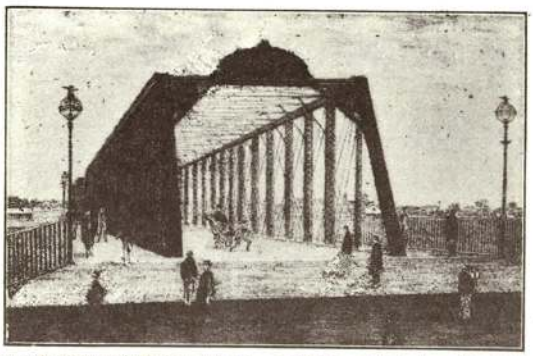
小林　私の父が居りましたら、古いことが分りますがね。

今井　私はお目に掛かつたことはないけれども、元町年寄をされたのですね、あなたのお家は。

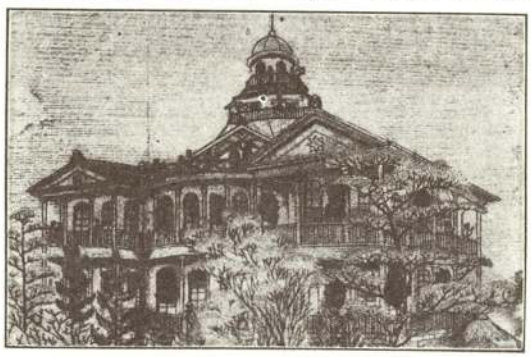
本間　あの町名は何と云ふのですか。

小林　此處らは御池通です。御池通と云ふのは、あの池から取つたものですね、本願寺の在る所を御堂筋と云ふのと同じですね。

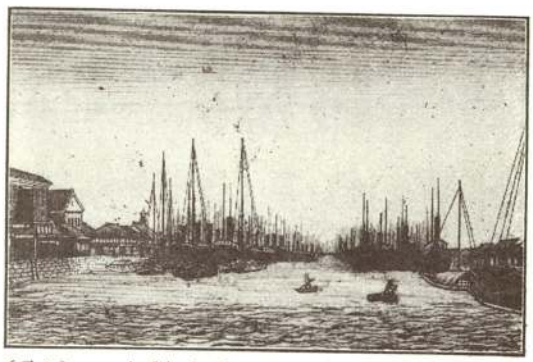
本間　いろ〳〵有益なことをお聞かせ下さいましてどうもありがたうございました、ではこれ位にしておきます。



（中宮貞郷氏藏版畫に據る）　天滿橋　（明治廿二年石版）



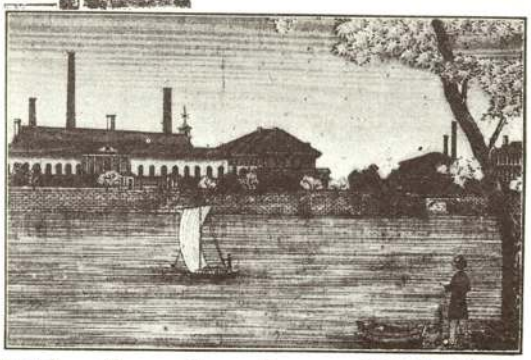
（同上）　大阪商業倶樂部　（明治廿四年石版）



（同上）　大阪安治川口　（明治廿五年銅版）



（同上）　天保山燈臺　（明治廿二年石版）



（同上）　造幣局　（明治廿五年銅版）

（五十六頁より續く）

車の便利がある。古は修驗道者の行場であつたが行基、空海等によつて伽藍建立され輪奐の美を極めてゐた。その貞和年間高師直寺領を沒收して一山を灰燼したと傳へられてゐる。延寶六年に到つて寶山和尙湛海の勸募によつて再營され自刻の不動明王を安置して本尊とし、歡喜天をも安置した。現在では眞言宗に屬し寶山寺といふよりはむしろ生駒の聖天さんといつた方が有名である。今の本堂は元祿年間の建立になつてゐる。

本堂の背面の數十丈の巨岩は役行者の遺跡と傳へられ般若窟と呼ばれてゐる。

また山上に虛空藏を安置し雲上閣と云つてゐる。他に歡喜天祠、觀音堂、彌勒佛、辨財天祠、役行者堂、十三石塔等がある。

國寶としては絹本着色彌勒菩薩像、同愛染明王像、同春日曼荼羅圖等を藏してゐる。

現今は山中山麓一帶に市街をなして料亭、旅館、映畫館、溫泉場ダンスホール等さへ出來て、每月十日十六日を緣日とし一年の賽客約三百萬以上と云はれるほど盛んである。

（昭和六、四、一三夜）

山口市に於ける國寶建築（下）

天沼俊一

五。今八幡宮社殿

今八幡宮は鄕社であるが、境内も廣く建物も立派だから、縣社とほか見えぬ位である。正面の石階數十級を昇ると樓門の前に立つことになるが、慾には門迄がもう少しあつたらばと思ふ。【地名辭書】に

今八幡宮、又平清水といふ山口の舊祠にて、大内壁書、文明十年の條にも見ゆ、其建築又近代のものにあらず、大内の兵火を免れしものと云ふ、市街の東北馬場町に在り、二十二社注式に「周防國朝倉八幡、神躰同宇佐貞觀元年立行宮」とあるは此歟、同異を知らず。

とある。【特建國寶目錄】には、「文龜三?」とあり、【日本古建築精華】には

……元の朝倉八幡宮にして宇佐八幡より勸請せるが故に今八幡宮といふ、大内政弘之を今の地に移す、以來大内氏の崇敬厚く今の社殿は文龜三年政弘の建立せしものなりといふ……

とあつて、文龜三年説を採用してゐるやうである。目錄に「文龜三年?」としてあるのは、何故に「?」印をつけたのか判らない。記錄に疑があつたのか、形式上どうであらうかといふ所からか、著者に訊ねなければ判らない。私は記錄は一つも見なかつたので、實物からの判斷であるが、本殿は文龜頃でよろしいと思ふ。其他の部分——樓門と拜殿と——は、古いところは勿論あるが、また後補の部もあるため、どうもいくらか新しく見える點もある。さういふ所から、本殿丈けは文龜としておき、殘りは「?」印をつけてもよからう。但し其印は文龜としてもいゝところもあるが、また後補のところが多いため、之れよりいくらかさがるらしいといふ意味のつもりである。

* * * *

前號にもかいた通り、此建物は平面が特殊である（平面圖參照）。前から後ろへ樓門・拜殿・本殿が一直線上に竝んでゐるが、之れ等を渡廊で結びつけてゐる。さうして樓門には床がはつてあるから、先づ權現造といつた樣な感がある。岐阜縣可兒郡豐岡村に永保寺といふ寺があり、其開山堂は禮堂・あひの間・祠堂と竝んでゐるから、神社にすれば拜殿幣殿本殿といつた形で、さうして權現造の據て來た元は、この邊ではないかといふ樣に考へられてゐるやうである。また京都市北野神社保存の北野曼荼羅によると、その時分から拜殿と本殿との間に石の間があつたのだから、やはり少なくとも室町位から、この樣な式は神社建築にあつたとみてもよさゝうである。さうすると、此今八幡の建物も、室町時代に於いて、既に權現造のやうに見えても、少しも不都合はないことになるのである。つまり石の間も幣殿に相當するものも、餘程早い時からあつたと見られるのである。私は次に樓門から順に拜殿本殿と記載を試みることにする。

樓　門

下層は方一間吹き放しで床に板をはりつめてある、術語でいへば「

拭板敷」で、其兩方に方二間の翼廊がついてゐる。二間ではあるが、門の一間と長さが同じだから、つまり全體としては左右に長い床が、五間二面の建物に貼つてあるのである。門だからといつて、土足で歩くことはできないのである（挿入平面圖參照）。

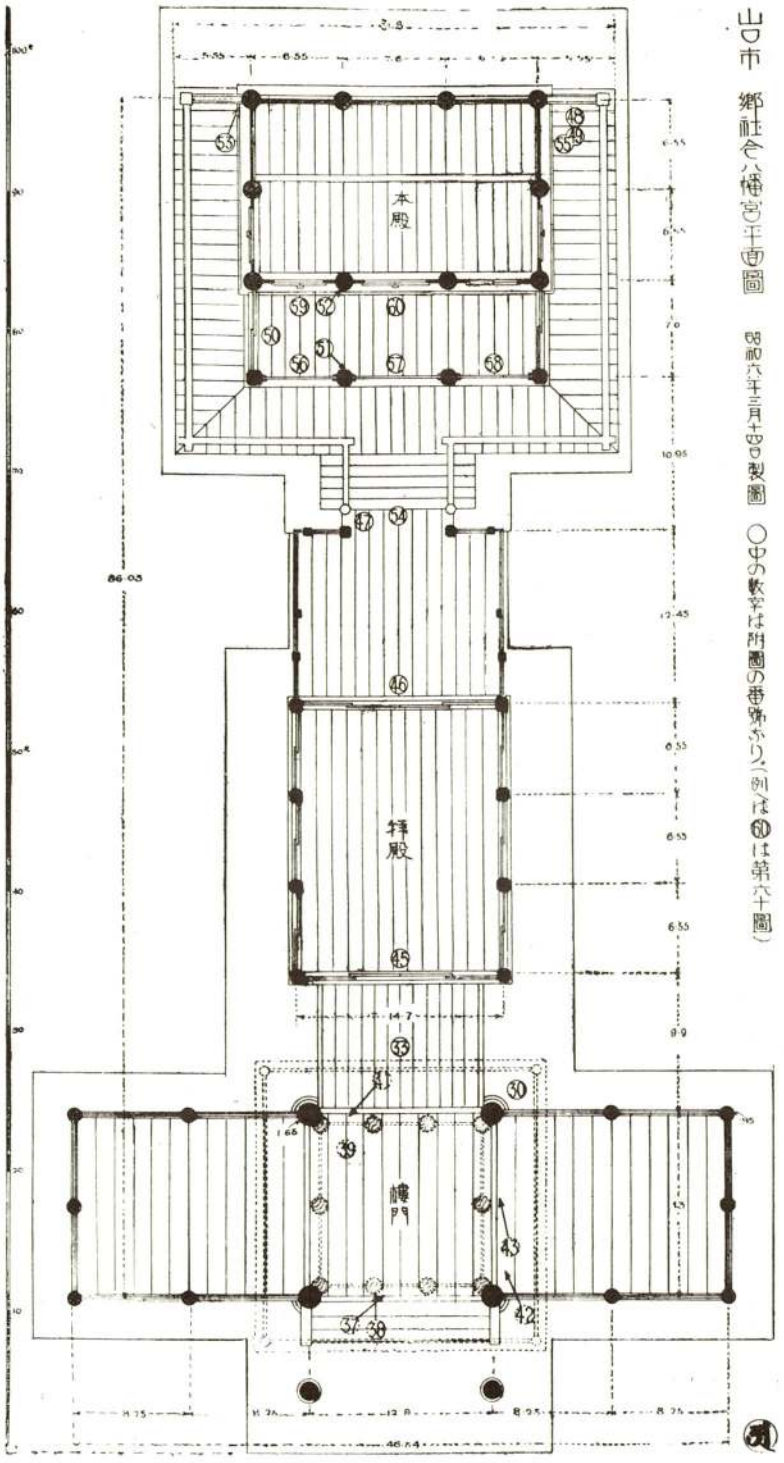
正面には深さ一間の向拜がついてゐる。幅は正面柱間と同じであるが、これ等の下部には何れも木製の礎盤を入れてある（第二十九・三十圖）。少し細いが翼廊のも同じく圓柱であるのに、それには礎盤を用ひず、ただこの六本丈にあるのであり、さうして向拜の分には、上下に粽をつけてあること、側立面圖に於いてみるが如し。其上に三枡あり、手挾の如き大して感服のできぬ木鼻をつけたものも附屬してゐる。向拜の虹梁は後補なるも、中央の蟇股の輪廓は古いとみられる。其虹梁が向拜の柱に挿し込まれてゐるところは、別段變つたことはないが、木鼻は唐様に普通なる如く、少しく內方に向へる曲線形を以て柱からでゝゐる。かゝる手法は少しくおかしいことがなくもない。私は虹梁が後補だけに、多少の疑問をもつてゐるので、之れは後に述べる。小さいどうでもいゝことかも知れないが。さうして其向拜の綉破風は上層勾欄の下にうまく納り、屋根は正面の方はいゝが、側面箕甲のところに極く僅かばかり、苦しい思ひをしてゐるやうな風に見えてゐるが、これも氣がつかねば殆んど判らぬ位である（側立面圖）。

上層は三間二面で四方に椽があり、椽勾欄を備へてゐる。其勾欄は總て新しく、數年前修補のとき補加したものである。だから前例によつたのか、或は監督技師の考へで推定復原をしたのか判らない（第二十八・第二十九及び側立面圖）。椽には珍らしいことに椽桁の鼻を覆ふ様に板を打附けてある。尤も此板は兩側面と背面とにあるだけで、正面は下層の向拜の屋根のために、これを缺いてゐる（側立面圖）。

何といふ名の板か知らぬが、假に鼻隱板としておかう。さうしたところで、此際天竺様建築の棰鼻に打つた板と間違ふ心配はあるまいから。それでこの鼻隱板は、其面に薄肉に劍巴紋を刻してある。併しながら普通の此種の文様の如く、劍の間に巴が入つてゐるのではなくて、劍は劍で下に竝び、巴紋は上の方の珠紋の竝ぶところに、二つと三つと一つ隔きに吹寄せになつて居り、其輪廓を明瞭ならしむるため、周圍を圓鑿でついてある（第三十三・三十四・三十五及第三十六圖）。圖版の解說にもかいておいたが、かゝる意匠は和歌山縣海草郡濱中村の長保寺多寶塔（延慶四年）須彌壇の脚につけてある一つ巴（螺旋模様）に見出されるところを以てみると、既に鎌倉時代からあつたといひ得るのである。さうすると敢てこゝで始まつたのでもなく、さう珍らしくもないかも知れぬが、三つ巴をかう取扱つたのや、劍巴紋としての意匠の點に於いて類例は少ないと思ふ。さうしてまた劍頭紋は、一つ隔きに出たり引込んだりしてゐる（第三十四及第三十・六圖右方斷面參照）。殊に面白いと思はれるのは後面の中央で、二枚の板のつぎ目を彌縫するためと、中心飾とを兼ねて、何かよく私には判らないが、本殿側面蟇股の中心飾（第五十圖）類似の文様を刻んで、目的を達してゐる。

奈良市官幣大社春日神社本殿の椽桁の鼻隱板及び昇勾欄の籠桁の側面には、普通の劍巴紋が用ひてある。黑いところに白くだしてあるから、極めて明瞭である。御物になつてゐる春日權現驗記（繪卷）の本殿の繪に、この文様が描いてあるのだから、鎌倉時代には既にかゝる位置へかゝる裝飾を用ひたので、初めはいつからか知れぬが、少なくとも鎌倉以降は、式年造營毎に其まゝ踏襲して今日に及んだのであらう。この例によると、かゝるところへかゝる裝飾を用ひてあつても、之れは鎌倉からあるのだから、室町なら勿論あつて少しも不思議はない。

上層の正面と後面との中央の間は出入口になつてゐる、定規椽附の小さい板扉を吊込み幣軸あり、柱當りにはこの出入口の兩方に限り、上側幣軸の先きを延長した部分が柱と出會ふところに、猪目をほつた木製六葉を、下部は胴長押の柱當り——柱の兩方には限らず——に猪目なしの木製六葉を打つてゐる（第三十七・三十八圖）。故に此等の釘隱のうち、猪目附のは總計四、猪目なしのは十四あるわけである。兩脇の間には輪寶型を中央にあけた盲連子窓がある（第三十九・四十・四十一圖）。輪寶のところからいくらか光線は入るが、內部を照明するには不足である。第三十九



山口市 鄕社今八幡宮平面圖

昭和六年三月十四日製圖 ○中の數字は附圖の番號ぶり（例は㊿は第六十圖）

圖は中から外をみたところで、外に間から見えてゐるのは拜殿の南妻である。かうすると割合に綺麗である。

兩側面は二間づゝで、そこへ同じく盲連子の中央に大内菱を入れた窓がある。この方はすべてが盲で、まるで孔はないから、裝飾以外に何の役にもたつてゐない、けれどもこれは下からよく見えるから、大に効果はある（第四十二、四十三圖）。

上層内部柱に墨書がある。もつと探したらばあるかも知れぬが、見たのは二個所で、一は後面出入口東側柱に

天正十六年卯……

上葺在之棹……

といふ風に見え、同西側柱にも多くの字があるらしいが、そのうち

八月廿二日

だけよめた。正面東側の柱には

安永四年未八月吉日

大工渡邊忠右衛門

とあつて、何れも屋根の葺替や小修理の時のものである。ところが天正の墨書のうち「卯」といふ字だと思つたのは、何かの見誤りか、或は寫し誤りか——自分では正しく讀みながら、かく時にまるで異つた字を、うつかりしてかいておき、あとで何だか意味が通じなくなつた場合が私には時々あるから、此もさうかも知れぬ——何れかであらうと思はれる。天正十六年は「戊子」で、十九年が「辛卯」だから、「卯」が正しくば十九年でなければならず、「十六」が正しければ卯が誤りである。いまどちらだか判らない。

凡そ柱間に窓を設ける場合は、其窓が盲であるともめあきであるとも、夫れに係らず普通大概は額縁の兩方が幾分は柱から離れてゐるもので、即ち兩側の額縁と柱との間に脇羽目又は小壁があるものである。稀には弘前市最勝院五重塔の如く、左右は柱につき、上下の額縁と、長押との間に餘地のあるのもある。然るに既に前號瑠璃光寺五重塔のところにかいた通り、あれと同じやうに額縁は上下左右が一ぱいで、上は臺輪下は長押、左右は框にくつついてゐて、而もたゞ外からおつつけただけのことだから、直に外せることも亦あれと同じである。第四十二圖の左端は、額縁がうまく柱につかないで、少しはなれてゐるところが偶然寫つてゐるのである。此地方にはこの樣なやり方があるのかも知れぬが、調べてゐないからはつきりしたことはいへぬ。

枓栱は出組であるが、肘木は先づ唐樣に近いものといへやう。枓はどつちとも考へられるから、肘木の木口のところの圓味から、枓栱唐樣出組としてよからう。其手先の秤肘木のまん中から前にでた木鼻も亦唐樣式であるが、其側面の渦紋を彫刻した部分は、兩方から圓鑿で突いたのと突かぬのと二種類ある。それから秤肘木上の卷枓は直に丸桁を含まないで、桁の下に通實肘木といつたやうな横木があり、それを支へてゐること、此も亦瑠璃光寺其他の如くである。してみると、これもまたこの邊に流行してゐる手法の一かも知れない。

妻飾は豕扠首。破風の拜みに大きな猪目懸魚が下がつてゐる丈けで、甚だ簡素である。棟は箱棟で、鬼板には一文字の下に三星をおいた毛利家の紋章を現はしてある。

内部の床が拭板敷になつてゐることは先にかいたが、天井は組入天井で、柱間は東側及西側には中央に一具、南側と北側とは二具づつの組物（三枓）をおき、此組物に比較的大きな梁を架渡し、さうして先づ天井を六つの等しき長方形に分ち、各方形内に南北に四本東西に七本づつの格縁を通してある。

* * * * *

左右の翼廊は二間二面、内部床板敷、天井なく化粧屋根裏。虹梁上は豕扠首であるが、かゝる場合は大概兩妻丈けが豕扠首になり、内部は中央の垂直材を缺き、合掌になつてゐるものであるのに、ここでは内部の迄が中央に垂直の材をもつてゐる。尤も拱舟肘木の簡單なもので、とりたてていふ程の事はない（第三十一圖及側立面圖）。

* * * * *

樓門の上層正面に額がかけてある（第四十四圖）。天文十二年の刻銘があ

るから、できた時に間違はあるまい。但し輪廓は可なり拙く銘が、なくばもう少し下げ度い位である。尤も銘は輪廓に刻んでないのだから、これ丈けがあとかも知れぬが、實はよく調べなかつたので、今明らかにきめかねるが、多分いいと思つてゐる。額には「八幡宮」の文字をほり、四方に高く輪廓をとり、其輪廓と額緣との間に

天文十二年癸卯二月十日

本願妙善比丘尼十穀

と刻みつけてある。最後の二字がどうしても私には「十穀」とほかみえぬが、この意味が解しかねる。額緣は覆輪がとつてあるが、入らなくともいいところで、其覆輪が入り込んで渦紋をなしたりしてゐる。さうして上下左右中央の間の廣いところに大內菱を入れ、其間の空隙を唐草で充たしてある。

＊　＊　＊

此樓門は古いところもあるが、また新しい部分も混じてゐる。併しながら、先づ建立は文龜としておいて、若し初めから柿葺であつなのなら、天正（十六年でも十九年でも）の葺替は四度目位であつたらうし、檜皮であつたのなら二度目位でこの時柿にしたとも思はれる。

拜殿

樓門の後方に少しばかり（實少しばかりであるが眞眞九尺九寸だから事）離れて一間三面の拜殿が建つてゐる。拜殿と樓門との間は、床がはつてあるから下りずに其まま進むことができる。床はほんの長押一本低い丈けである（平面圖及立面圖參照）。

此拜殿は既に記した通り、拜殿といふよりは幣殿ともいふべき性質のものである。其後方に、本殿正面階段との間を連絡してゐるところの、同じ幅の少し低い建物があるが、これは別段特別の名もないさうだし、また拜殿の一部ではない（平面圖）。拜殿はどこ迄も一間三面切妻造であるが、正面の方は餘計にでてゐて、丁度其大棟が樓門の廂の下に納つてゐるから、樓門拜殿のつぎの部分は、雨が降つてもぬれる心配はない（立面の左方の斷面で現はしてある所）。後面の方は正面に比べると出が少ない。正面の支外棰が十本だのに、後面は七本で、而も七本目のは破風板についてゐる。これも亦鎌倉時代などの建物に見出されるところで、小さいことだが注意しておく必要があらう（立面圖）。

一間三面といつても柱間には大差があり、正後兩面は十四尺七寸づつ、兩側面は六尺五寸五分の三間である。總て方柱面取で、柱一邊七寸七分、面內六寸三分だから、面見付七分となる。故に面見付と柱太さとの比は1：11となり、室町としても餘り早いところへはもつて行けぬ。

內部は化粧屋根裏で、柱上は三枓、枓栱間は間枓束を用ふ。左右向ひ合ひの柱上に大虹梁を架渡し、其虹梁上は豕扠首になつてゐること翼廊に同じ。虹梁には眉あり、袖切は特殊で本殿の繫虹梁の如く（後出、第五十、第五十一圖）、卷枓の上端に添ひ、明瞭な鈍角をなしてゐる。豕扠首の上は大枓肘木の様式の設備をなして棟木を支へてゐる、柱上三枓の肘木と、棟木受の肘木と形を異にしてゐるのは、變化を求めると同時に、恰好よく見せるためであらう（立面圖の左方にこれ等がすべてよく現はしてある）。

蟇股は兩妻中央に一個づつあり、南のものは兩面共通唐草を入れ、北のも同じく兩面共牡丹唐草を入れてある。其寫眞は第四十五・第四十六圖に示しておいたが、本殿にいい形のが澤山あるためもあらうが、どうも少し見劣がするけれども、これ丈けみてゐれば、左樣なことは決してない。

＊　＊　＊

拜殿の後方本殿までのところの四角な廣間は、いはば拜殿の擴張のやうなものらしく、同じやうに使へるところをみると、後にかうしたのかも知れない。若し後にかうしたのなら、權現造のやうな形式をとつたのが文龜からでないことになるが、これは文獻を調査しなければ判らない。或はさうしやうにも書いたものがないかも知れぬ。今のところ私はどちらともきめられないから、あとからも知れぬといふ想像

をしておくに止める丈けである。更に他日平清水八幡社でも見學に行くとき、できたらば調べてみるつもりである。

本殿

本殿は向拜附三間社流造に更に中央の間だけ向拜がつけてある（側立面圖）。京都附近で同じやうな建物といへば、大津市園城寺の新羅善神堂がかうなつてゐる。他にもあるかも知れぬが今思ひだせぬ。本殿の方は圓柱で向拜に當るところが方柱面取にしてあるところも亦同じであるが、此場合には椽束は全部方柱面取になつてゐる。尙ほ礎石が特別の形をしてゐるのは面白いことと思ふ。

向拜は三枓であるが、大枓と手挾とが古くて、あと全部補加したやうに見えた。そのうち虹梁と蟇股とは江戸時代のものらしく、あとは最近の修理のときのであらう。其蟇股は第五十四圖に示した如くで、裏面は雲に毛利の一に三星紋、正面は輪寶と記憶してゐる。大していい形ではない。詳細は圖版解說參照のこと。此向拜は正面五級の木階を保護するためにつけたものである。

此木階の兩方につけてある昇勾欄は、親柱に連當がつけてある（第四十七圖及側立面圖）。此當は二節で節は特別に太く、寶珠も割合に大きく略三角形をなし、甚だ異なつた形をしてゐる（第四十七圖）。元來この節は柱との區切りを明瞭ならしむるために造つたものらしく、若し上の方を金屬でつくるとすれば、木と金とだから別に節がなくとも、一見明らかな筈であるが、ないと何だか淋しく變つて見え、少し間がぬけてゐるといふ感がなくもない。兵庫縣飾磨郡曾左村の山の上、書寫山圓教寺金剛堂須彌壇勾欄のが即ち其一例で、一木からくりだして漆塗になつてゐるから、まるでどこが境か判らない。節は一番下が何もないこの場合で、それから一つ（日光二荒神社本殿）・二つ（山城宇治上神社本殿初め實例多し）・三つ（最多）・四つ（京都北野神社本殿）までは實例があるが、五つのは知らない。見馴れてゐるせいか、三つが最もよろしく、殊に鎌倉時代のなどになると、非常に形がいい。二つとなると、うまくやらぬと變に見えるときがある。宇治上神社本殿や法隆寺三經院及新堂のなどは、同じ二節でも中中よろしいが、信州松本の筑摩八幡社のとなると、どうも少しおちる。形もこれによく似てゐるから、これ等もあの仲間といへる。併しほんとうのことをいふと、筑摩八幡のよりまだ拙い。其原因は節の間がはなれ過ぎてゐるのと、寶珠が三角すぎて、豆腐屋の店にある「むすび」の如く、さうして大きすぎるからであらう。

木階を昇りつめると椽にでる。椽は建物の三方を巡り、本殿後方の脇障子に終る。椽には勾欄を附してあるが、それには枓束其他に古いところが殘つてゐるけれども、大部分は後補である。

脇障子は第四十九圖の如きもので、四方に框をとり、框の面には珠紋が二個づつ吹寄につけてある、この珠紋の部分は少しばかりほりしづめてある。其中に細いが大面をとつた木で井桁をくみ、一面に板をはつてある。後に述べるが、向拜の左右出入口の引違板戸がこれと同じ意匠にしてある。少しく餘談に亙るが、近江蒲生郡老蘇村の鎌宮神社（鳥居に奥石神社といふ額が上つてゐる、これは Oku Jinja とよむ）本殿の脇障子は、先年修理の際兩方共新しく補加してゐるが、其意匠は殆んどこれと同じで、框に圓紋が吹寄に三つづつあり、中の井桁の細い木をかいてゐる丈けである。これは天正九年といふことであるから、少し時代は後れるが、脇障子は多分こんなところから考へついて、推定復原をしたのであらう、と私は想像するが、この想像には相當に根據があるつもりである。今どこへもつてゐつたか知らぬが、上醍醐清瀧宮拜殿の後面の引違板戸には、框に餓鬼巴をほつた圓紋が二つ又は三つ吹寄せに用ひてあつた。これは初めから此建物のではなかつたかも知れぬが、室町時代と認められるものであつた。とにかく此時代に、引戸の框などにこの樣な意匠のあつた事は、これ等の數例で判るであらう。

脇障子上欄間は、西側のは後補だから判らぬが、東側のでみると、何といふ名か知らぬが一種特別の輪廓の中に、中央に一種の中心飾をおき、其兩方に唐草を透彫にしてある（第四十八・四十九圖）。其上方も一直線を

しないで、少し曲つた形をしてゐるが、輪廓も文様も何も彼も總て一枚板から刻みだされてゐることが、珍らしいと思ふ。竹の節の上から細い四角な柱がたち、それが桁の下に及んでゐるのは、どこでも同じ手法であるが、其上に簡單な木鼻をもつた短かい肘木がのせてある（第四十九圖右上）。縦の細い柱が直接に桁を支へても、これはただ形式だけで、大して役にたつてゐない、といふ氣がするが、かうすれば——實は桁に比べて細過るから、五十歩百歩かも知れぬが——不調和が幾分緩和されるのである。

正面深さ一間のところは、大面取角柱に部戸を吊込んである。柱方九寸六分、面内七寸、面見付一寸三分で、割合は1/7.4。だからこれは拝殿の1/11に比べて大分に大きい。時代が同じであるのに、かう迄柱の面の大さに差があるとは思へない。私は拝殿の方は文龜まで上らないのではないかと思ふのである。この事は既に最初に少しかいたが、また後に述べる。

枓栱は三枓で、其間から手挟の如き木鼻が内方にでてゐる（第五十・第五十一圖）。これは極に觸れてはゐないで、さうして前方にでてゐる梯形を逆にして斜に先を切つたやうな木鼻（第五十圖右上及第五十一圖中央に其列あり）の尻に相當してゐるので、多分一木から刻みだし、三枓を受けてゐる肘木と、大枓の上で相缺ぎにしてあるのであらう。この木鼻は向拝の手挟式（既に記した如く離れてゐるから手挟ではない）木鼻と共に、室町ならずつとあと、ことによつたらもう少し下げてもよくはあるまいかと考へられる。さうして此部の肘木には、向拝のと同様下端に面がとつてある。前の方の肘木にだけ面をとるのは、八阪神社本殿がさうなつてゐた。

枓栱間には蟇股があるが、其脚間には牡丹の透彫を入れてある（第五十六・五十七・五十八圖）。天井なく化粧屋根裏、左右は引違板戸（側立面圖）。この左右の板戸は、恰も前記脇障子と同一の意匠であるが、全部新補だから、或は推定復原かも知れない。此引違板戸の上は、本殿正面の柱上と向拝柱上の枓栱とを連絡してゐる蟇虹梁があるが（第五十圖及側立面圖）、此は普通の虹梁でもいいのに、さうしないで少しのことで海老虹梁にしてある。此海老虹梁は本殿の柱に入つてゐるところは普通の通りであるが、外陣柱上のところでは特殊の袖切がしてある。此袖切は拝殿虹梁のと同じく角ができてゐる（第五十圖及側立面圖）。この外陣四本の面取角柱上は、中の二本が前記の如く内方に手挟の如き木鼻がで、兩側の二本が内方は卷枓を一つのせた肘木になつてゐるのである（第五十圖及側立面圖）。

内陣との境も亦、柱上は三枓で枓栱間は蟇股だが、内陣の方はよく判らないけれども、間は壁だから、多分片側丈けであらう。兩端の間のが雲に天體（日・月）、中の間は寶珠に唐草より成る（第五十・五十二・五十九・六十圖）。

鎌倉以降、蟇股内の彫刻が漸く發達してきてからは、大きくいへば凡そ宇宙間の森羅萬象は皆利用されるやうになつたが、獨り天體のみは應用の途少なく、江戸時代の石燈籠の火袋の窓に、あの位賞用された日・月・星は殆んど蟇股に見出されず、ただ僅に私は江戸時代でもずつと降ると思はれた小さい厨子の正面枓栱間に、金色の新月（謂はゆる三日月型）と雲とを入れたものと、門の夫れに雲間に北斗七星（星は金色の球で、夫れを鐵棒（？）で連結したもの）をだしたのを知つてゐた位であつたが、前號にかいた八阪神社本殿の後面にもあるし、ここには二つもあつて、何れも室町時代のものと認められ、且つ意匠も勝れてゐることが判つたのである。

蟇股の中へ寶珠を三つ入れたのは、鎌倉室町時代には珍らしくはないが、一つのはさうはない。第六十圖の解説に書いた通り、ついこの間まで三つほか知らなかつたが、去年の夏一つと、今回ここで一つ、尚其上に嚴嶋神社末社荒胡子神社にも又一つあつたので、皆で六つできた。其中でここのが珠も大きく周圍の唐草が最も手が込んでゐる。さうして此種のは何れも左右相稱だが、これも亦さうである。何にしろ中心飾として寶珠を入れた以上、周圍の唐草も左右相稱でなくては納りがつかぬであらう、だからかかる意匠のは、扁平的な圖按的な彫刻が喜ばれなくなつたと同時に跡を斷つたのである、だから鎌倉室町には見出されるが、桃山以降にはたまに一つや二つ位はあるかも知れぬが、先づないといつてもよからう。とにかくこの場合は、寶珠が比

較的大きく、其面のくびれが甚だ明瞭であり、周圍の唐草が鎌倉系統の左右相稱の最も込み入つたものであることが、異彩を放つてゐるのである。つまりこの內外陣境の三つの蟇股は、いろいろの點で興味を惹くものである。

內外陣境の三個所は、側面內陣第一の間と共に、大きな幣軸を廻らし、定木條のついた板扉を吊込んである。此定木條には唐戶面の樣な面がとつてあるが、少しく角があるし、またこの部分には六葉、扉には內外陣境の分には上下端喰のところに出八双、それに連接して散八双を竝べて打つてある。このやうにしたのはさう多くの例がないと同時に、飾金具の形もいかがと思はれ、どうも後の仕事らしく思へる（尤も散八双は兩側面のにはない）。上の藥座は特別に大きく、下のは形が特殊であり、これも亦後のものと考へられなくもない。幣軸と扉とは朱塗にしてあるので、そこだけが大に目立つてゐる。

次に側面の方へ廻つてみる。條上には切目長押と二重長押（正面は部戶で、切目長押丈けで、二重長押はない）とがあり、二重長押が脇障子の下の横の材になつてゐる（第四十九圖）。此木は何といふ名か知らぬが、條上に添へるのが地覆で、これが上框とすると、間に羽目板も束もあり、先づ脇障子の臺といつたやうなものである。

脇障子の上の方、側柱の上の方をみると（第四十九圖）、前に記した太い桁の元のところは、持送りの理論に叶つてゐる二手先の組物で支へてゐる（第五十三圖）。尤もこの種類の持送りはここのみではなく、棟木でも向拜の桁でも同樣である。圖に於いてみる如く、下側の肘木を柱の上からだし、この上に天竺樣の繰形から變化した皿斗のやうになつたものを枠尻につけた卷斗をのせ、上の肘木上の卷斗では、直に桁を含ませないで、其鼻が特別のくり形をもつた實肘木を含ましてゐる。此木鼻は一見非常に變つてゐるやうであるが、これをひつくり返してみると、蟇股の脚の先きと同じ形をしてゐることが判るであらう。總て形や用ひ場所にごまかされず、注意して觀察するならば、事柄は割合に簡單に解決されるものである。

向拜のはさうではないが、本殿ののは第五十三圖にみる如く、何れも柱上からでた肘木と、其上の卷斗との間に薄い板のやうな木が入れてある。多分少し背が不足なのでかうしたのであらうが、少しばかり目障りになる。向拜の肘木には全部面をとりながら、本殿のには一つもとつてないのは、前者を割合にきやしやに見せ、後者の方を丈夫に見せるために他ならぬのであらう。

兩側面の二間には何れも蟇股が入れてあるが、中心飾は左右相稱の平面的な模樣で、中心に例の花があり、左右には筍か茗荷たけのやうなものが向ひ合ひ、其外の空間は左右少しばかり異なつてゐる唐草か何かを以て充たしてある。餘り要領を得た形でもないやうだが、相當の變化を見せてゐる。併し少しばかり錯綜しすぎてゐて、迷路の如く何だかよく判らず、それを判らせやうと思つて、よくみたがどうも判然しなかつた。あとからゆつくり寫した寫眞をながめたが、それでもやはり要領を得なかつた（第五十五圖）。私は斯樣な文樣は餘りすきでない。妻飾家扠首

最後に後面に移る。後面には三個の蟇股が枠栱間にある。中央のは「澤潟」がほつてあるやうだが、兩脇の間のは「水に魚」の如く見える。魚は一尾づつ入つてゐるが、左のは右を右のは左を向き、互に向きあつてゐるやうで、さうして鰭か何か少し見えてゐるだけで、魚としても、どういふ魚かよく判らぬ。此建物は八阪神社本殿より尙ほ高いので、眼鏡で覗いても光線の工合がどうもはつきりしなかつたので、漸く「水に魚」といふことだけ確めることができた。室町時代に蟇股の中に水と魚などをほつたのは、他にも例があるからここばかりとはいへない。但し私の知つてゐる範圍では多く鯉であつた。そばでみたらばここのも或は平凡な鯉かも知れない。

* * * *

此建物は樓門・拜殿・本殿の三棟より成り、各廊を以て連絡してゐるところが、大に興味のあるところで、假に其連絡が後世行はれたものとしても神社建築史上重要なる位置を占めてゐるもので、殊に拜殿が

妻入になつてゐるところ等、決して輕々に看過すべからざるものであらう。

次に其建立年代であるが、どうも何れも皆同時代とは認め難い。私のみたところでは、本殿は向拜とか懸魚とかいふものを除き文龜三年でよろしく、最もよく保存されてゐる。樓門も亦文龜ではあらうが、桃山時代に本殿の向拜と共に手が入つてゐるのではあるまいかと思ふ。拜殿は或は桃山に改築されたのかも知れない。

斯様なことは、實はあるかないか判らぬが、あつたらば記錄を調べ、またなくば實地を充分に觀察してから熟考すべきで、私のは大に輕率であると自覺はしてゐるが、以上は私が直覺でさう感じたのでかいてみたのである。今後好機があつたら尙よく調べてみるつもりである。

結　尾

山口市の滯在は僅に三日と半日で、而も日の短い時であつたのと、正月のせいか朝早くしたくができず、漸く宿をでたのが九時から九時半の間で、午後は四時半になると、天氣のいいときでも、もう餘り仕事ができない狀態であつたから、時間は日にいくらもなかつた。二日の午後から晴れだし三日は非常な好晴となり、殊に今八幡宮では、天氣がよくて暖かで洵に好都合であつた。夫れに引かへ、四日は大曇りで十時半頃から降りだし、終日歇まなかつたため、一日の仕事として古熊神社で三つ、八阪神社で七つ、合計十の墓股の寫眞をとつた丈けであつた。また此日が雨であつたため、市外約一里の平清水八幡社は、他日に延期することにしてしまつた。

併しながら市內所在の國寶建築を八棟、例へ僅かの時間づつでもみたために、私はこの時迄知らなかつた左の事柄を知り得たのであつた、即ち

（一）、圓形唐樣須彌壇の存在（瑠璃光寺五重塔）

（二）、大枓に枓繰なく立方躰のものあること（同上）。

（三）、額栿の儘柱間に嵌込みたる盲窓の存在（同上・今八幡宮樓門）。

（四）、墓股內の彫刻に牡丹に鳳凰（八阪神社）・松竹——松に鳳凰・竹に鳳凰（古熊神社）等があり、鳳凰が多く用ひられてゐる事。

（五）、墓股內の彫刻に、既に室町時代に於いて瓜を用ひてゐる事（八阪神社）。

（六）、同に「大內菱」を用ひ、また後世のものは「一に三星」を用ひてゐるから、例へ文樣や形式の變遷が判らなくとも、この方面の素養があれば、それ等によりて大凡其物の製作年代を知ることができること（八阪・古熊・今八幡）。

（七）、室町時代の墓股に天躰を入れたもののある事（八阪・今八幡）。

（八）、同に寶珠入の一新例のあつた事（今八幡）。

等である。其他盲窓に輪寶を入れたのや、栿の鼻隱板に新意匠の劍巴紋を入れたの等は、去る大正十二年の末に園田新造氏から贈られた青寫眞や摺本等によりて知つてはゐたが、輪寶はどの邊が孔になつてゐるのか、或は全部盲で、大內菱を入れたのと同じであるかどうか、といふやうなことが、實物をみるまでどうも判然しなかつたのである。

斯樣な狀態であるから、謂はゆる昨是今非は常に起りつつあるのである。昨日迄いいと思つてゐたことは、今日いけなくなる。新陳代謝もかう極端では困るが、どうも致し方がない。ほんとうの事をいへば、日本國中を行脚して、せめて現在指定されてゐる國寶建築丈けでも全部みた上でなければ、何にも言へぬし何もかけぬのであるが、目下の私にとつてはできない相談である。だから今迄知つてゐる丈けの材料でかきも言ひもするのだから、間違だらけの記事かも知れない、だから讀者諸君も其つもりで讀まれん事を望む。と同時に、此方面に趣味のある人は、ひまの時には成るべく多くの建築物を視察されんことをも望むのである。

* * * *

編輯員鷹取陽君から、何でもいいから書く樣にとの話が昨年の暮に

あつた。そこで今度は私にとつては極く新しく珍らしいが、大多數の會員諸君にとつては、現代にまるで用のない古寺や古宮のことでお氣の毒と思ひながらも、學校・病院・銀行・住宅何一つかけないから、止むを得ずこのやうなものにしておいたのである。

附　錄

今八幡宮に大きな鰐口がある。鰐口は元來寺にあるべきであるが、後には神社にもいくらでもあるやうになつた。寸法をとらなかつたから、直徑がいくらあるか數字ではかけぬが、三尺位はあつたやうに思ふ、厚さこれに相當したもので、一面に左の銘がある。向て右に二行に

奉寄進鰐口周防〆山口今八幡大菩薩御寶前
大檀那從五位下守左京大夫多々良朝臣義隆
向て左に二行
施主神明大宮司從五位下橘朝臣兼重同歲信藤原朝臣景助
于時天文三年甲卯月上旬葺屋金屋大工大江朝臣定秀敬白

（昭和六年三月十日稿了）

前號正誤

前號第十一頁、第一圖及第二圖解說中、上より第七行目、即ち最終行「此點」の次に「と第二重目勾欄親柱と」の十字を脫せり。

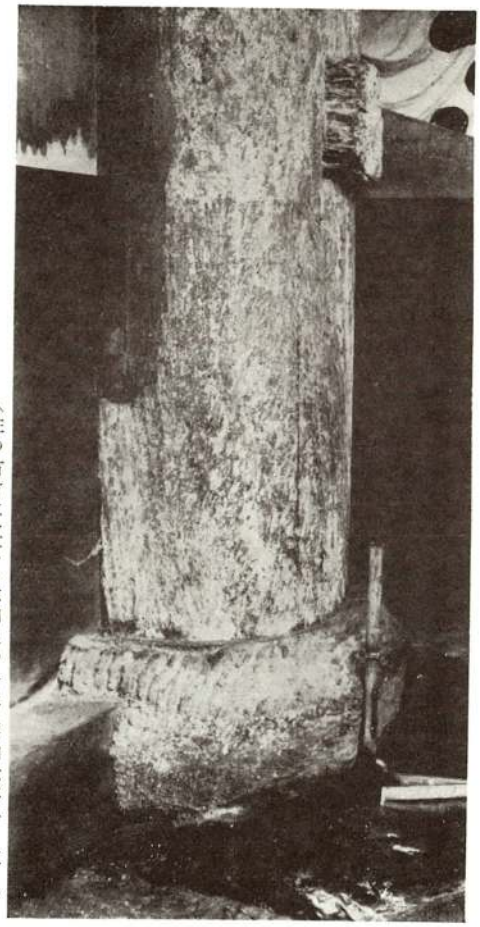


第二十八圖　山口市　今八幡宮樓門

（此圖以下特に年月日を記したもの、及び摺本の寫眞を除き、全部昭和六年一月三日の撮影）

下層は一間一面，上層は三間二面の建築で，正面に深さ一間の向拜，兩側からは方二間の翼廊ともいふべきものがでてゐる。向拜のついてゐるところは聊變つてゐるし，また門である以上，土足で通行ができるやうに思はれるが，さうはいかない。拭板敷になつてゐるから，前の石段を昇りつめたところで，下駄をぬがねばならぬ。

廊門には違ひないが，これが先づ權現造等の拜殿に當るので，簡單に拜むなら寫眞に見えてゐるやうに，段の下に立つてすますこともできる。そこで向拜の必要がある。そこで向拜をつけたのであらう。京都市清水寺の門は，單層切妻造であるが，向拜のついてゐるので珍らしい。ところが此門にも同じく向拜がついてゐる。これは全く實用からきたので，清水寺のはなくともすむが，これはないと困るので，必要からきたのである（三月一日）。



（柱の右方に立てるは曲尺の一尺・昭和六年一月五日）



右，第二十九圖。　山口市，今八幡宮樣門向拜詳細。
左，第三十圖。　同　　柱及礎盤。

前圖の向拜を近くみたところ。柱下に礎盤のあることに注意せよ。上方の木鼻はこれではよく判らないが，縋破風の桁隱が桃山式で，文龜三年とは見えにくいやうな氣がする。上層勾欄は新しく，寶珠柱も同斷で，推定復原であるか，古いのによつたのか判然しない。

左圖は後側の柱の礎盤をみせたので，柱の下に「粽」のないところと，礎盤の形が割合に背の高いことゝに注意すべきである。殆んど和樣のところへ，ほんの一滴唐樣が交つてゐるのである（三月一日）。



第三十一圖　今八幡宮側面全景

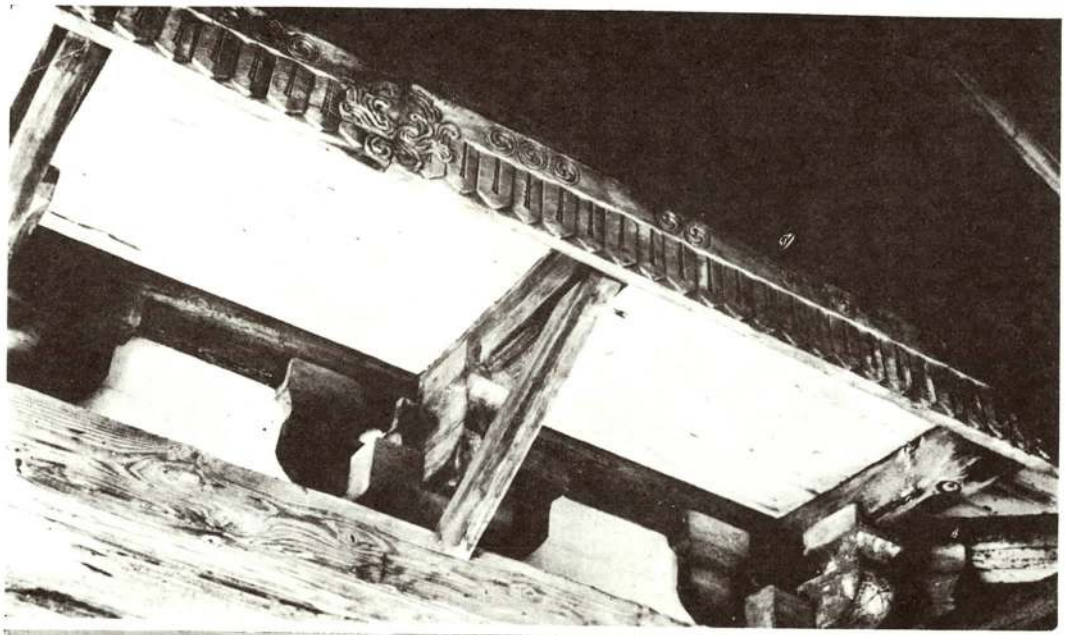
（昭和六年一月五日）



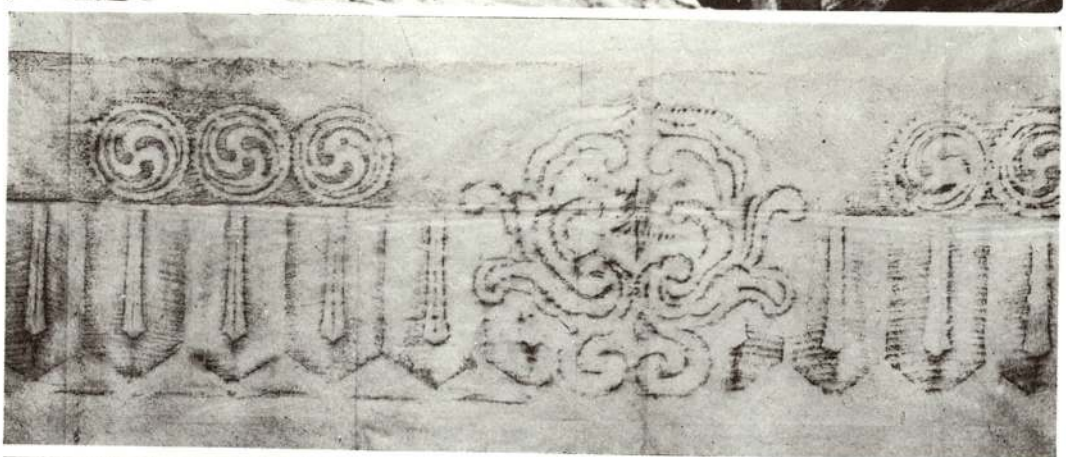
第三十二圖　同本殿側面

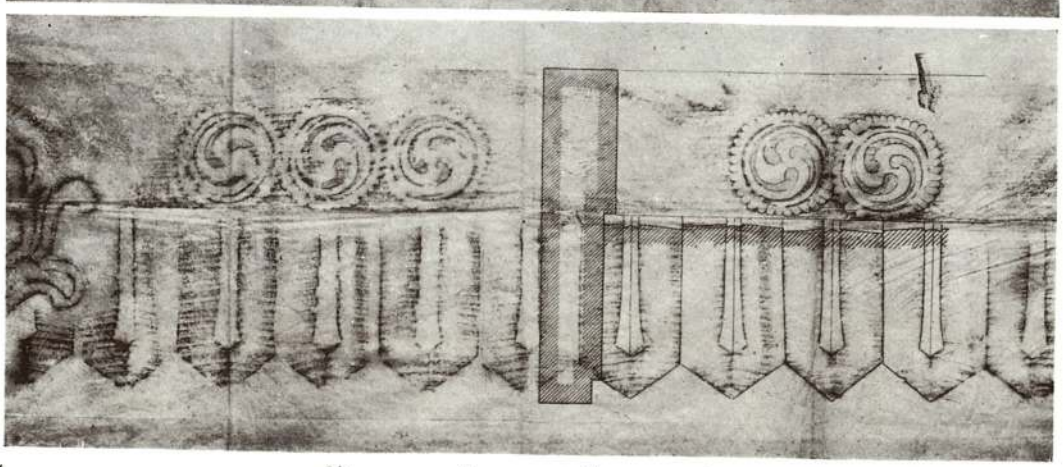
（同年同月同日）

一月四日は午前が大曇で午後は雨となり，全景の寫眞等は思ひもよらなかつたので，五日まで延期したところ，雨は歇んだが大變な霧で，平素から少しも上達しない素人寫眞は，遂に第三十一圖の如き，朦朧たるものができてしまつた　最左端の幕をはつてあるのが翼廊の一部，其右が拜殿，右端が本殿で，これは第三十二圖の方がはつきりしてゐる。修理前は全部鞘が掛つてゐて，立派な側面はまるで見えなかつた。【日本古建築精華】（中册第42頁）にでてゐる圖は，何も見えなく，椽下の柵と鞘と屋根丈けの寫眞だから，あれに比べると，これでも餘程いゝのである（三月一日）。



第三十三圖　樓門後面椽桁鼻隱板

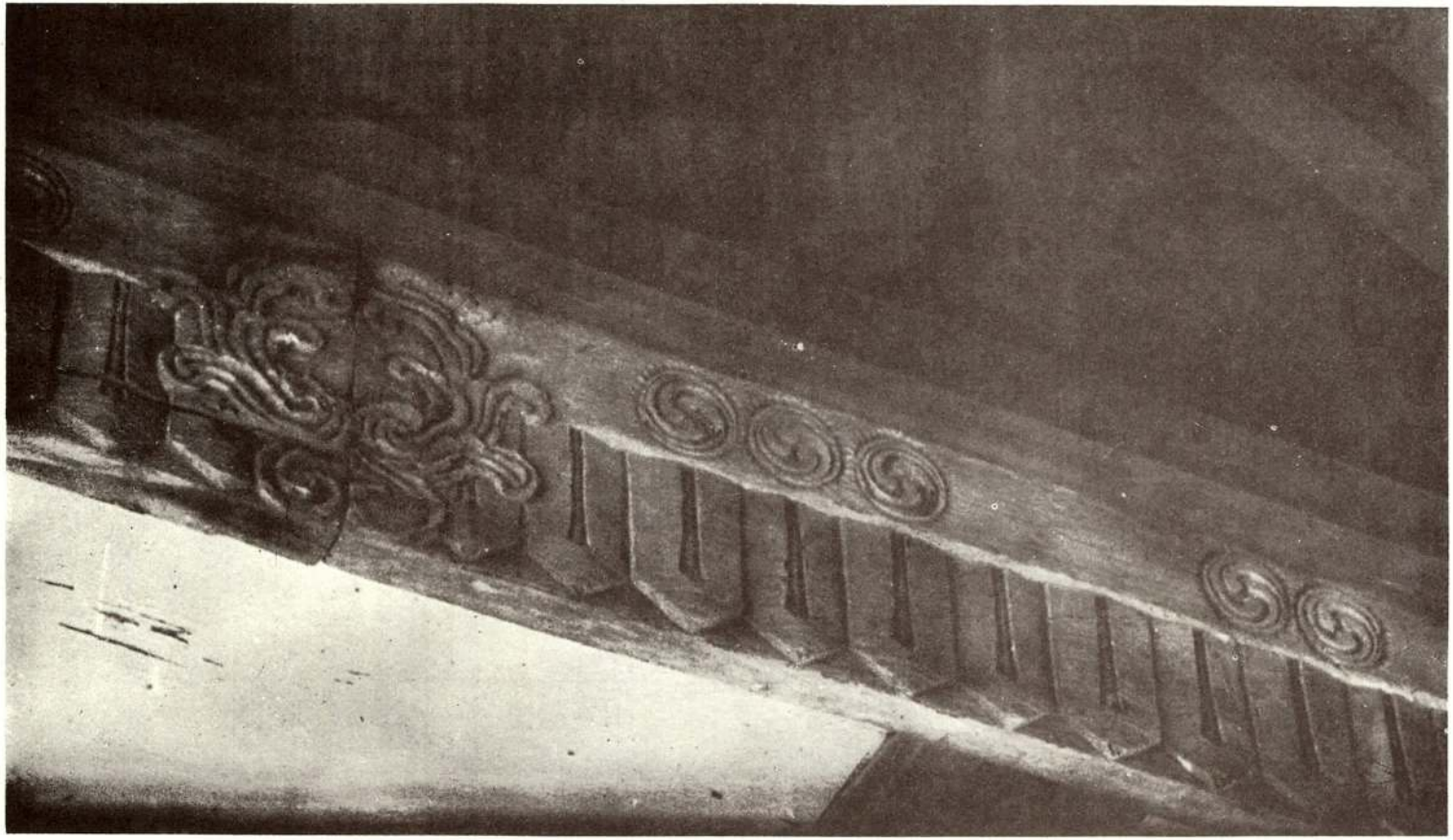




第三十五圖・第三十六圖　同上文機摺本



第三十四圖　第三十三圖の一部擴大



（第三十三圖以下解說は次頁にあり）

第三十三圖は拜殿の前の東へよつたところから全體を寫してみたもので，三十四・三十五は其一部の摺本，第三十六圖は第三十三圖の一部を大きく見せたのである。此は本文にも書いた通り「劍巴紋」であるが，普通の場合には劍の間に巴文を適宜に配置してあるのと，劍と劍との間がいくらかはなれてゐること，例へば東大寺三月堂內陣須彌壇に於けるが如きものである。

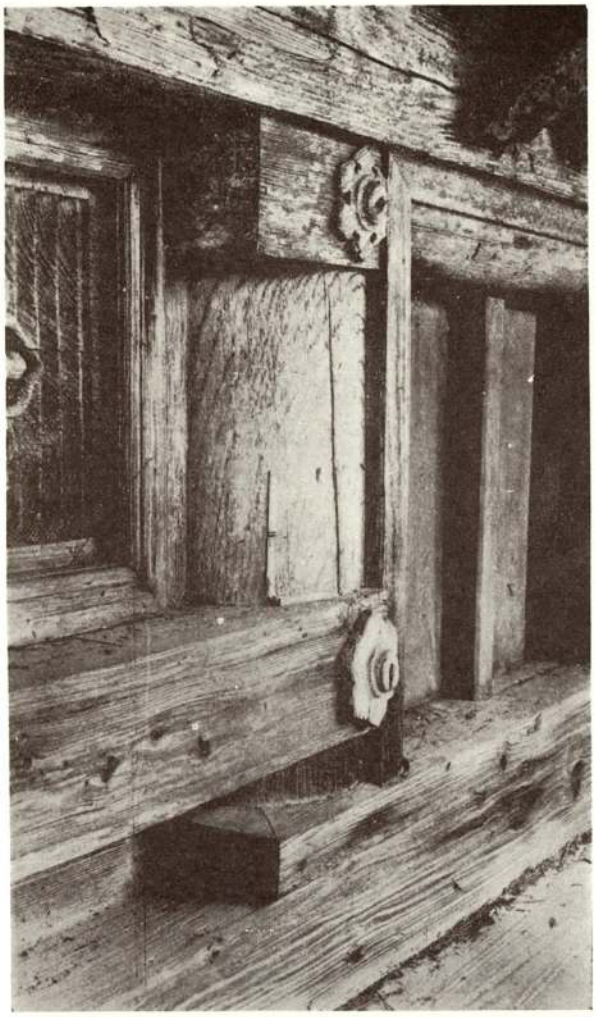
然るに此は珍らしいことには，劍が一つ隔きに出たり引込んだりしてゐるのと，其一つ一つが外の輪廓は普通であるが，內部は先きが尖つて少しく外方に開き，ほんとうの劍の先きのやうになつてゐる。さうしてこの一つおきに出入してゐる劍頸紋丈けが下に竝び，上の珠紋の並列する場所に，巴紋が二つ又は三つ吹寄せにつけてある。其刻み方は，實質は板の面と同じ高さで，空間を若干其面より凹まし，尙周圍をはつきりさせるため，圓鑿であたりをつけてある。なかなか面白いやり方であると思ふ。併しながらこの圓鑿でついたのは，延慶四年の建築なる長保寺多寶塔須彌壇の脚に，類似の意匠が見出される。故に鎌倉時代からあつた手法と考へていゝやうである。

其上尙一層面白いことは，中央の板をつきつけてあるところに，何かよく判らないが，左右相稱の一種の模樣を淺くほつてあることである　兩側面はうまく隱れるし，正面は向拜の屋根で覆はれて了つて見えぬから問題は起らぬが，裏の中央は何かないと物淋しいところであるので，かゝる新意匠を凝らしたものと思はれる。恐らくかゝる例は殆んど他にあるまい。

【春日權現驗記】といふ鎌倉時代の繪卷物に，奈良の春日神社の本殿の圖がでてゐるが，やはり現在のやうに階段の彫刻や椽の鼻隱板の面は，劍巴紋を以て裝飾されてゐるところをみると，恐らく平安時代から，かういふところに斯樣な裝飾法を用ひたのではないかと考へられる（三月一日）。

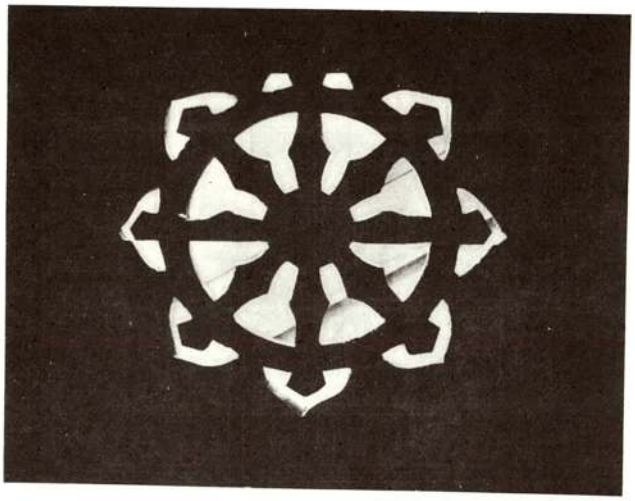
上。第三十七圖　櫻門上層正面出入口（腰長押上に立てるは曲尺の約五寸（六吋））

下。第三十八圖　同　幣軸一部及上部釘隱詳細



腰長押と幣軸の上框から兩方にでたところの柱當りには、裝飾と兼ねて六葉の釘隱を打つてある。上のには猪目があり、下のにはない。下のは勿論、上のでも、下からは中々見えないのに、叮嚀に意匠がかへてある。元とは金箔でもおいてあつたらうが、今はこの通り素木である。下のも大きく寫したが、機械が動いて失敗した（三月一日）。





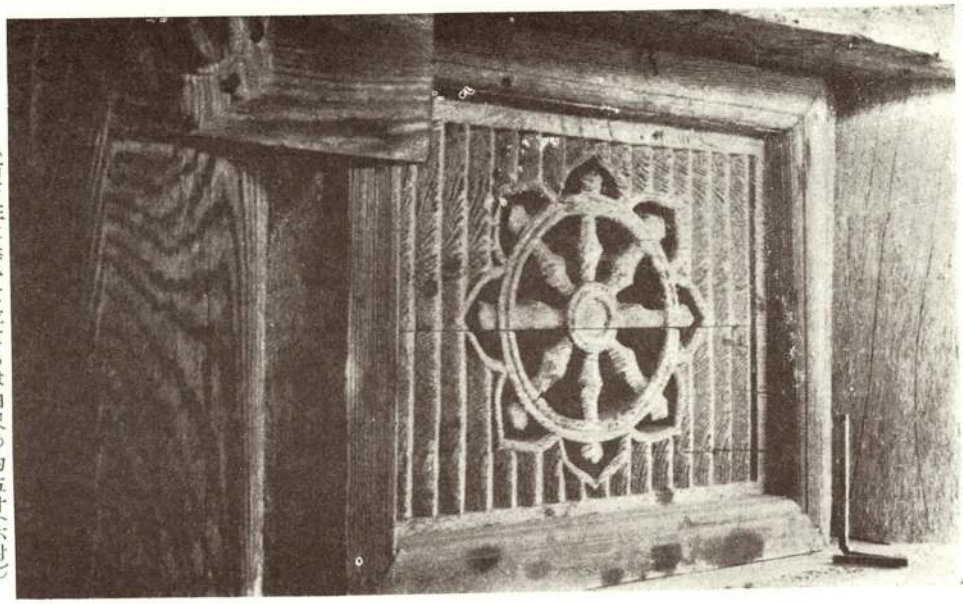
上。第三十九圖　樓門上層後面西南隅の窓を內部より見る
下。第四十圖　同　正面



（下圖左端に立てるは曲尺の一尺）

樓門上層は正面（後面）と側面とで窓が異なつてゐる。次に述べるが、兩脇面は謂はゆる「大內菱」を入れた盲窓になつて居り、正面と背面とは、中央が板唐戶を吊込んだ出入口で、兩脇間はこゝに圖示したやうに、盲連子の中央に輪寶を入れたもので、其輪寶の輻の間と、周圍のOgee型をなした八稜のところとがあいてゐる、そこから內部に光が入るやうになつてゐるが、大して効果はない。上層內部には床がはつてあるが、實は物置に用ひられる位のことで、出入口を閉めて此等四つの窓からのみ採光する必要は全くない。然らば出入口をあけておくとすると、これ等の窓は、實用上にはあつてもなくても變りはないのである。さうすると單に裝飾に丈けやくにたつとみるよりほかにあるまい。

連子窓の框は面が極く小さい。鎌倉の末からよくこの樣なのがあつたから、これは（次頁へ）

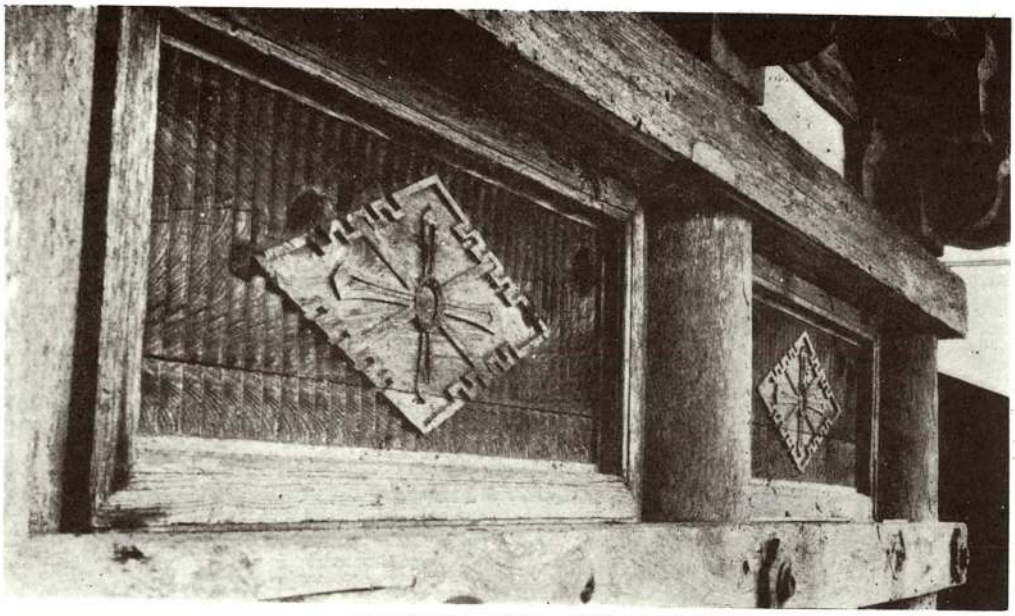


第四十一圖　同其位置に於いて斜に見る
（右下柱に添ひて立てるは曲尺の約五寸（六吋））

（前頁より）別段取立てゝいふ程の事はないが、珍らしいと思はれるのは、更に其内に枠をとつて、さうして其中に盲連子を入れてあることで、側面の窓もかうなつてゐる。かゝる手法は飛鳥とか奈良とかいふ古い時代に於いて、額様が簡單な長方形の斷面を持つてゐる時分には間々あつたが、近畿地方では、時代がこれ位降ると、あまり見ないやうである。

而して其中央に輪寶型の窓をあけてあるが、いふ迄もなく輪寶なるものは佛教に關係したもので、神社には元來全く緣のないものである。前面に寫眞をかゝげた八阪神社の臺股に梵字を入れたりしたのも、同様に神社には不都合なものであるが、神佛混淆時代には常にあつたことで、少しも珍らしくも、亦不合理でもなかつたのである。こんなものばかりではない、昔しは神社建築の礎石に蓮花をほつたり、向拜手挾や花肘木や臺股の中に蓮唐草を用ひたり、拜殿の妻飾に金剛杵をつけたり、こんな例は枚擧に遑がないのである。

此窓も亦、瑠璃光寺五重塔の夫れの如く、額様ごと外から柱間におつつけてある。だから同様に外から引張つても内から押しても、そつくり其まゝはづせる。さうしてみると、此やうなやり方は、この邊一般に行はれてゐるのかも知れない。此種の窓四ケ所のうち、大概は修理が入つて居り、これが最も完全なものであつた。（三月二日）。



第四十二圖　樓門上層東側面盲連子窓

此等は向て右即ち東側面の盲窓である。正面と側面と柱間は殆んど同じであるのに，正面は三間，側面は二間にしてあるから，自然側面の方は柱間が廣い。そこへ連子窓を入れるから，從つて窓の幅は廣くなる。だから正面や後面の樣に圓いものを入れたのでは，兩方が餘り過ぎて形がよくない。そこで横に長い菱を入れたのは，うまい考へであると言はねばならぬ。

此も亦，額縁ごと外からおしつけてある丈けである。大概の連子窓は，上下は長押に一ぱいとしても，左右はいくらかあいてゐて，柱との間に小脇羽目又は小壁といつたやうなものができてゐるのに，瑠璃光寺の塔のもこれも，柱間一ぱいに入れてある。これも亦地方色の一つと言ひ得るのかも知れない。

釘隱は此場合腰長押にばかりあつて，下の切目長押にも上長押にもない。猪の目のない木製六葉で，第三十七圖にでてゐるのと同じものである。切目長押はとにかく，腰長押に打つよりは，上長押に用ひた方が下からみたときいくらか見えるから，多少の効果はある筈だから，さうしさうなものであるのに，なぜ上を略したのか，その邊のことが我々にはどうもよく判らない（三月二日）。



第四十三圖　樓門上層東側枓栱

此は前圖と同じところで，其右半分即ち東側の北半分がこれである。椽迄寫つてゐるから，切目長押•腰長押•上長押共皆よく見えてゐる。枓栱は出組で，其間から一つ一つ木鼻が突出してゐる。さうして枓栱間には何の裝飾もないこと寫眞の通りである。

寫眞には現はれてゐぬが構造の點で少しばかり面白いところがある。大枓から前方へでてゐる肘木——即ち秤肘木を支へてゐる卷枓の乘つてゐる肘木——は，前方にでてゐる約三倍位後方にのび，其上に横に木を渡し，束をたて，其束で前後に架渡した梁を支へしめてゐる。中中うまい考へで，梁は垂み勝ちだから，此束は自然下に壓される。束がおされれば肘木の尻を下におす，さうすれば大枓の上が支點となり，肘木の鼻は上に上る，自然軒桁は少なくとも其位置に保たれることになつてくる（本文挿圖及記事參照）。

此も亦秤肘木上の卷枓は，直に桁を含まないで，其下にある通實肘木とでもいふべき長い細い木を含んでゐる。木鼻は室町といふよりは，寧ろ桃山に近い形をしてゐるやうである。

（三月二日）

此は樓門上層の正面に掲げてある額で、割合に背が高いため、適當な角度にならず、遙に下を向けてあるから、少し向きすぎてゐるやうであるが、下から仰いでみると、さうでもない。額は寫眞にみる如く中央に「八幡宮」の文字あり、其輪廓と額楔との間の狹いところに、向て右及び左に夫れ夫れ

天文十二年癸卯二月十日

本願妙善比丘尼十穀

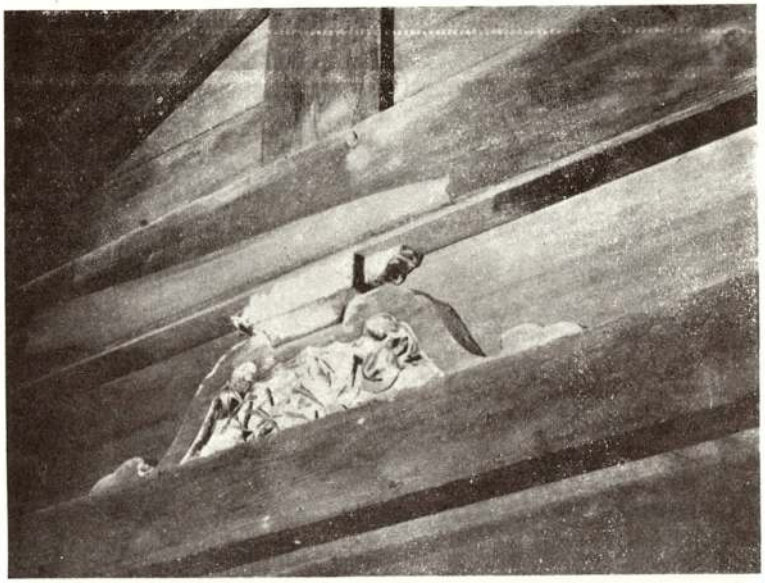
と刻んである。だから少なくとも此額は文龜年間のものでない事は確かである。

額はおろさぬ以上正面から寫眞はとれず、さりとて下ろすこともできず、止むを得ず横から撮り、さうして夫れをできる丈け氣持よく見せるため垂直の位置をとらせ、他の方を曲げておいた。だから元來垂直たるべき軸部はまるで上向きになつて了つつた。見たところ變だが止むを得ない。



第四十四圖　樓門上層正面額

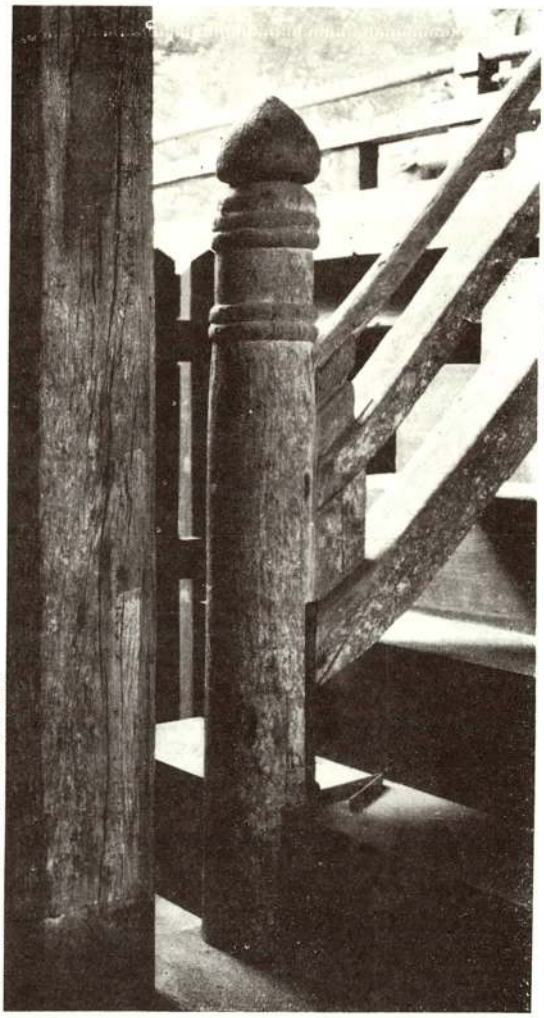
額楔は形が大してよくない、さうして覆輪がとつてあり、夫れも變なところで中に入り込んでゐるが、これは時代からいふと、仕方がないであらう。其上下左右の中央に例の如く大內菱を陽刻し、其空隙は唐草で埋めてある。中中精巧なものといへる。前圖の木鼻等も天文位にもつてきたらいいかも知れぬ。樓門翼廊全體或はこの位迄下かるかも知れぬ（三月二日）。





第四十五圖　第四十六圖　拜殿南妻內部（上）及北妻外部（下）蟇股

少しく明瞭を缺くが，上は蓮唐草(外部も同樣であるが，少しく異なつたところもある)に葦か何かを配したもので，下は牡丹唐草である。拜殿は一間三面で，妻の內側は豕扠首になつてゐること，寫眞でみる通りである。下は拜殿と本殿との間をつないでゐる渡廊のやうなものの化粧棟木が，此蟇股上の枓にかかり，さうして化粧屋根裏をみせてゐる。幣殿には彫刻は殆んどなく，先づこの蟇股位のものである。此等四個の蟇股も，其輪廓は餘り感服のできぬ形で，八阪神社のを幾分まづくしたやうな形である。拜殿の柱は面取の角であるが，文龜迄は上るかどうか問題である。要するに此建物も，面から推すと大大的に讓歩しても室町末位，寧ろ桃山と考へた方がいいかも知れない(三月二日)。

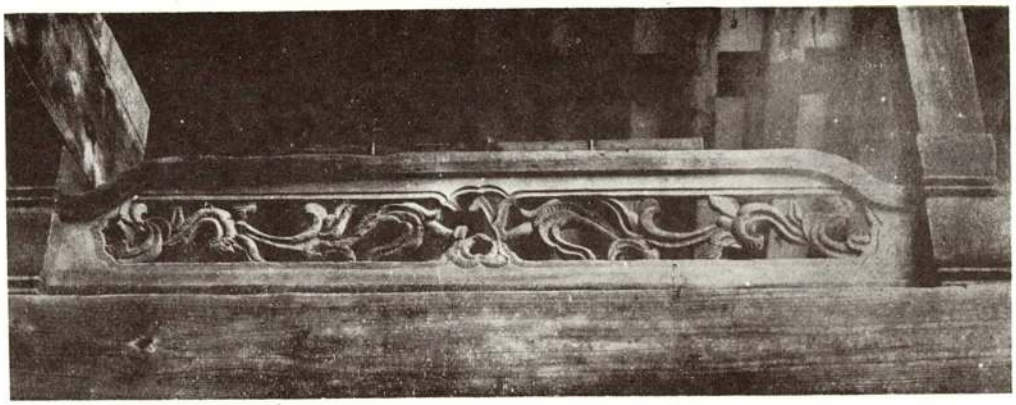


第四十七圖　本殿正面實側昇勾西欄及珠柱

（柱に添ひて立てるは曲尺の一尺）

昇勾欄の親柱の一つで，正に謂はゆる擬寶珠であるが，柱と共に一木から刻みだしてあり，且つ節は二つで割合に太く，上の寶珠は略三角形でこれも亦異常に大きく，どうも形はよくない。併しながらこれはやはり室町のものとみてよささうである。

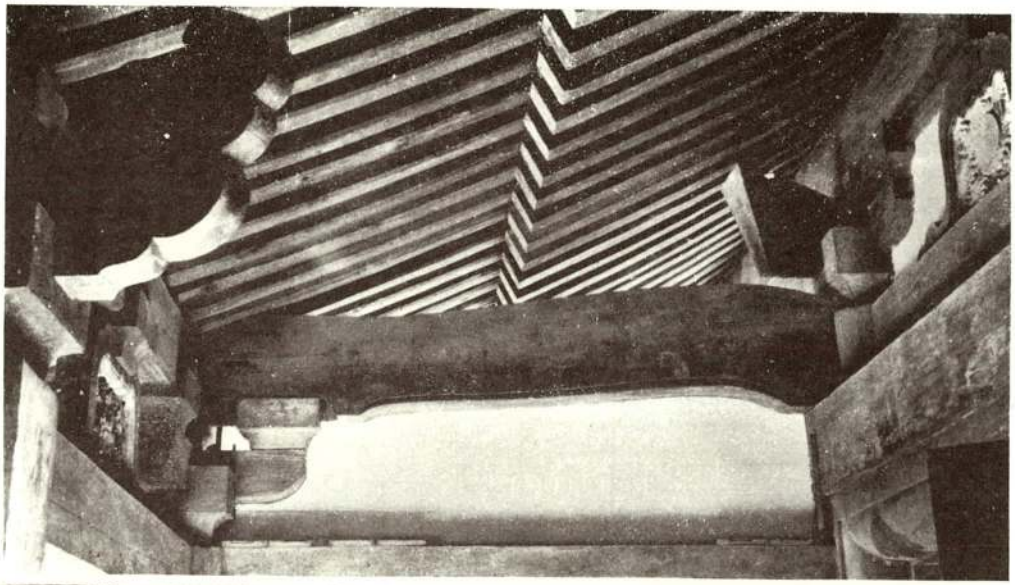
本文にもかいたが，節の二つの例は鎌倉時代から相當にあり，さう決して珍らしくはないが，これ等は余り形のいい方ではない。同じ室町の中でも，氣の毒ながら拙い方の部に入る資格がある(三月三日)。

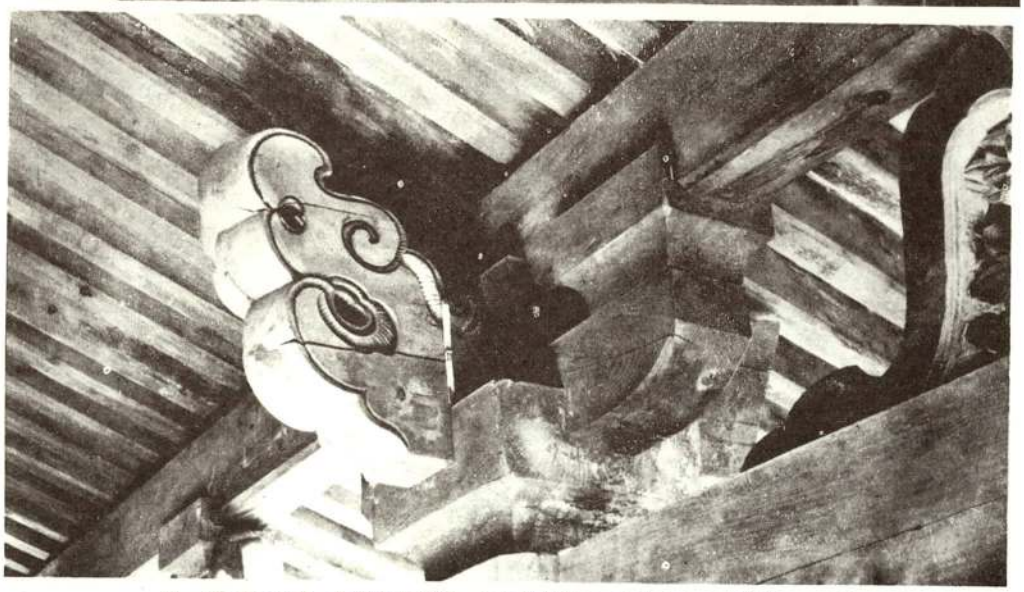


上。第四十八圖　本殿東面脇障子上欄間彫刻（上に平たるあるは曲尺の二尺）
下。第四十九圖　同　全景（左下に立てるは曲尺の一尺）

脇障子は額椽の面に珠紋を吹寄せに刻し、其内に細い棧を井桁に入れたもの。上部竹の節の間の透彫は、第一に輪廓が特殊の形をしてゐることと、其輪廓も内部の唐草も、總て一木から刻みだされてゐることと、唐草の中心飾が何か判らぬが、珍らしい形をしてゐること等に注意すべく、尚ほ普通の場合は、竹の節の上からでた棒がただ其まま桁の下迄達してゐる丈けであるのに、これでは實肘木のやうなもの――舟肘木といつた方がいいかも知れぬ――が入れてある。欄間透刻は西側のは後補（三月三日）。





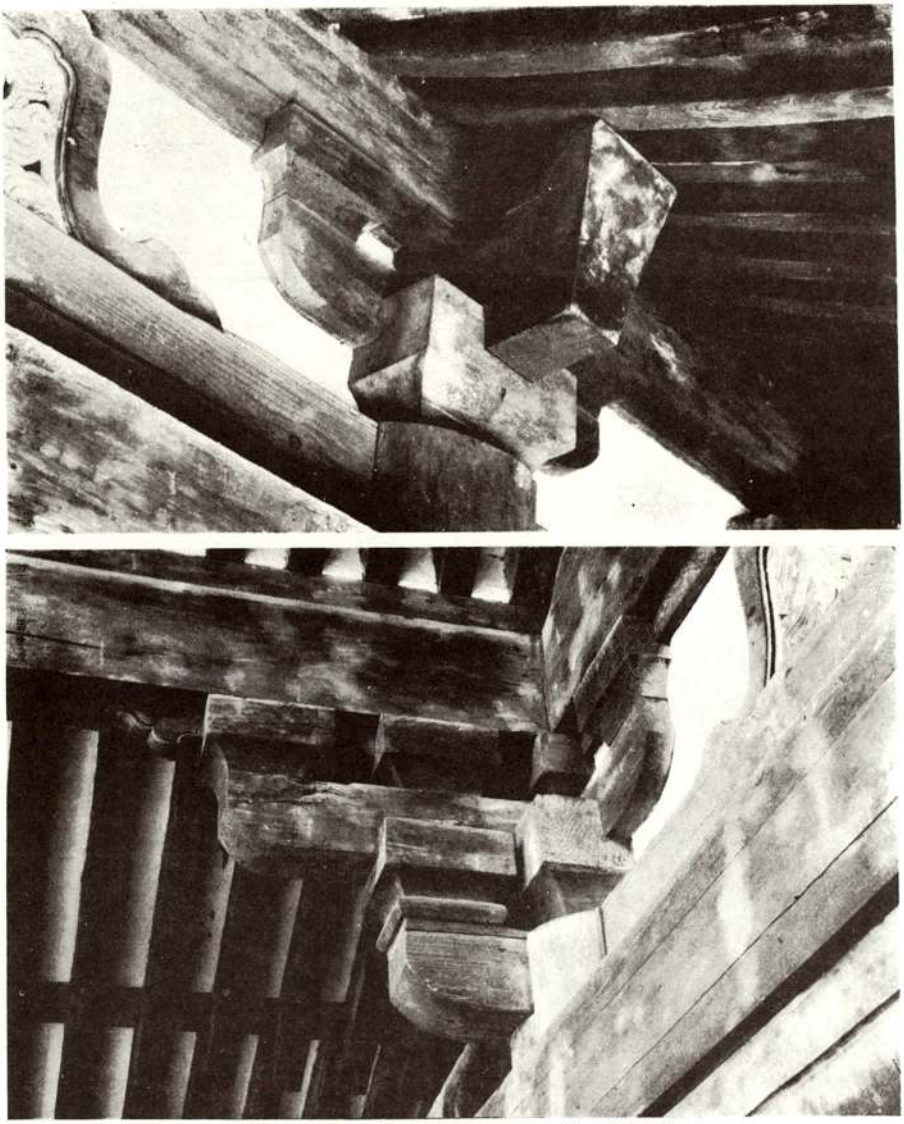


上，第五十圖　本殿外陣正側（左方頭貫上に平たくあるは曲尺の二尺）

下，第五十一圖　同　柱上三枡及木鼻詳細（大斗上に立てるは曲尺の約五寸(六吋)）

上圖に於いて，蟇虹梁は普通ので差支ないのに，極僅か海老虹梁にしてある。さうして圖の左方に見えてゐる袖切は，卷斗の右上角の邊で鈍角を作つてゐる。右方虹梁上にでてゐる楔形の木鼻は，內陣天井の竿緣を受けてゐる卷斗下肘木の鼻である。其右に半分見えてゐる蟇股は第五十九圖に，圖の左方の斜のは第五十八圖に，其全體をだしてある。下圖の右端に半分見えてゐるもの亦同じ蟇股である。

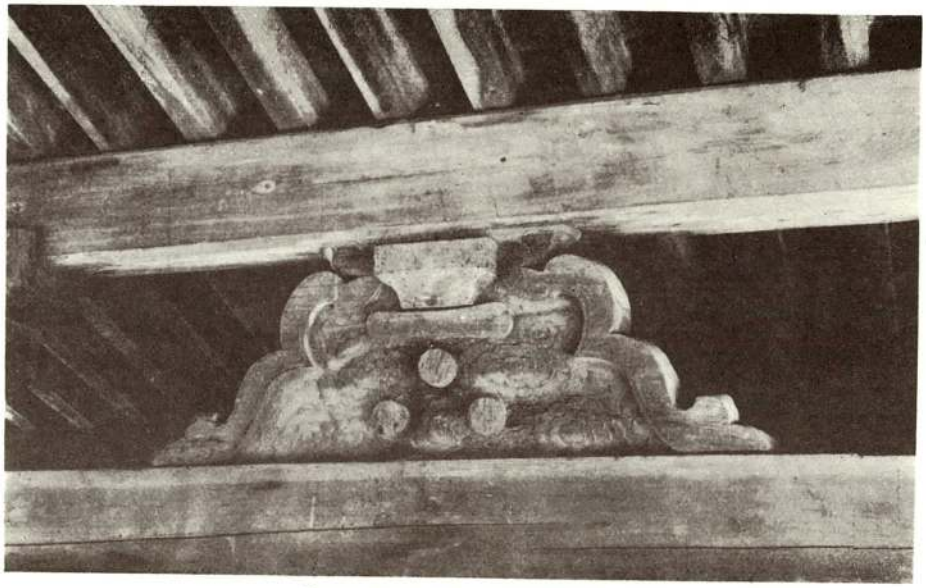
下圖中央の大きな木鼻は，上圖の左上のと同じもので，ただ反對の側からみたのである。室町の而も文龜頃としては餘りうまくない。どうもこれでは桃山に近いやうに見える(三月三日)。



上，第五十二圖　本殿內外陣境柱上三枓及び楔形木鼻
下，第五十三圖　同　側柱上枓栱（下位の巻斗と實肘木の鼻とに注意せよ）

上圖左端の蟇股は第五十圖右端のと同じもので，內外陣境の西端のである。楔形木鼻は平安以降の虹梁の鼻にいくらもあるが，上のひらきが多い事と，大變に內を向けて切つてあることとで，著しく變つて見えるのであらう。右下に少し見えてゐる蟇股は，第六十圖に詳細圖がある。

下圖に於いては，柱上からでてゐる肘木上の枓に皿枓のやうなものがついてゐることと，肘木上端にはぎ木があることとを見逃してはならぬ。夫れから桁を支へてゐる巻枓に含まれたる實肘木の鼻が隨分變つてゐることや，巻枓の總てが「通實肘木」とでもいふやうなものを含んでゐるのなどに注意を要する。此栱枓は第四十九圖左上のの反對の側ので，同じものである（三月三日）。

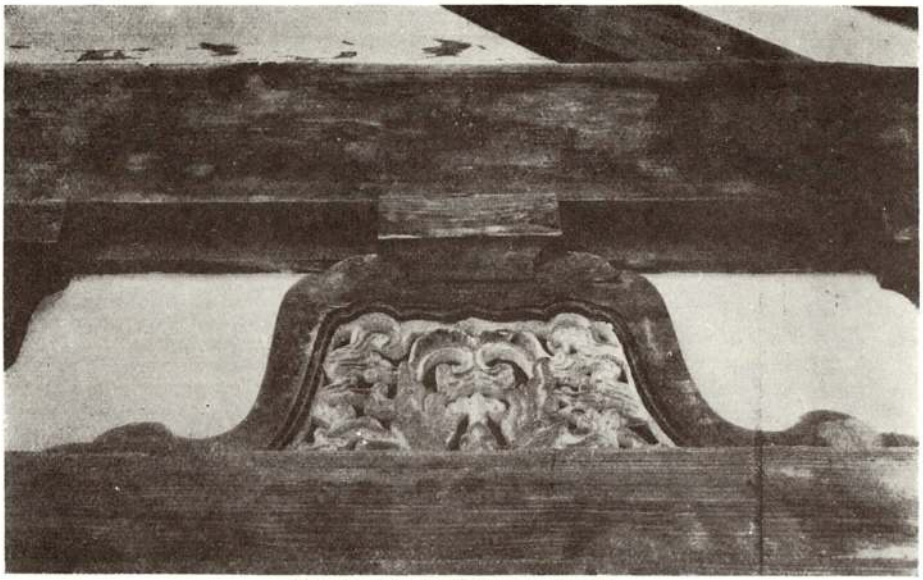


第五十四圖　本殿向拜蟇股裏面

本殿の向拜に當る場所の前に，更に深さ一間の向拜をつけ，其中央間柱間にこの蟇股がおいてある。これは裏面即ち本殿に面した方で，中心飾は毛利家の紋章を薄肉に陽刻し，地には一面に雲を一層薄肉にほつてある。正面の方はうまく寫眞がとれぬためやめておいたが，これ亦薄肉に輪寶をだしてあつた。

此蟇股は時代が新しいため止むを得ぬが，隨分拙いもので，他のがみな室町であるのに，これ丈けがすつと後れるため，其差が明らかで誰人にも判る。即ちこれを次圖以下の夫れ等と比べてみれば，別段說明を要さないであらう。

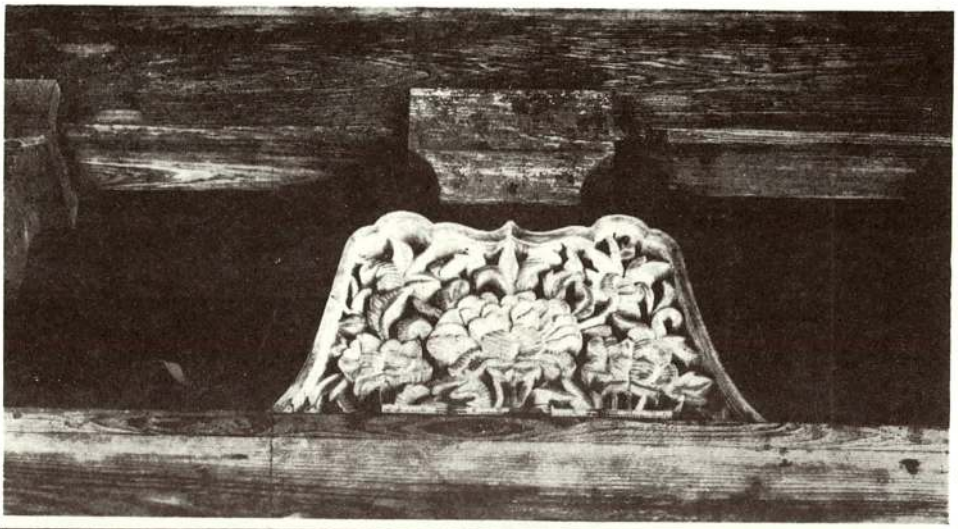
其輪廓は途中で切れて枓にまで及ばず，枓は枓繰が高過ぎ敷面は低過ぎ，蟇股の實質中にめり込み，無理なことをして實肘木を入れてある。何故かかる不思議な形のものができたかを考へてみると，成るべく大きく毛利氏の紋章を現はすべく勉めたため，何も彼も犧牲に供して了つたものであらう。類例稀なもので，土佐五臺山竹林寺本堂の山內家の家紋を入れたものと好一對であらう（三月三日）。



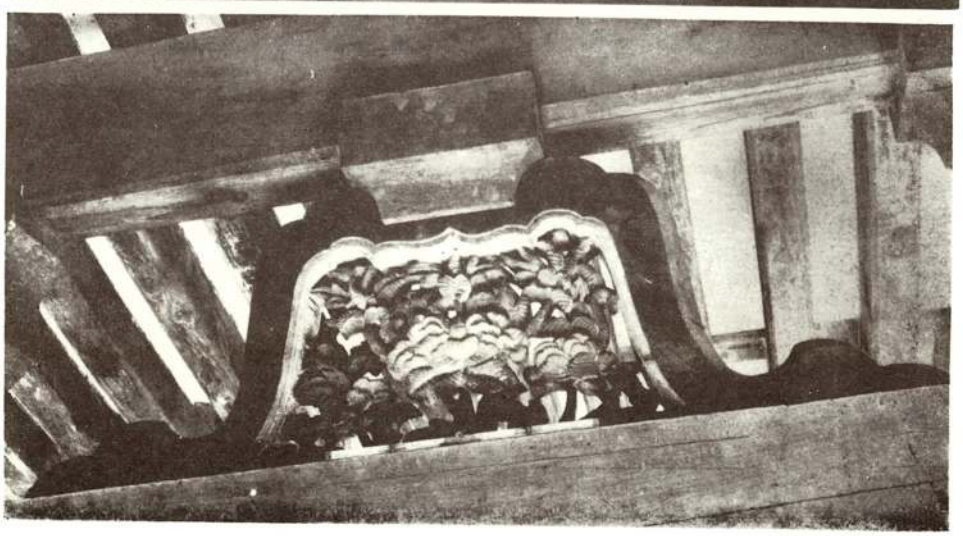
第五十五圖　本殿右側面北方蟇股

本殿の兩側面に二個づつの蟇股がついてゐるが，他の部分のが一つ一つ異なつてゐるのに，側面のは四個共同じ意匠である。或は細かいところで少し位は異なつてゐるかも知れぬが，この様に何れも込み入つてゐるから，些少の點の相異は，拓本でもとつてみなければ，下から眺め丈けでは中中判らない。だから先づ同じとしておく。

此は何を現はしたのか。いづれ植物性のものを便化したのであらうが，はつきりしない。中心飾は大體左右相稱のやうであるが，中央に例の花があり，其左右に筍のやうなものがあつて，上から芽のやうなものが向ひ合つてでてゐる。これが全體で中心飾をなしてゐるが，其左右の空間を充塡してゐる若葉か唐草か雲かは，最早右左が等しくない。だからざつとみると圖按的の例の室町式のもののやうであるが，よくみるとそこに可なりの意匠が凝らしてあり，技術家の頭腦の働きを示してゐるのである。併し私は全體が迷路の如く，模様の意味もはつきりしてゐないから，この様なのは餘り好まない。次に示す牡丹唐草に比べで大分劣る様に思ふ（三月三日）。







第五十六圖・第五十七圖・第五十八圖　本殿正面　蟇股三種

第五十四圖に示した一番前に突きだした深さ一間の向拜の次ぎに，本殿の正面斗栱間にある三つの蟇股がこれ等で，上から下へ順に東•中•西の間のもの。最下即ち西端のものは，第五十圖の左端，第五十一圖の右端のものと同一のである。さうしてこの三つは，何れも内部からみたものである。外の方は場所がないのと，正月でいろいろ飾等がしてあつて，寫眞がとれないのと，全部裏面ばかりにしたのであるが，幸ひな事にこれ等の三つは，表裏共さう變らず，殆んど同じだから，どちらでも差支ないといへるのである。

三つ共同じ様に中心飾として大開花牡丹，其左右に小開花牡丹を配し，これが主要な裝飾で，あとは空隙を主として葉(蕾もあるやうである)で埋められてある。全體まんべんなくうまく配置されて居り，甚だ上等のできである。時代はずつと後れるが，本誌第十三輯第二號に揭げた，弘前の最勝院五重塔初重須彌壇上の等は，正に此種の系統で，中央のを蕾とし左右の花をもつと上迄もつていつたと考へてもいいのである。

鎌倉時代には未だなかつたが，室町時代には，例へば尾道市淨土寺多寶塔のの様に，やはり中央に花，左右に蕾を以てしたのがある(他にも此種の意匠のはある)。此は夫れ等より勿論時代は降るから，當然といへば夫れ迄であるが，左右相稱の純圖按的のものより一轉し，大分に繪畫的になり，其上室町一流の平面的なところもあるにはあるが，大に緩和されて深みもできてきたから，みたところ頗る工合がよろしい　室町時代の裝飾蟇股としては優秀の部に入れる事ができるものである(三月三日)。

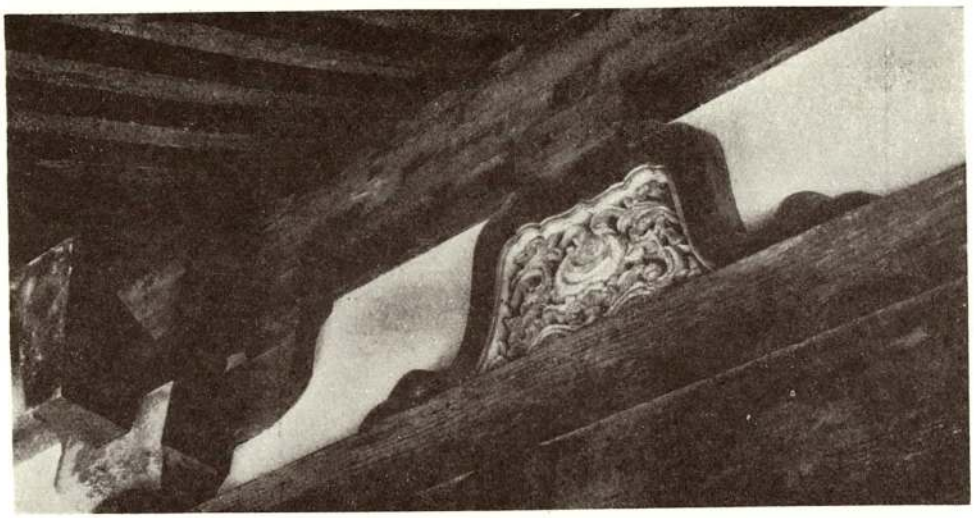


第五十九圖　本殿內外陣境西端蟇股

中央に日か月かとにかく天體を入れ，周圍に雲を配してあるが，これと殆んど同じ意匠のが東端にもある。だからこの內外陣の境のところは，左右が雲に天體で，中央が次圖に示す寶珠で，何れも割合に珍らしい意匠である。この兩端のは何れ一方が日で他方が月で，つまり日月を現はしたのであらうが，どちらがどちらか今のところ判然しない。雲に日か月かを入れたのは，縣社八阪神社本殿にもある（前號第 5頁平面圖參照）。

山口市の神社の蟇股に，かかる意匠のものが三つもあるといふことは，私にとつては可なり面白いことであつた。實は今迄近畿地方で此種のものを探してゐたが，殆んど見當らず，僅に嵯峨大覺寺の本堂厨子の極く新しいものに，三日月を雲の間にだしたもの，及び同寺の門の大れに，北斗七星をだしたものを見出し，大發見でもしたやうに考へてゐたのであつたが，これ等に比べると山口市の神社のは遙に古くもあり，又意匠も勝れてゐる。

以前蟇股の事をかいたとき，天體を入れたのはないと書いて了ひ，其後月と星とを見出し，訂正を要すと思つてゐたところ，今度愈大修正が必要になつてしまつた（三月三日）。



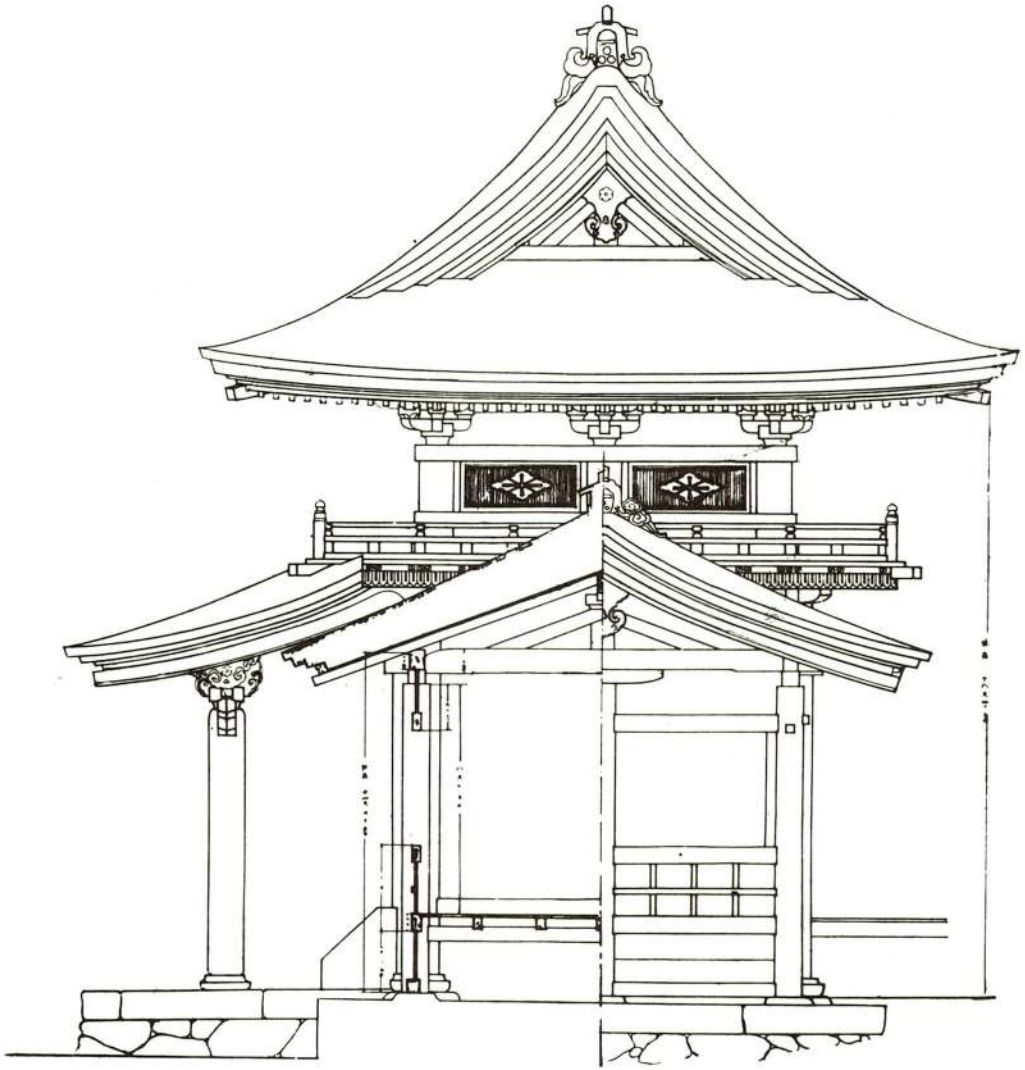
第六十圖　本殿內外陣境中央蟇股

此れは中央に寶珠が一つあり，周圍は唐草で埋めてあるから，中心飾が目立つと同時に，此種のものとしては非常に賑やかな手の込んだものである。寶珠三つのものには中中込み入つたのもあるが，一つのはどちらかといふと，簡單な方が多い。

寶珠一つ入れたのは，鎌倉室町を通じて，今日迄私の知つてゐたのは，高野山不動堂後面のが最も古く，此の次は奈良縣添上郡東山村大字桐山，村社戸隱神社のもの，第三は同南葛城郡葛城村大字鴨神，縣社高鴨神社本殿後面ので，第四は岐阜縣吉城郡國府村大字宮地，縣社荒城神社本殿正面のもの，第五は廣島縣佐伯郡嚴島町，官幣中社嚴島神社末社荒胡子神社（Ara-ebisu Jinja）本殿兩側面のもの等である。

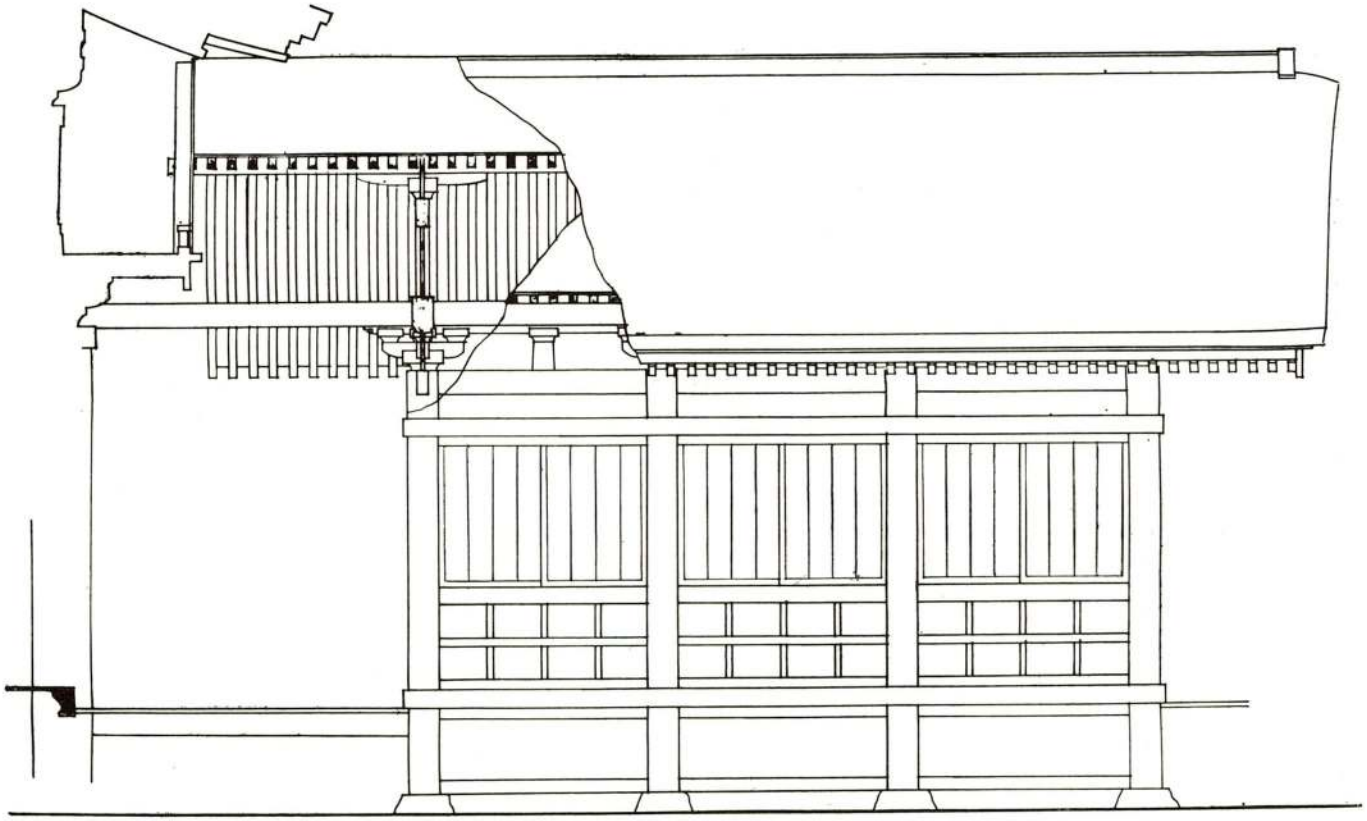
然るに今度これが見つかつた。寶珠のくびれが深く重なつてゐたので，さうして大分大きかつたから，最初私は蛇だと思つて，大に興味を覺えたところ，よくみたらさうではなかつたが，寶珠であつたために，新に一例を加へることができたから，蛇でなかつたために感じた失望は，充分取返すことができたのであつた。

而して此種の意匠のものでは，これ位すき間なく唐草で埋めたのは，他の四種の何れにも見ざる所。左右相稱の圖按的で平面的な裝飾寶珠入蟇股としては，賑やかさで此右に出づるものはい。新羅善神堂欄間式のものである（三月三日）。



今八幡宮樓門側立面圖（附裏廊側立面及斷面圖）

向拜がなくても差支の大してないところへ、參拜者の便宜のためか無理につけたやうである。或は最初からあつたのではなくて、後につけたのかも知れない。このつけ方には隨分無理があるやうであるのをみても、さう考へられるであらう。充分調査したのではないから、見誤りもあるかも知れぬが、向拜の材料のうち、古いところでも室町迄はちとむつかしいやうに思ふ。つまり桃山ではないかと思つてゐるのであるが、もう一度見ないとあぶない（三月三日）。

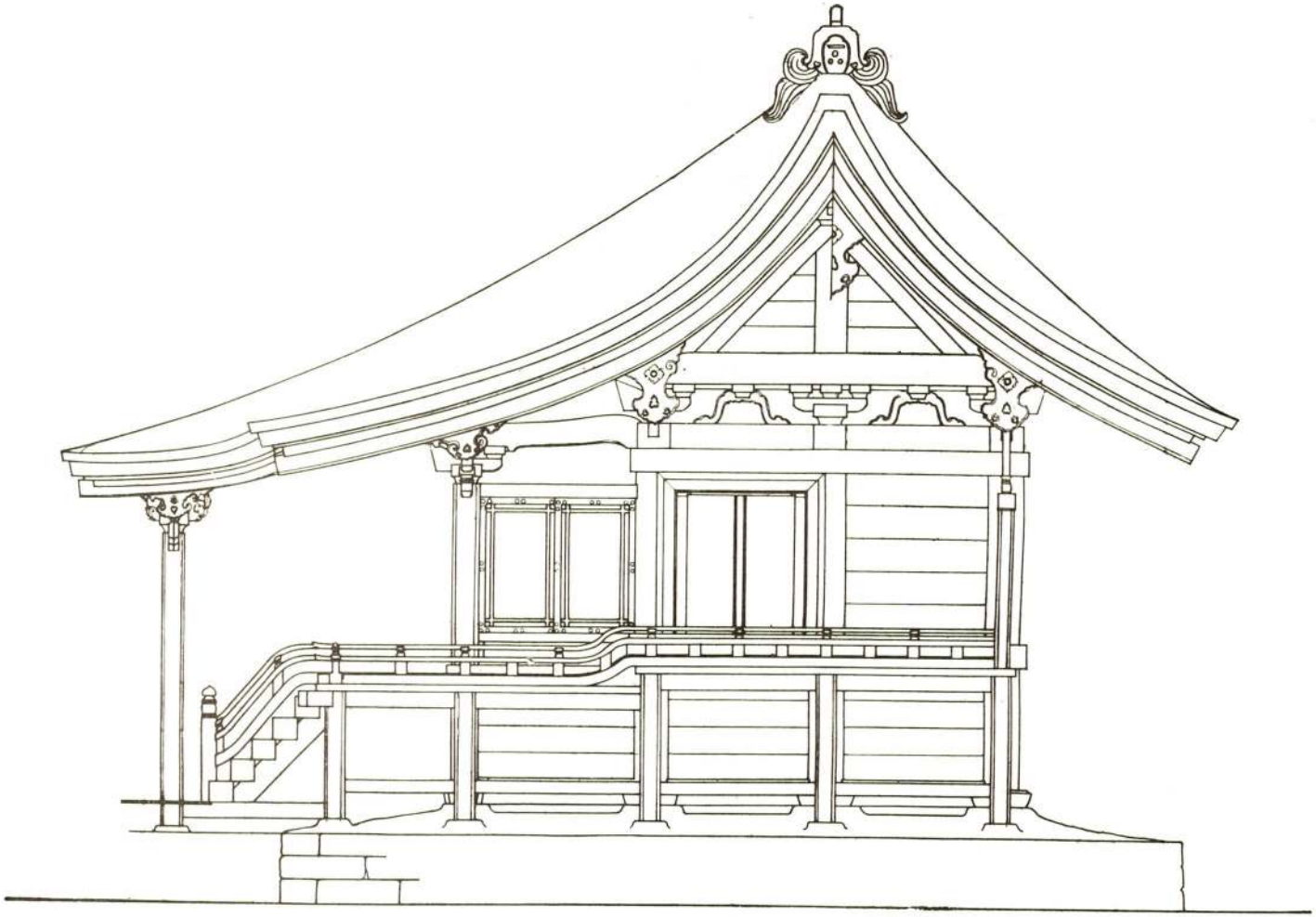


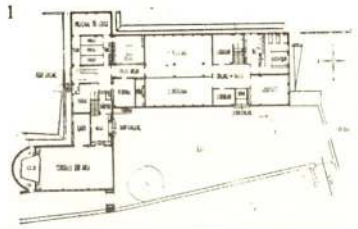
同拜殿側立面及斷面圖

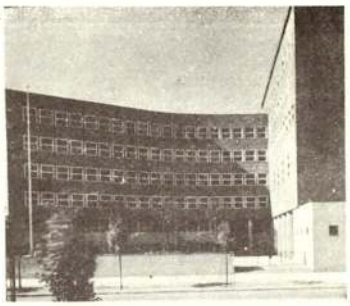
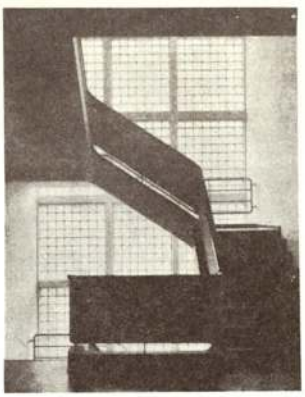
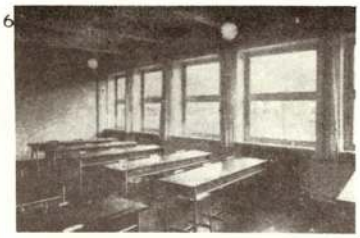
拜殿の屋根は，兩下の至極簡單なものであるが，樓門の屋根との關係，つまり丁度うまく其下に入つてゐるところの納り方等，餘程よくできてゐる。此部分を內部からみたところは第三十三圖に見えてゐるし，外からは，輪寶窓の內からではあるが，第三十九圖の狹間飾の間から少し見えてゐる。尙ほ拜殿の桁をのばして，樓門の下層臺輪の上にのせてあるところなど，まことにうまく考へてゐる(三月三日)。

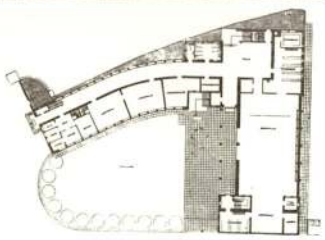
今八幡宮本殿側立面圖

流れ造は側面から見るに限る。正面からだと屋根ばかりで、どうも形がよくない　此圖には側面出入口板扉の幣軸に打つてある蕨座と、蟇股の中の彫刻が略してある。尤も第五十五圖にだしたものは、此向て左の方のもので、右のも殆んど同じであつたと記憶する（三月三日）







1—3　獨逸レマゲンの聖カニシユス高等學校と寄宿舍　設計　メリル氏
アイムスビユツテルの實業學校　設計　ハインシユ・ダイムリング氏

1—5　獨逸ハンブルグ附近

切　取　線



ヨーギヨーセメント
品質均一優良　輸送至便
ヨーギヨー高級セメント
早期高強度　脱枠迅速

登録商標



LION BRAND

資本金　五百万円　年産　貳百廿万樽

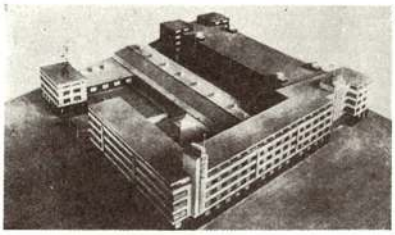
大阪窯業セメント株式會社
大阪市北区堂島濱通二丁目
電話北四一一〇至一一三番

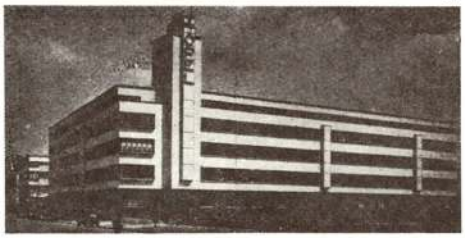
工場　大阪市港区南恩加島町
電話　桜川一一七七・二六〇九・二八四三

東京出張所　東京市神田区表猿樂町
京都出張所　京都市二条駅前


1


2

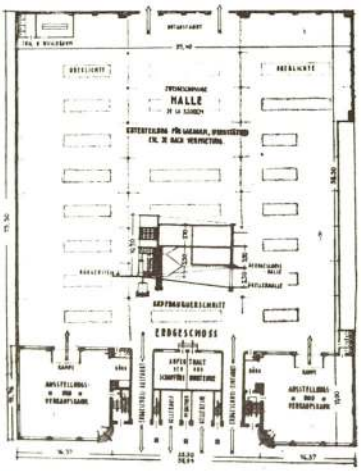

3


4


6



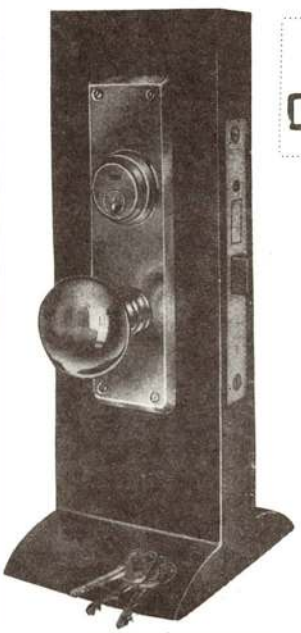
5



7

最近獨逸工場建築　1—2　石灰石工場 設計 チーレ氏
5—7　伯林シセロ・ガラージユ　設計　シユスター氏　　3—4　アーヘンのオーベル工場　設計　ツーセイント氏

切　取　線



三寸五分框用本締付
O.S.C.シリンダー錠

日本で初めて完成されたる

OSC 純國産シリンダー錠

從來の舶來品の三分の一の價格（ツマリ舶來の普通箱錠セットと同値）ですから普通箱錠を廢して最近には玄關は勿論内部の扉にも安全第一のO.S.C.シリンダー錠を使用さるゝ傾向となりました

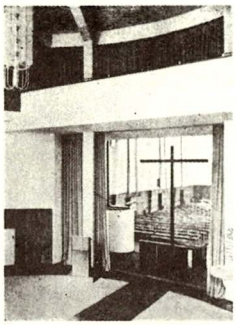


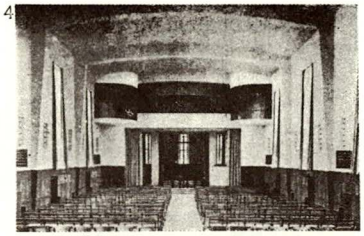
O.S.C.建具金物大阪販賣所
大阪市西區土佐堀船町電車停留所前
電話土佐堀四六六〇番 八一五六番

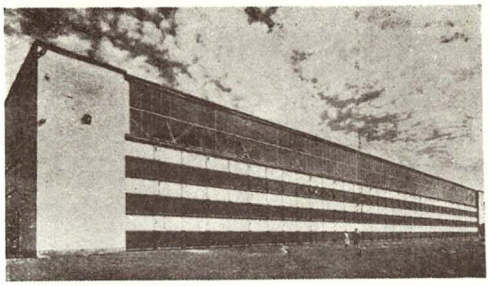
最近竣成せる三菱倉庫會社O.S.C.建具金御使用

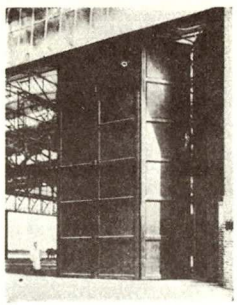

1


2


3


4


5


6



7

1—4 獨逸ケルン、ツオルストツクの教會堂　設計：メリル氏　5—6 最近獨逸工場建築　エツスリンゲン機械工場　飛行機庫　7 廣告塔

切取線

陸屋根防水界に好評噴々たる

フアイバーコート

（石綿アスフアルト合成品）



本品は萬代不變質の石綿纖維を主要材料とし之に各種の防水原料を加へて製品と致しました最も進歩せる防水。耐酸。耐荷。電氣絶緣等の特質を具備せる糊狀溶劑であります使用簡易加熱の必要なく、素人にて施工し得且價格の低廉等眞に理想的製品なることを確信を以て御推奨致します

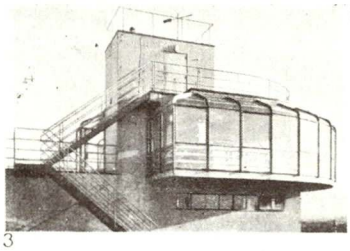
詳細は下名へ御照會を願ふ

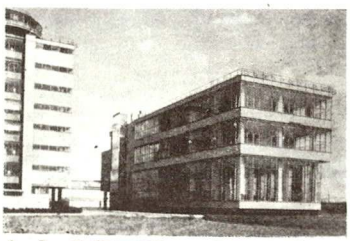
建築設計に當つて其家屋の先き〳〵の値うちと施工の合理化に就て並に費用の點等切に御考慮を希ふ

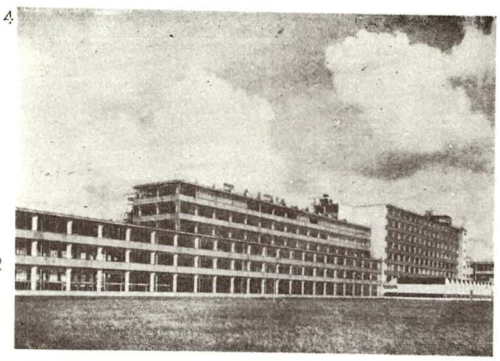
發賣元　關城化學工業大阪營業所
大阪市西區京町堀一丁目　電話土二八五番

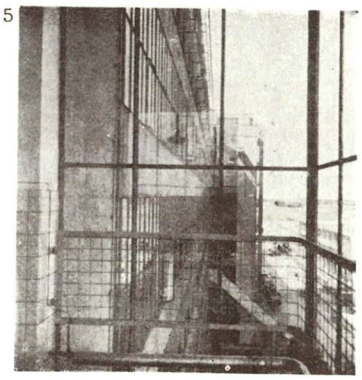
製造　大曲商店
大阪市中之島七丁目　電話土四八六四番

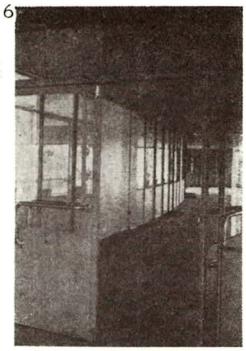

1

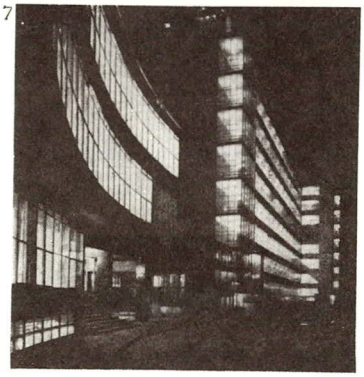

2


3


4


5


6


7

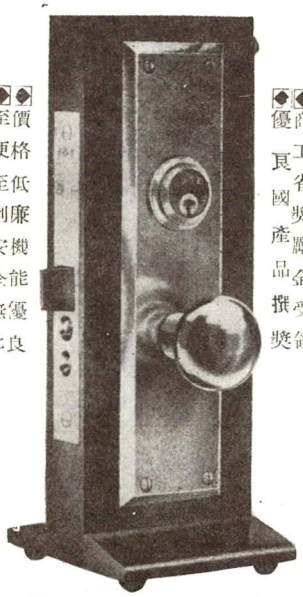
1—7 和蘭フアン・ネツレ工場

設計 ブリンクマン及フルークト兩氏

切取線

純國産日金印シリンダー錠

日金一〇〇二號シリンダー錠



縦 108mm 巾 10.m 深86m

◆價格低廉機能優良至便至利安全無比

◆商工省奬勵金受領

◆優良國産品推奬

シリンダー錠の種類及寸法

種類	寸法	五〇一號	五〇二號	五〇三號	特殊安全裝置付五〇四號	一〇〇二號
バックセット	ケース	長一四五粍 巾一九二粍 深二八粍	長一四五粍 巾九四粍 深一九粍	長一〇六粍 巾七〇粍 深一六粍	長一四五粍 巾九四粍 深一九粍	長一〇八粍 巾八六粍 深一九粍
	フロント	長二〇三粍 巾三二粍 (一吋四分ノ一)	六七粍 (二吋八分ノ五)	五〇、五粍 (二吋)	六七粍 (二吋八分ノ九)	六三粍 (二吋半)
	フロント	長二〇三粍 巾二五粍 (一吋)	長一四八粍 巾二二粍 (八分ノ七吋)	長二〇三粍 巾二五粍 (一吋)	長二〇三粍 巾二五粍 (一吋)	長一五二粍 巾二五粍 (一吋)

◆合鍵絶無、盜難除完全生命財産の安全無類

◆ボタン一つの作用にては外部よりは鍵無くしては開扉不能なるも内部よりは鍵を用ひずして開扉自由なる故地震火事等の非常時に安全且便利至極

◆貸事務室、アパートメント、ホテル、住宅玄關、應接室用として絶好必須

◆不體裁なる棒鍵に代ふるに優美高雅なるニッケル製鍵となる

◆施し安全の上にも更に安全の構造となつて居りますから重要室、玄關用として天鎖の福音

◆マスター鍵は御希望に應じます

特徴及用途



本社 大阪市西淀川區大仁東二丁目
電話土佐堀(44)五八五番二八五〇番
五八六番四一〇六番

出張所 東京市丸ノ内有樂町報知ビル
電話丸ノ内(23)四九七二番
三六〇四番

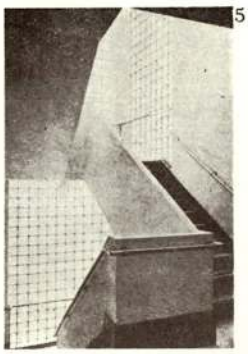
日本金具株式會社



1



3



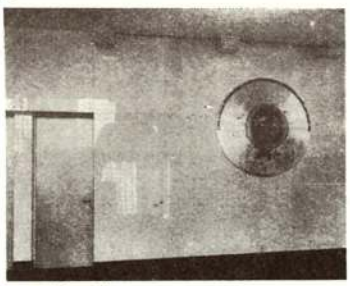
5



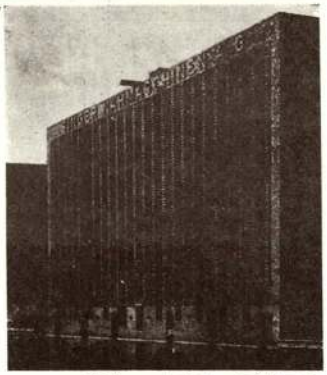
6



2



4



7

1—6 和蘭ヘーグ・百貨店デ・フオールハルヂング　　設計 セヨフ・ブイス氏
7 獨逸漢堡シンガー・ミシン倉庫　　設計 ツエルペ及ハルダー兩氏

取



住友ビルデイング　大阪市東區北濱五丁目

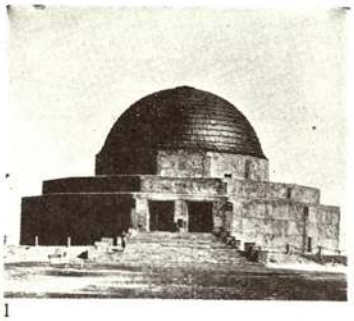
	第一期工事御採用	第二期工事御採用
沼島式高級密閉上下鐵障子	——(製作未開始)	本館各階側窓全部
沼島式完全バランスシヤター	本館二三四五階	本館及附屬家全部

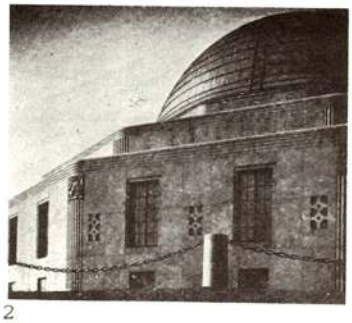
合名會社 汎建製作所

大阪市此花區恩貴島北之町拾壹番地

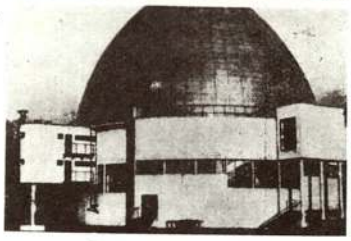
電話土佐堀4020

代理店　佐渡島西店


1


2


3




4


5


7

1—3 米國シカゴ・アドラー・プラネタリウム　設計 グルンス・フエルド氏　4—7 各國プラネタリウム
4 獨逸ハンノバー　5 獨逸ライプチツヒ　6 露西亞モスコー　7 獨逸ジユツセルドルフ

切取線

最新發明　防水工事界之革命

セメファルトプライマーに就て

防水工事の施工に際し從來**アスファルト**を**コンクリート**に完全に密着せしむる事の困難なるに依り**アスファルトプライマー**（アスファルトを輕油等にて稀釋したるもの）をコンクリートの表面に塗布し、これによりてコンクリートとアスファルトとの結合を容易ならしむる方法を採用し來りたるもこのアスファルトプライマーには次の如き缺陷あり。

1、コンクリートが完全に乾燥せざる場合はこれに塗布することを得ず、即ち水氣の爲浮上りてその用を爲さざればなり。（施工能率低下）

2、アスファルトプライマーは塗布後猶相當時間の經過を待たざれば防水工事を施工することを得ず。（施工能率低下）

3、アスファルトプライマー塗布後防水工事前に於て降雨等ありたる時は洗ひ流さるゝ虞あり。（膠着性不足、防水能力不備）

4、コンクリートとアスファルトとの密着甚弱し。（膠着性小）

セメファルトプライマーは**アスファルト**と最も完全に融合する特性を有し且つ以上の缺陷を補ふべく案出せられたるものにして次の特徴を有す

1、**特性**

コンクリートに水氣あるも**アスファルト**を完全に密着せしむ。

2、**施工能率の增進**

塗布後三十分を出でずして防水工事を施工することを得。

3　防水性

セメファルトプライマーはそのもの自身にて大なる防水能力を有するを以て塗布後降雨等の爲絶對に洗ひ流さるゝことなし。

4、**膠着性**

セメファルトプライマーは**コンクリート**内部へ迅速に浸透し、且其上に塗布したる**アスファルト**と強く結合する故に**コンクリート**と防水層とを完全に膠着するものなり。

5、施工簡易

セメファルトプライマーは淡褐なる液體にして乾燥早きが故に刷毛引きにて施工最も簡易なり。

價格低廉

一回塗手間共約　金五十錢
二回塗手間共約　金九十錢
一坪ニ付

發賣元

工材社

本社　〔大阪市西區京町堀一丁目四〇番地　電話土佐堀五八〇九番
出張所　〔東京市芝區南佐久間町二丁目三番地　電話芝二五〇六番

失業救濟事業と建築

鳥井信

緒言

本文は過日我が協會の時事問題として『建築關係者の失業救濟の件』と云ふ題目に就て討議したる際、私の述べました意見を茲に綴つたのであります。建築關係者の失業救濟とは建築技術者及建築熟練工に勞務の機會を豐富ならしむると共に、勞務需給の結合を圓滑ならしむる外策のないとは明らかであります。然し今日では需川はあるが人を得られぬ場合は殆んどないから、勞務需給の關係は比較的圓滑であるが、勞務の機會を豐富にすることは即ち盛んに建築工事を起すと云ふことである。それでは此財界不振の際に建築を盛んならしめる方法如何と云ふに、根本策としては、產業振興、財界安定、勞働及職業の配分統制等各方面より萬全の策を講ずるのであるが、今日の如く飢えたる者に食を與ふる様に、直ちに之を救濟し得る時局の對應策ではないのである。現內閣は非募債主義を採り起債を許可しないから、府縣市町村の如き公共團體では工事を興す譯に行かぬが、失業救濟事業として建築物を起興せば起債を許可し低利資金の融通をも受けることが出來るから、公共團體の必要なる建築物を同事業として盛んに建築しそれにより建築關係者を救濟せんとする一方法を私の經驗から茲に述べ御參考に供したいと思ふのである。先づ失業救濟事業とは如何なるものであるか、

一　歐米各國と我國の失業狀況

現今經濟界の不況は世界的現象であつて失業問題に惱むものは獨り我國のみでない。歐米各國に於ては歐洲大戰以後（一九一八年）戰後の疲弊、生產過剩、財政の整理緊縮等の原因によつて失業者が著しく增加し、之に對して失業救濟事業は既に恒久的施設の性質を帶ぶるに到つたと考へられて居る。昨年九月內務省社會局調査に依れば、英國の失業者數は二百十八萬人、獨逸は二百八十萬人、產業の振興他國に其の比を見ざる米國に於てすら尙三百萬人の失業者ありと稱せらる。其他伊太利四十萬人、露西亞百萬人、佛蘭西は僅に九百人と云ふ狀況で、全世界に於る失業者數は今日では千二百萬人に達するであろうと云ふ事である。我國に於ても世界的不景氣の影響、金解禁、產業合理化より起る失業、人口の過剩、鮮人の內地移入、中小企業者の沒落等の原因によつて著しく失業者數を增加し、大正十四年九月六大都市及其附近に於ては三萬六千四百九十九人であつたが、昭和五年九月社會局の發表によれば、全國失業者推定數は三十九萬五千二百二十二人に激增し、其內給料生活者七萬八千八百七十七人、日傭勞働者十三萬六千四百八十九人、其他の勞働者十七萬九千八百七十八人である。其失業者の內では生活が困難であつて職を與へて救濟する事を要すると認められる要救濟者の數は十五萬四千人で、重なる所在地は東京八萬五千人、大阪一萬五千人、神奈川一萬人、愛知八千人、福岡六千四百人、兵庫三千五百人、京都二千二百人である。今日では一層失業者數を增加し、英國は二百六十九萬人、獨逸は四百七十三萬人に達したと新聞に報導されてあります。日本も恐らく四十萬人を遙かに超過して居る事と思ふ。

一　失業防止並に救濟策

失業防止の根本方策は、產業の發達、貿易の振興に依つて勞働機會を豐富ならしむるに努むると同時に、勞務需給の結合を圓滑ならしむるのが最上策である事は明瞭であるが、世界不況の今日では、對外的發展も望み得ないから先づ之が積極策はないと云つてよい。然し就業の意志及能力を有するに拘はらず、種々なる外部的原因に强制されて、就業の機會を得ざる

失業者に職を與へなければ、單に人道上の問題たるのみならず國家としては失業者の社會生活に及ぼす思想的危險を豫止する必要上、又勞力の浪費を活用する事は國家的利益でもあるから、國が救濟事業を行ふ義務があるのであつて、歐米各國に於ては失業問題は選擧競爭の一大標識であり、英國勞働黨内閣の出現も之れに原因するのである。又我國に於ても内閣の施政方針の重要なる題目となつたのであります。されば政府は之れが對策として失業防止委員會、職業紹介所、職業指導、授産、共濟施設、内外移住等の機關の整備と共の活動を計り、失業者授職施設として失業救濟事業、小額給料生活者授職事業、民間事業の起興奬勵等種々なる方面に努力すると同時に、産業の合理化、國産品の奬勵、物價金融の調節統制に勉めて居りますが、其の内で、失業救濟事業として土木事業が最も効果的であるとして盛んに起興せられて居るのである　それは事業の大部が賃銀の所得であること、格別熟練を要せずして誰にも出來ると、賃金所得の大部分は勞働者の日用購買となつて販賣及生産力を增加せしめる、即ち景氣をよくするに云ふ理由で、今日では失業救濟事業と云へば直ちに土木事業を聯想する程にまでなつたのであります。

一失業救濟事業

歐米各國に於ては前述の通り失業者が、躍進的に增加致しますから、各國とも莫大の國費を支出して救濟事業を施して居るのであります。即ち英國は勞働黨内閣となつてから四億二千萬圓、合衆國は一九三〇年に十七億弗、獨逸は一九一八年より八年間に十三億マーク、伊太利は一九三〇年二億五千萬リラを支出して、鐵道、築港、道路、建築、衛生設備、農事改良等の事業を起興して居る狀態である。我が國に於ては大正十四年の冬季に六大都市公共團體に於て、始めて土木事業を起さしめ、國庫は之に對して勞働賃銀の半額を補助し又事業資金に對しては特に起債を許可し且低利資金を融通したのである。それより昭和三年迄は事業の施行主體及地域は六大都市關係公共團體に限られ、施行時期も冬期に限定せられ、且事業種目も主として日傭勞働者を對象とする土木事業のみであつて、年々三四百萬圓の範圍に於て國庫より支出し、一日平均五千名より七千名位の失業者を救濟して居たのである。然るに昭和四年七月現内閣が成立以來、事業の緊縮、消費節約の方針と世界的不況の一層深刻となつた爲、益々失業者は增加するを以て、事業主體及施行地域の兩者共六大都市關係公共團體以外に擴大せられ施行時期も何時にても宜しく事業種目も普に日傭勞働者のみならず其の他の勞働者をも救濟し得る樣意を用ひたると共に、特に給料生活者をも救濟する事となつたので、昭和四年度の事業は從前に比し非常に增加して、事業費は千四百六十萬圓、一日平均一萬二百人に職を與へたのである。更に昭和五年一月、金解禁及世界的不況が益々深刻の度を加へ、失業者は躍進的に增加するのみであるから、失業救濟事業施行の場合の諸條件を一層緩和した。即ち國産材料を相當多量に使用する場合は、勞力費の事業費總額に對する割合は少なくとも之を認め、熟練勞働者の失業緩和に資せしめ、事業主體は公共團體の外新に水利、土功、耕地整理、土地區劃整理、森林等の各組合を認め、隨時隨處に之を起興し得る事とした、之れを箇條書きにすれば

内務省及大藏省に於て失業救濟事業として取扱はるゝ條件（昭和五年五月より）

(1)勞力費は事業費の二割以上
　國産材料を相當多量使用
(2)勞力費は事業費の一割以上
　國産材料と併せ五割以上
(1)(2)の場合は起債を許可し低利資金を融通し猶ほ使用勞働者の内過半數の要救濟失業者を使用せば之を請負に附することを得。
(3)勞力費は事業費の三割以上
(4)勞力費が事業費の三割未滿
　國産材料を相當多量使用
(3)(4)の場合は(1)(2)の場合と同じく起債を許可し、低利資金を融通し、勞力費並に勞働手帳作成に要する費用の二分の一を國庫補助とし、猶ほ止むを得ざる場合は請負に附することを得。

右の樣に緩和された爲めに、昭和五年度の事業費は五千四百餘萬圓平均一日三萬五千人の失業者を救濟したのであります、猶ほ農林省に於ては同年度に農村、山村、

漁村の失業救濟の爲め七千萬圓の低利資金を貸出をなしたのである。此の様に地方公共團體に失業救濟事業を起さしめ、夫に起債を許可し且低利資金の融通を認め、或は國費の補助を與へて奬勵しても、尙失業狀態が緩和せられないのみならず、一層深刻の度を加へ社會的不安も亦加はるばかりであるから、愈々國自らが失業救濟事業を起興することになつたのであります。內務省では失業救濟事業中公共團體の施行せんとするもの三千餘萬圓・道路公債を募り國營の國道改良事業費千八百五十萬圓府縣道改良事業費補助に千八百萬圓、又鐵道省は千二百萬圓の鐵道公債を募り改良工事を施行するから、合計七千八百萬圓一日平均六萬人前後の人を使傭する事になりますが、尙要救濟者の半數をも救濟することが出來ない有様であります。猶ほ內地失業者の半數は朝鮮人であるから、朝鮮總督府では三年繼續の失業救濟事業として土木費六千五百萬圓を支出致しますが、昭和六年度に於ては合計一億萬圓以上の土木工事が起興せらるゝ狀況で、之れが爲土木の技術者

第 I 表

鐵筋混凝土造　學校建築費に於ける材料費及職工賃調査　（大林組調）

工事名稱	金額 円錢	材料費 円錢	職工賃 円錢	職工數 人	職工內譯摘要
總計金額	1,000,000.00	702,970.28	297,029.72	143.260	
內譯					
假設工事	48,760.00	34,650.00	14,110.00	4.657	(監督12,450.00 月@100.00 7335人)(運搬片付1,660.00 @1.30 922人)
基礎工事	16,204.00	5,525,78	10,498.22	6.175	堀方運搬栗石搗固メ @1.70
コンクリート工事	188,596.00	148,002.75	40,593.25	22.637	(打手間、運搬20,051.94 @1.70 11800人)(大工14,122.15 @2.00 7061人)(手傳6,419.16 @1.70 3776人)
鐵筋工事	84,081.00	77,189.13	6,891.87	4.054	鐵筋工 @1.70
鐵骨工事	40,830.00	28,132.36	12,747.64	6.036	(鐵工 11,428.95 @2.10 5442人)(鳶 1,318.69 @1.90 594人)
石材工事	10,440.00	5,520.93	4,9 9 07	1.968	加工据付平均 @2.50
煉瓦タイル工事	18,225.00	16,056.44	2,168.56	904	タイル煉瓦工平均 @2.40
金物工事	23,617.00	9,447.23	14,169,77	6.747	製作取付 @2.10
錺工事	6'422.00	3,211.13	3,210.87	1.533	〃 @2.10
鐵製建具	84,454.00	25,336.18	59,117.82	27.744	(鐵作 42,227.00 @2.30 18360人)(取付 16,890.82 @1.80 9384人)
木製建具	14,870.00	10,706 30	4,163.70	2,082	製作取付 @2.00
防水工事	28,523.00	26,710.96	1,812.04	824	アスファルト工 @2,20
左官工事	88,557.00	39,850.96	48,706.04	23.193	左官及手元平均 @2.10
塗師工事	24,480.00	13,655.87	10,824.13	4 706	塗師工 @2.30
硝子工事	5,185.00	4,532.50	652.50	242	硝子工 @2.70
木工事	71,950 00	70,854.00	1,096 00	548	運搬仲仕 @2.00
雜工事	22,517.00	18,194.20	4,322.80	1.879	大工、左官セロテツクス平均 @2.30
排水工事	5,067.00	2,749 36	2,317.64	1,363	土管埋沒工 @1.70
諸手間	42,017.00	0	42,017.00	20,199	(大工 31,124.00 @2.20 14147人)(手傳 10.893.00 @1.80 6052人)
煖房工事	41,497.00	41,497.00			
電氣工事	3°,942.00	39,942.00			
瓦斯工事	4,098.00	4,098.00			
衛生工事	35,793.00	35,793.00			
門及塀工事	54,005.00	41,314.20	92,690.80	5,769	コンクリート、左官、鐵工運搬等平均 @2.20

第 II 筋

鐵筋混凝土造學校建築費に於ける材料費及勞力費調査

(大阪府營繕課調)

工事名稱	金額 円錢	材料費 円錢	勞力費 円錢	職工數 人	摘要			
建築費總額	1,000,000.00	752,768.20	247,231.80	120,315				
內譯								
					監督	4.224人	—11,264.00	
					小使	869人	— 869.00	
假設工事	55,873.47	39,705.47	16,168.00	7,183	大工高	1.500人	—平均2.10—	3,150.00
					運搬	590人	@ 1.50	885.00
杭打工事	22,460.64	19,094.64	3,366.00	1,760	杭打工	1,210人	@ 2.10	2,541.00
					運搬	550人	@ 1.50	825.00
基礎工事	22,336.00	14,898.40	7,437.60	4.132	土工	4.132人	@ 1.80	7,437.60
					土工	8.800人	@ 1.80	15,840.00
					大工	8.390人	@ 2.30	19,297.00
混凝土工事	230,707.73	154,932.23	75,775.50	43,835	手傳	3.355人	@ 1.70	5,703.50
					運搬	23.250人	@ 1.50	34,935.00
					鐵筋工	3.353人	@ 2.10	7,041.30
鐵筋工事	133,470.00	125,477.70	7,992,30	4,023	同手元	230人	@ 1.70	291.00
					運搬	440人	@ 1.50	660.00
					鍛冶工	3.032人	@ 2.30	6,973.60
鐵骨工事	35,022.48	26,918 88	8,103 60	3,712	高	550人	@ 1.70	935.00
					運搬	130人	@ 1.50	195.00
石材工事	4,715.07	2,525.07	2,190.00	730	石工	730人	@ 3.00	2,190.00
					煉瓦タイル工	4.600人	@ 2.80	12,880.00
煉瓦及タイル工事	79,801.41	63,730.31	16,071.10	6,437	手元	1.452人	@ 1.80	2,613.60
					洗工	185人	@ 1.50	277.50
					運搬	200人	@ 1.50	300.00
金物工事	11,334.00	11,114.00	220.00	100	取付	100人	@ 2.20	220.00
錺工事	14,594.16	12,957.36	1,636,80	682	錺工	682人	@ 2.40	1,636.80
					大工	220人	@ 1.80	396.00
鐵製建具工事	50,966.00	26,459.60	24,505.40	10,266	其他專門職	146人	@ 2.40	350.40
					作製	9.900人	@ 2.40	23,760.00
					建込	150人	@ 2.40	360.00
木製建具工事	16,760.07	11,120.07	5,640.00	2,350	作製	2,200人	@ 2.40	5,280.00
防水工事	21,138.00	20.425.50	712.50	285	防水工	285人	@ 2.50	712.50
					左官	7.000人	@ 2.50	17,500.00
左官工事	46,734.60	20,894.60	25,840.00	12,100	同手元	2.300人	@ 1.80	4,140.00
					運搬	2.800人	@ 1.50	4,200.00
塗師工事	14,745.27	10,145.27	4,600.00	2,000	塗師工	2.000人	@ 2.30	4,600.00
					硝子工	300人	@ 2.20	660.00
硝子工事	6,274.35	5,464.35	810.00	400	硝子拭き	100人	@ 1.50	150.00
					大工	7.100人	@ 2.50	17,750.00
木工事	117,752.00	99,186.00	18,566.00	7,580	手傳	480人	@ 1.70	816.00
					大工、土工、表具師、研工、黑枚。	6.200人	@ 2.30	14,260.00
雜工事	34,875.75	18,815.75	16,060.00	7,400	雜運搬	1.200人	@ 1.50	1,800.00
排水工事	5,405.00	4,253.00	1,152.00	640	土工	640人	@ 1.80	1,152.00
鑿井工事	13,797.00	12,537.00	1,260.00	450	鑿井工	450人	@ 2.80	1,260.00
電氣工事	21,118.00	19,068.00	2,050.00	820	電工	820人	@ 2.50	2,050.00
瓦斯工事	3,285.00	3,124.00	161.00	70	瓦斯工	70人	@ 2.30	161.00
給水衛生工事	24,309.00	21,871.00	2,438.00	1,060	給水工	1.060人	@ 2.30	2,438.00
					土工	1.800人	@ 1.80	3,240.00
					大工	200人	@ 2.30	460.00
門柵及土羽工事	12,525.00	8,050.00	4,475.00	2,300	鍛冶	50人	@ 2.00	100.00
					芝其他	250人	@ 2.70	675.00

七八百名も救濟せらるゝと云ふ事であります。

一 失業救濟事業と建築工事

政府は續出する失業者救濟には最大の努力を拂ひ、起債許可條件の緩和を計り一般失業者のみならず熟練勞働者の失業救濟にも意を用ひ、失業救濟の爲特に起興したる事業でなくとも、其の起興が失業救濟に役立つ場合に於ては特に其の事業に對する起債を認めらるゝに到り、且つ隨時隨處に起興し得らるゝ樣になつた爲建築工事も茲に失業救濟事業として取扱はるゝ樣になつた。扨て建築工事を先に述べた起債許可條件に照合する爲便宜上、又公共團體の施設として續々起る鐵筋混凝土造及木造の學校建築に就きて、總工事費に對する材料費、直接勞力費の歩合及總職工數を知る爲、大阪府市營繕課、大林、清水兩組に就きて調査せるに左表の通りである。之れは各々實施せる數例より總合して作つたもので、勿論設計が夫々異なつて居るのである。

更に鐵筋混凝土造、木造建築を夫々平均して建築費の百分比を作り、又敷地買收費及地均費を加へたる事業費として百分比を示せば左表の通りの結果を得たり。猶ほ最近實施設計せる國道十六號線の同百分比を參考の爲擧ぐ。

即ち敷地買收費及地均費を假りに事業費の三二%とするも鐵筋の場合に於て材料費は四七、九%勞力費二〇、一%となるのである。失業救濟事業と認められる起債條件(1)(2)の條件に適合す

第 III 表

鐵筋混凝土造學校建築費に於ける材料費及び職工賃調査 (大阪市營繕課調)

工事名稱	金額 円 錢	材料費 円 錢	職工賃 円 錢	職工數 人	職工內譯摘要
總計金額	1,000,000.00	756,866.00	243,134.00	85,136	
內譯					
假設工事	66,000.00	66,000.00			下小屋假枠材料、器械損料、運搬、電氣、水道費
基礎工事	25,000.00	6,280.00	18,720.00	10,400	堀方運搬票石搗固 @ 1.80
コンクリート工事	160,000.00	142,540.00	17,460.00	9,700	打手間運搬 @ 1.80
鐵筋工事	120,000.00	48,000.00	72,000.00	3,600	鐵筋工 @ 2.00
鐵骨工事	46,000.00	36,713.00	9,287.00	3,830	鐵工 @ 2.50 3,350人 8,375.00 鳶 @ 1.90 480人 912.00
石材工事	2,170.00	1,205.00	965.00	386	加工据付 @ 2.50
煉瓦タイル工事	9,200.00	7,100.00	2,100.00	840	タイル煉瓦工平均 @ 2.50
金物工事	13,300.00	3,730.00	9,570.00	4,350	取付 @ 2.20
錺工事	10,900.00	6,050.00	4,850.00	1,940	製作取付 @ 2.50
鐵製建具	56,000.00	39,750.00	16,250.00	6,500	平均 @ 2.50
木製建具	17,300.00	10,100.00	7,200.00	3,600	@ 2.00
防水工事	21,500.00	19,366.00	2,134.00	970	@ 2.20
左官工事	54,000.00	51,732.00	2,268.00	1,080	左官手元平均 @ 2.10
塗師工事	13,300.00	7,780.00	5,520.00	2,760	塗師工 @ 2.00
硝子工事	9,700.00	7,900.00	1,800.00	720	@ 2.50
木材	49,000.00	48,040.00	960.00	480	運搬仲仕 @ 2.00
雜工事	29,500.00	26,860.00	2,640.00	1,200	平均 @ 2.20
排水工事	4,850.00	3,890.00	960.00	480	@ 2.00
諸手間	60,530.00		60,530.00	28,700	大工 @2.20 20,000人 44,000 鳶 @1.90 8,700人 16,530
電氣工事	48,500.00	48,500.00			
給水衛生淨化工事	158,000.00	158,000.00			
門及塀工事	25,250.00	17,330.00	7,920.00	3,600	石工、鐵工 運搬平均 @ 2.20

るととなる。敷地を買收しないで濟む場合は猶更である。又木造の場合では國産材料費十四、三%、勞力費が二十四%となりて(1)の場合に適合するのである。更に鐵筋の場合に手近に砂、砂利が採收出來れば砂、砂利の材料費は勞力費に代り、勞力費は三十%以上ともなりて勞力費の半分の國庫補助をも受くることゝなるのである今鐵筋混凝土の學校の場合と道路の新設の場合とを比較して見るに、直接勞力費は前者は後者より稍々少ないが、國産材料は遙かに多く、又直接勞力費中熟練工と不熟練工の比は前者は三對二位であるが後者は二對一である。即ち建築には熟練工を多く要するのであつて又請負に附するを便宜とし且利益であるが、請負に附するには使用勞働者の過半數は要救濟失業者を使用しなければならぬ。要救濟者は所謂不熟練工であるから、建築を失業救濟事業として請負に附する場合支障を來すから、「過半數の要救濟者を使用せよ」と云ふ條件は「四割の要救濟者を使用せよ」と緩和して貰ひたいのである。木造の場合には猶更熟練工を多く要す

第 IV 表

木造學校建築費に於ける材料費及人件費別調書　（大林組調）

工事名稱	金額 円 錢	材料費 円 錢	職工費 円 錢	職工數 人	職工內譯摘要
總計金額	1,000,000.00	678,416.00	321,584.00	172,022	
內譯					
假設工事	53,740.00	37,592.00	16,148.00	5,489	(運賃 1,682.00 @1.20 934人)(跡片付 841.00 @ 1.80 467人) (監督 13,625.00 月@ 100.00 4.088人)
基礎工事	1 9,672.00	99,412.00	30,260.00	15,405	(堀方コンクリート 16,008.00 @ 1.70 9,416人) (栗石搗 1506.00 @1.70 886人)(石加工据付 12,599.00 @ 2.50 5 038人) (煉瓦工 150.00 @ 2.30 66人)
木材工事	299,796.00	292,394.00	7,402.00	3,701	運搬伸仕 @ 2.00
建具工事	78,344.00	58,213.00	20,131.00	9,793	(硝子切嵌 2,113.00 @ 2.70 783人)(製作取付 18,019.00 @ 2.00 9.010人)
金物工事	35,393.00	23,005.00	12,388.00	5,386	鐵工 @ 2.30
錺工事	7,990.00	4,395.00	3,595.00	1,711	錺工 @ 2.10
左官工事	23,146.00	9,851.00	18,295.00	9,629	手元平均 @ 1.90
塗師工事	4,049.00	2,227.00	1,822.00	792	塗師工 @ 2.30
諸手間	122,820.00		122,820.00	66,279	(大工 96,379.00 @ 1.90 50.726人)(手傳 26,441.00 @ 1.70 15.553人)
屋根工事	82,092.00	73.041.00	9,051.00	4,526	(葺手間 7,755.00 手元平均@2.00 3.878人(運賃1,295.00 @ 2.00 648人) 人夫 @ 1.50
井戸堀拔	50,461.00	4,038.00	46,423.00	30,978	(運賃 25.00 @2.00 12人)(煉瓦 34.00 @2.30 15人)
雜工事	2,852.00	2,793.00	59.00	27	(堀方コンクリート 7,090.00 @ 1.70 4.700人 (大工左官 1,604.00 @2. 0 830人)(手傳 1,514.00 @ 1.70 890人) (石工 210.00 @ 2.50 24人)
排水揚水工事	27,493.00	16,138.00	11,354.00	6,494	(堀方コンクリート 11,420.00 @ 1.70 6.712人 (大工左官 5 5 4.00 @2.00 2.752人)(鐵筋 505.00 @ 1.70 297人)
柵其他工事	77,152.00	55,316.00	21,836.00	11,841	(石工 2,725.00 @ 2.50 1.090人)(手傳 1,682.00 @ 1.70 990人)

第 V 表

木造學校建築費に於ける材料費及職工賃調査

(清水組調)

工事名稱	金額 円銭	材料費 円銭	職工賃 円銭	職工數 人	職工内譯摘要
總計金額	1,000,000.00	677,053.70	322,946.30	129,896.30	
内譯					
假設工事	140,950.00	41,157.40	99,792.60	41,700.00	監督費 3.30×630=2,079.00 小使定夫 1.70×560=952.00 代人夫 1.70×2.980=5,066.00
基礎工事	10,860.00	7,960.40	28,996.00	1,705.00	運送 1,602.00 堀方運搬栗石搗固方 1.70
混凝土工事	34,545.00	29,017.80	5,527.20	2,846.00	打手間土工 170×170=289.00 堰板大工 114.6×230=263.72
鐵筋工事	11,612.00	9,150.00	2,462.00	1,390.00	@ 1.80
石材工事	12,850.00	6,810.50	6,039.50	2,470.00	石工 110×300=330.00 手元 137×200=273.95
金物工事	21,622.10	10,421.80	11,200.30	4,666.00	製作取付 @ 2.40
錺工事	19,223.40	10,534.40	8,689.00	3,620.00	同 @ 2.40
木製建具	40,184.00	16,181.60	24,002.40	10,435.20	大工 @ 2.30 金物取付嵌込搭へ
屋根工事	32,973.00	26,976.00	6,002.00	2,501.00	屋根工、手傳 平均 @ 2.40
左官工事	39,180.00	19,188.20	19,991.80	8,692.00	左官、コネヤ、手元 平均 @ 2.30
塗師工事	35,090.00	21,755.80	13,334.20	5,555.50	@ 2.40
硝子工事	12,169.00	9,120.80	3,042.20	1,267.00	@ 2.40
木工事	474,886.50	451,437.00	23,449.50		運送費
雜工事	19,700.00	17,336.00	2,364.00		
諸手間	94,150.00		94,150.00	43,068.00	大工 3.489×230=8,024.70 戈 817.8×170=1,390.30

第 VI 表

學校建築工事費内譯表

◈建築費は建築工費のみ ◈事業費は敷地買收費、地均費、建築費

工事別	建築費事業費	總額	敷地費	材料費		勞力費	職工數	備考
鐵筋コンクリート造學校建築物	建築費	100	—	73.8	國産 59.0 外國産 14.8	26.2	116.300人	木材は總て外國産とし其他の材料は總て國産材とせり
	事業費	100	32.0	47.9	國産 38.3 外國産 9.6	20.1	93.600人	敷地費を事業費の32%とし地均費を事業費の 3%とし其總てを勞力費とせり
木造學校建築物	建築費	100	—	67.8	國産 23.2 外國産 44.6	32.2	150.553人	木材は總て外國産とし其他の材料は總て國産材とせり
	事業費	100	32.0	44.0	國産 14.3 外國産 29.7	24.0	114.000人	敷地費を事業費の32%とし地均費を事業費の 3%とし其總てを勞力費とせり

道路工事費内譯表

◈工事費は道路工事費のみ ◈事業費は敷地買收費、道路工事費

工事別	工事費事業費	總額	敷地費	材料費	勞力費	職工費	備考
道路工事	工事費	120	—	國産 54.0	46.0	230.000人	
	事業費	100	47.8	國産 30.1	22.1	110.000人	

るから之を改て貰ひたいと思ふ。熟練工は失業者として職業紹介所に登錄して居るものは甚だ少ないが、事實上失業狀態にあるものは非常に澤山である。熟練工は所謂武士は喰はねど高楊子で、我慢して來たが最早我慢も出來ない狀態となつて來て居るから、大いに建築を起興して熟練工を救濟して貰いたいものである。

私は堺市立商業學校再築工事を失業救濟事業として計畫に參加し、昨年末內務、大藏兩省の許可を得たのであります。建築物を失業救濟事業と認められた日本で最初のものだそうです。同建物は燒失敷地に建てるのであるから、敷地費はなく總工事費十八萬餘圓を以て鐵筋「コンクリート」造三階建延千二百坪程のもので請負に附したのである。使用勞働者數一萬三千人即事業費の二割一分五厘と定め入札條件には

一直傭職工

使用總人員の四割三分以內

一指定失業職工人夫

同　同　三割　以內

一般失業人夫

同　同　二割七分以上

一失業職工、人夫、使用人員は七千八百六十名以上とし不熟練工を澤山使用せなければならず、又失業者は熟練者に比し三割能率が惡いと云ふ經驗者の言に從ひ、此工事に於ても能率損約三千五百圓を見込み請負に附したるも、失業救濟工事と無關係の如く安價にて落札せられたのである。其後昨年中岐阜小學校、富山縣廳が失業救濟事業として許可申請中なると聞き、又本年には大阪府が今宮中學校、水上警察署の建築總工事費五十三萬圓、大阪市は昭和五、六、七の三年繼續工事として五百二十七萬圓の豫算を以て失業救濟事業として小學校の許可申請中である。其他各方面に於て其企てのあると思ふが、誠に喜しい現象である。

一　結論

國及公共團體の諸工事は殆んど總て起債に依つて起されるのである。現內閣となつて非募債主義を採り、起債を認めないのみか既に決定になつた事業さへも中止又は繰延べにされ、民間の事業も緊縮の影響を受けて甚だ振はない。不況は益々深刻となり失業者續出して遂に建築關係者の失業救濟をも叫ばるゝに至つたのである。失業救濟者は能率が惡いとか手數であると云つて居れる時機ではない。此深刻さは益々加はり尙數年も持續するものと考へなければならぬ茲に政府も鑑みる處あり建築工事も失業救濟事業として起債を許可し、低利資金をも融通する樣に條件を緩和し、大に熟練工の救濟に意を用ひて居るのであるが、猶ほ「請負に附する場合過半の要救濟者を使傭せよ」を「四割の要救濟者云々」に緩和して貰ひたいと思ふ。一面府縣市町村等に於ては、人口の增加により必然的に要する小學校を始め、起興せらるべき必要な建築物は澤山にあるのであるから、建築物を失業救濟事業として起工し得る事を未だ知らない公共團體は勿論、之を知つて居る團體にも諸君から慫慂して建築物の大いに起工され夫に依て建築關係者が救濟さるゝに至る樣にしたいものである。假りに各府縣に平均二十萬圓の小學校が五個宛年々に起工せられるとせば、全國では五千七百萬圓である。之によつても澤山の失業者が救濟せられると思ふ。猶ほ國施行の建築工事にして繰延べてある建築物も失業公債を募り、速に起工して建築關係者を救濟せんとを望んで止まない。

豫告

六月號は『建築事務』に就て特輯の計畫です。揭題に就ての御研究御發表願ひます。

建築と社會編輯部

‖史蹟‖ 信貴山と生駒山

——高安城址——朝護孫子寺——寶山寺——

池田谷久吉

高安城址

高安城址は奈良縣と大阪府との彊界線即ち東は奈良縣(大和國)生駒郡三郷村にあつて西は大阪府(河内國)中河内郡南高安村に接してゐる。

高安山の山彙を利用したもので即ち生駒山脈中にあつて標高海抜千六百十尺周圍の連山の中一頭地を抜いて聳えてゐる。西方遙かに攝河泉の平野を見下し、大阪、堺は手に取る如く一眸の下に展開し實に形勝の地を占めてゐる。

殊に道路は嶮岨を極めなか〳〵登山するのに困難であるが、最近東西双方からケーブルが開通したので自由に登山ができる。

是迄高安城址は不明で一説には志貴山城(戰國時代松永氏の城)の邊かとも言はれてゐたが、大正六年關野工學博士其の他奈良縣史蹟調査委員諸君の調査によつて大體の推定がついてゐる。然し當時の土壘石垣等の遺跡は發見されない様であるが、その頃は山城のことであるからただ地形を利用して防備線としたに過ぎないと云はれてゐる。また天智天皇八年夏登臨せられて修築の議を出されたが人民の疲弊を哀れんで一時中止をせられたことがあつた。これ等の事から考へると當時大工事を起すのには甚しく困難だつた事が想像ができる。

關野博士等の調査によると推定城址の周圍には古門、谷門、大門大門池、馬塲、北矢倉等の地名が今も猶存してゐる。

地名辭典によると『高安の鉢伏山に在り、五老峰とも稱す、天智天皇初て此に築き烽火を置き難波津大和京の警備と爲す。和銅五年高安烽を高見(生駒山)に移し本城廢したり永祿中松永久秀信貴山に築きたる時、屬寨を鉢伏に置きたり(以下略)』

河内志
高安郡高安故城、在二服部川村上方一。俗呼二志貴出城一。

河内名所圖繪
高安郡川村に在り。

地名辭書
信貴山の西は河内高安なれば、古の高安城も山中なるべし。今詳ならず。

高安山は古事記高津宮の段に見ゆ、後世には專ら信貴山と稱す。十三峠以南中高安村の上方に標高四八〇米突に及ぶ。之を鉢伏山と稱す。鉢伏の南十二町を雁多尾畑と曰ひ、堅上村に屬す。高安山は南北一里に過ぎずと雖、竹木滿山溪水多し。灌漑に利あり、即ち恩智溝の本源なり。

日本書記
天智天皇六年十一月築二倭國高安城一
天智天皇八年秋八月丁未朔己酉天皇登二高安嶺一、議欲レ修レ城、仍恤二民疲一、一止而不レ作、時人感而歎曰、寔乃仁愛之德不二亦寬一乎云々、是秋霜露二於藤原內大臣家一、是冬十二月高安城收二畿內之田稅一、九年二月又修二高安城一積二穀與一鹽、天武天皇元年阪本臣財等次二于平石野一、時聞二近江軍在一高安城一而登之、乃近江軍知二財等來一、以悉焚二秋稅倉一皆散亡、仍宿二城中一、會明臨二見西方一、自二大津丹比兩道一衆多至、顯見二旗幟一有レ人曰、近江將壹伎史韓國之師也、財等自二高安城一降、以渡二衛我河一、與二韓國一戰河西

天武天皇四年二月天皇幸於高安城
持統天皇冬十月、天皇幸高安城

續日本記

文武天皇二年修理高安城。
大寶元年八月丙寅、廢二高安城一、
其舍屋雜儲物、移二財于大倭河
內二國一、
元明天皇和銅五年正月　廢二河內
國高安烽一、始置二高見烽及大倭
國春日烽一、以通二平城一也
元明天皇和銅五年八月庚申行二
幸高安城一、
……
蠢虫なく聲繁し高安の古城の松
に秋や入りたつ

信貴山朝護孫子寺

信貴山は大和國生駒郡平群村大字信貴畑にあつて關西線王子驛から信貴山電鐵に乘り路面電車からケーブルカーによつて登山するのが便である。寺は朝護孫子寺といつて眞言宗高野山派に屬し俗に信貴山の毘沙門堂で有名である。

延喜年中延喜天皇御不豫に際し法隆寺住僧明蓮上人の開基にかかり寺傳によれば聖德太子が物部守屋との合戰に兵屢々敗戰を重ねて信貴山に逃げてゐたが太子專心勝利を心佛に祀つてゐると山中に毘沙門天の銘ある石櫃を發見したので之は自分を擁護するものと信じられて四天王の像を刻んで髻に收め終に守屋を誅伐することができた。こんな由緒で凱旋の後には石櫃の上に一丈の堂宇を造營して『信ずべく貴ぶべきの祠なり』と云はれてから信貴山と號する樣になつたと傳へられてゐるがこれは一寸信じ難い

延喜二年には醍醐天皇から廣大な境城を定められて『朝護孫子寺』の勅號を賜はつた。



生駒寶山寺

元弘三年六月に護良親王此山に居給ふたこともあり。また楠木正成の父母この寺に熱心な信仰の上正成を生んだので幼名を多聞丸といつたとも云はれてゐる。毘沙門天はまた多門天と云はるゝからである。

戰國時代元龜天正の頃には松永久秀が信貴城を築いて織田信長に抗したけれども、遂に敗れて城陷落し伽藍も兵燹に罹つて灰燼となつて終つた。

今の堂宇は慶長七年に豐臣秀賴の祈願所として再建したもので毘沙門堂を本堂とし山中の高處に建てられてゐる。護摩堂、多寶塔の外に玉藏院、成福院　千手院等がある。其の他一山の僧堂建造物は地勢上凡て懸崖の上に立つてゐる

德川氏には代々保護を受け維新前までは獨立の一山であつたが明治になつて高野山に屬する事となつた。

國寶としては紙本着色の信貴山古緣起二卷が有名で其の他多くの武器類もあるが中にも大楠公の使用されたものと傳へらるゝ兜一頭袖一雙、喉輪一懸等有名である。

地名辭書

信貴城址、永緣三年松永久秀大和河內を征略し、信貴山に築き、天主屋倉を起す。後天正四年織田氏の滅却する處と爲る。大和寺社記云、信貴山の頂に古城の址あり初め吉川喜藏と云ひし武士築かれしとかや、天正年中松永彈正此城に籠る。毘沙門堂の邊なるべきにや、築造の址存すべきも今尋ぬる人なし。

鄕土記

信貴山城、右の城主麓より毘沙門堂迄三十町夫より五丁上り七間出曲輪二十三町程峰傳に住亦一町許上り、城の物一町餘永祿十二松永信長に背き亡落す松永父子諸士此所に生害

大和寺社記

信貴山の頂に古城の址あり古へ吉川喜藏といひし武士築かれしとかや其後天正年中松永霜台此城に籠りし……

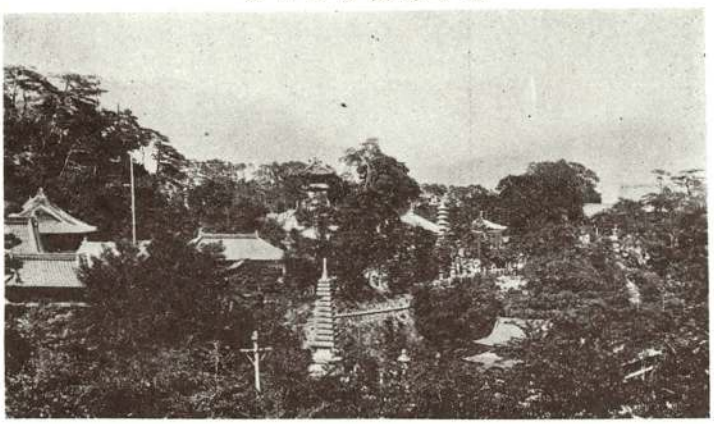
大和志料

久秀は三好長慶の家宰にして彈正少弼と稱す。永祿二年六月大和に入り信貴山城に據り國中の豪族を征服せんと欲し筒井小田切十市小泉等と戰ひ頻に克ち、永祿十年

一說に三年、六月城を千眉間寺に築きこれを多聞城と稱す麾下に古市菅田高山岡逢阪等の諸士あり。此時に當り筒井順昭既に卒し順慶新に立ち歳尚少し。久秀其孤を貪り之を斃し大和を併呑せんとす。其勢威頗る旺んに反つて主家を滅ぐの氣あり。三好氏之を惡み永祿十年十月其臣細川某に兵五千餘を附し久秀の子久通が守れる當城を綴せしめ更に兵を分ち南都に向はしめ多聞城を攻むべく大佛殿に屯す久秀夜半襲撃し大にこれを敗る。東大寺の燒失は實に此役にあり。久秀新勝の勢に乘じ筒井を滅さんと欲し永祿十二年三月麾下古市菅田高山岡及東大寺の僧兵を徴し多聞山城を守らしめ當城には山僧龍田社人等を驅りて在番せしめ自ら逼兵七千餘を率ゐ筒井の兵四千餘と大に法隆寺の並松に戰ひ之れを破り順慶をして僅に身を脫し宇陀に棲しめたり。辰市城主井戸國秋は筒井の戚姻を以て爲めに城守し松永に抗す、久松これを惡み先づ辰市を屠り後ち宇陀に及ぼさんとし元龜二年七月自ら兵一萬を以てこれを圍む。城陷る日あり。時に順慶宇陀の明山にあり。これを聞き兵五千を率ゐ出て辰市に向ひ更に二林片岡等の兵をして當城を押へ小田切小和泉は法隆寺を押へ、井戸の後援たらしむ 兩軍辰市の東山に相會し筒井の爲に敗らる。此時織田信長兵を西し京師にあり。乃ち佐久間明智をして筒井と和を成さしむ。久秀命を聽き兵を戢め共に織田氏に屬す。後ち事を以て織田氏に叛くに及び信長順慶を以て鄕導となし來討す。松永の麾下海老名森等片岡城を守る。順慶等圍んでこれを陷れ勢に乘じ當城に薄る。久秀勢蹙り力竭き火を放ちて自殺す。松永氏こゝに至て滅ぶ。時に天正五年十月十日なり。久秀兵を大和に用ひしよりこゝに至るまで凡十九年其間舊家の滅亡社寺の燒失擧げて數ふべからず。歷代の遺物古今の記錄烏有に屬せしもの頗る多し。百載の下彼澤藏軒と共に蛇蝎視せらるゝ亦良に以ありと謂ふべし。

生駒山

生駒山脈は北は八幡の岩清水卽ち淀川の流域から蜿蜒として起伏南行して其の山の背を東西に河和兩國の境を作つて生駒に至つて巍然と高く聳えて海拔二千百數十尺



信貴山朝護孫子寺

山姿稀に見る雄大さを示して近畿に於ける代表的名山と言つても差支はなからうと思はれる。それより稍低く高安を經て大和川流域に至つて終つてゐる。

生駒山は片麻岩より成つてゐて大樹や奇巖はなくて登るのにも餘り嶮峻でもない。

山の東は奈良縣大和國生駒郡北生駒村、西は大阪府(河內國)中河內郡枚岡村、大戸に跨つてゐて登山路は古來數條もあつて容易である。

先づ西からは枚岡村大字豐浦から登るもので暗峠といつて頂上の奈良縣界までは約二十四町餘ある次は大戸村大字神並から登るもので鷲尾越とも辻子越ともいつて頂上までは二十七町餘ある。その他日下、中垣內等種々數多あるけれども大軌電車が開通するまでは主に辻子越が最も便利とされてゐた。

現今では大軌電車の生駒驛で下車してすぐケーブルに乘替へて山頂に達することが出來るから、徒歩で登山するものは特別な者以外にはない。また途中寶山寺までは大軌の驛前から乘合自動車の專用道路さへ布設されてゐて先づ交通機關は完備してゐるから便利で容易である。昨今河內の方からの登山鐵道や專用自動車道路の計畫もあるようだが目下の不況に遭遇したゝめになか〳〵着工しない。

山頂は廣さ實に三十萬坪の宏濶な原始野で、脚下にひろがる四方の眺望は北には淀川の悠々たる流

れは木津の流れを呑んで銀色に輝いて更に遠く比叡、愛宕の峰の翠巒は微かに見え、その下には京都の市街も幻の如く横はつてゐる。東方の山岳の重疊するのは大和、伊賀、伊勢の諸山を背景として青田よく奈良の都は脚下に展がつて東大寺の大佛殿の鴟尾は金色燦く光つてゐて、中腹の寶山寺からはなだらかな傾斜の生駒の街や富雄の山つゞきは手に取る様に見えてゐる。南は葛城、金剛、二上の山の奥には紀伊大和の連山層巒深く重なつて、西方六甲の山は屏風を立てた様に前に立ち塞がつて、その前には大阪灣の波靜かに大大阪を中心に攝河泉の現代文化のオンパレードは展開されてゐる。

たしかに文字の如く一卷の繪卷物である。

然しこの自然境も昭和の文明は高さ百二十尺の大飛行塔を建てゝ之れ見よがしに四界を俯瞰してゐる。

生駒山はまた到る處史蹟に富んだところで、神武天皇東征を初めとして高見烽址、兵法寺、寶山寺八大龍王社、經塚、鬼取等枚擧に遑がない。

日本書記

神武天皇戊午或夏四月、皇師勒レ兵、步趣二龍田一、而其路狹嶮、人不レ得二並行一、乃還更欲下東踰二膽駒山一而入中中洲上、

皇極天皇二年十一月、蘇我臣入鹿遣二小德巨勢大臣大仁土師婆婆連一、掩二山背大兄一等於斑鳩一、（中略）山背大兄仍取二馬骨一投二置內寢一、遂率二其妃並子弟等一得レ間逃出、隱二膽駒山一、三輪文屋君、進而勸曰、請移二向於深草屯倉一、從レ茲乘レ馬、詣二東國一、以二乳部一爲レ本、興レ師還戰、其戰必矣、山背大兄對曰、如鄉所謀、其勝必然、但吾情冀二十年不一レ役二百姓一、以二一身之故一豈煩二勞萬民一、又於二後世一、不レ欲下以二民言一由上吾之故上喪二巳父母一、豈其戰勝之後、方言二丈夫一哉、夫損二身國一、不二亦丈夫者歟、有レ人、遙見二上宮王等山中一、還等二蘇我臣入鹿一、入鹿聞而大懼、速發二單旅一、述二王所レ在於高向臣國押一曰、速可二向レ山求一捉彼王一、國押報曰、僕守二天皇宮一、不二取敢出一外、入鹿即將二自經一、干時、古人大兄皇子喘息而來問、向二何處一、入鹿具說二所由一、古人泉子曰、鼠伏レ穴而生、失レ穴而死、入鹿レ是止レ行、遣二軍將等一求二於膽駒一、竟不レ能レ覓、於レ是山背大兄王等、自レ山還入二斑鳩寺一、

續日本記

元明天皇和銅五年正月壬辰、廢二河內國高安烽一、始置二高見烽及大倭國春日烽一、以通二平城一也、

生駒山に關する古人の詩歌は頗る多いがその中おもなるものを擧げると、

伊駒山たちもみえす散みだれゆきはたれなるあしたゝのしも　人丸

我が宿の梢の夏になるときは生駒の山ぞ見えなりける　能因法師

秋篠や外山の里やしぐるらむ生駒の嶽に雲のかくれる　西行法師

伊駒山雲なへだてそ秋の月あたりの空は時雨なりとも　順德院

生駒山嫌かりと馬にくら置て射駒山うち越來れば紅葉ちりつゝ

類聚國史

桓武天皇延曆十六年七月丙戌遣陰陽少屬從八位上藤原朝臣世道陰陽博士正六位上中臣志斐國國守鎭奈大和國平群山、河內國高安山。先是霖雨二山崩頹埋人家也。

元亨釋書生馬仙傳

生馬仙者攝州住吉縣人、入河內高安縣東山住深谷中、寬年九年河內明達持頭院行至東山峰頂見深谷有草庵下到庵所有優婆塞顏色似黃粟頭戴白帽身著白衣。達、近問曰爲誰。對曰是生馬仙也。便以五瓜與達曰是此地之產也可以充飢。達嘗之甘美不可言、達日在此爲何、曰吾入山以來未見山腳只求菩提耳。達出山傳此事。

萬葉集仙覺注

昔百濟國より馬をこの國へ献りたり。それを秦氏の先祖よくのれりけり。さて帝これをいみしきものにさせ給ひて、うまと云こと定り始て、いこま山に放てかはしめ給ひけり。

按に古事記應神帝の時、百濟國主照古王牡馬牝馬各一疋を阿知吉師に附して貢上したる事を載す。其時の放飼の故事によりて駒山の名起る歟、伊駒の伊は發語を冠らたせる者に似たり。

寶山寺

生駒山絶頂の東北十町の山腹即ち奈良縣（大和國）生駒郡北生駒村菜畑にあつてケーブルカー及自動

（以下四十四頁下段へ續く）

分譲住宅設計圖案懸賞募集規程

一、設計の要旨

本圖案は主として中産以下の人々に長期月賦拂込の方法を以て所有權を取得せしむる住宅を目標とするものなるに依り其の設計に付ては質素堅實を旨とて安全、快適、衛生、便利耐久等の點に於て現在の生活樣式を基調とし將來の日本小住宅の歸趨の針路を示すものたること

二、應募設計要件

（イ）敷地は東京郊心より約一時間にして達し得る市街地建築物法の適用を受くる住居地域内とし別紙附圖に示す如き一團地にして各道路兩側には開渠の設けあり各號敷地地盤は何れも東南に緩勾配を有し道路面より約五寸高し

（ロ）第一號敷地は北又は東に主要入口を設くること

第二號第三號敷地は北に主要入口を設くること

第四號敷地は西に主要入口を設くること

第五號敷地は南に主要入口を設くること

第六號敷地は東に主要入口を設くること

（ハ）住宅の種類は五室（延三十四坪以内）四室（延二十六坪以内）三室、延十九坪以内）の三種とし各號敷地に適當に配置し六型式の住宅を設計すること

但し臺所、湯殿、納戸、廣椽、廣間又は取次等は之を室數に算入せず

（ニ）各號住宅は木造とし樣式は任意なるも構造設備に付ては我國の氣候風土に適合し耐震、防災、防風、防濕に留意し成るべく修繕を要せずして耐久性ある樣に工夫すること

（ホ）建築費は延一坪當り時價八〇圓内外とす

但し電燈、瓦斯、給水、排水、門塀植樹等の附帶設備費を含まず

三、所要圖面及說明書

1　應募圖面は左の各號の通りとし白色製圖原紙大判二つ切に墨書し陰影又は色彩を施さざること、但しイ號及ハ號は色彩を施すことを得尙各號圖面及說明書等には暗號を記入し氏名を記入せざること

（イ）敷地内建物其他配置圖　縮尺百分の一

（建物位置、障壁、門、排水設備等を記入すること）

（ロ）各型住宅各階平面圖（各階坪數を明記すること）及立面圖（二面以上）　縮尺百分の一

（ハ）各型住宅各階詳細圖（各型住宅の内代表的のもの一例）　縮尺二十分の一

（ニ）臺所詳細圖（各型住宅の内代表的のもの一例）　縮尺二十分の一

（ホ）其他構造設備に對し特に工夫せる部分あるときは其詳細圖　縮尺二十分の一

2　說明書は各室内部及建物外部の構造仕上並主要構造設備に關する仕樣概要又は略說明書とし特に工夫せる部分は其の詳細說明を附すること

但し右は圖面に記入することを妨げず

四、入選者の等級及賞金

一等　一名　貳百圓

二等　二名　百五拾圓宛

三等　三名　百圓宛

佳作　六名　五拾圓宛

五、締切期日　昭和六年七月十五日正午

六、當選者發表　昭和六年八月十日迄に本人に通知する外同潤會事務所前に揭示す

七、審査員

東京女子高等師範學校講師　松平友子

同潤會參事　藤田圓一

東京帝國大學教授　工學博士　内田祥三

内務省社會局技師　中村寛

東京市麹町區内幸町二ノ二財團法人同潤會　堀口捨巳　山本拇郎

八、應募心得

1　應募圖案は締切期日の正午迄に東京市麹町區内幸町二ノ二財團法人同潤會に到達する樣提出せらるゝ事

2　圖面及書類は一括して嚴重に包裝し分譲住宅設計應募圖案の文字及自個所定の暗號を記し別に應募者の住所氏名職業（勤務先共）を記せる紙片を密封し封書の表面に前記暗號を記したるものを添附せらるること

但し郵便に付するものは更に外封をなし審査後郵返送還を希望する者は書留郵便料を同封すること

3　審査の結果に對し應募者は異議の申立又は說明を求むることを得ざるものとす

4　當選したる應募設計圖案は一切之を返還せず

5　當選したる應募設計圖案及書類の所有權は募集者に歸し、圖案の實施、刊行に付ては異議の申立又は報償を求むることを得ざるものとす

昭和六年五月

麹町區内幸町二丁目二番地の四號

財團法人　同潤會

『建築と社會』昭和六年度特輯計畫

新年號（一月發行賣切殘本なし）
震火災と建築（二月發行賣切殘本なし）
保健と建築（三月發行賣切殘本なし）
小住宅（四月發行濟殘本あり）
鄉土建築（五月發行濟殘本あり）
建築事務（六月發行豫定）
新興建築（七月發行豫定）
建築と都市問題（八月發行豫定）
小住宅（冬の卷）
小賣店・百貨店・市場
映畫館と劇場
高層建築

本年の特輯計畫を右の通りに定めました、特輯題目のうち御研究のものはどし〳〵御投稿下さい、歡迎致します、原稿の締切日は前の月の十三日です、なほ六月は『建築事務』七月は『新興建築』に就て夫々特輯の豫定です。

『建築と社會』編輯部

本誌定價表

冊數	定價	郵稅
一冊	五拾錢	貳錢
十二冊	六圓	貳拾四錢

昭和六年四月廿七日印刷（毎月壹回）
昭和六年五月一日發行（一日發行）

兵庫縣武庫郡今津町今津字浦風五十六番地
發行兼編輯人 鷹取陽

大阪市東區內淡路町一丁目七番地
印刷所 大阪活版所

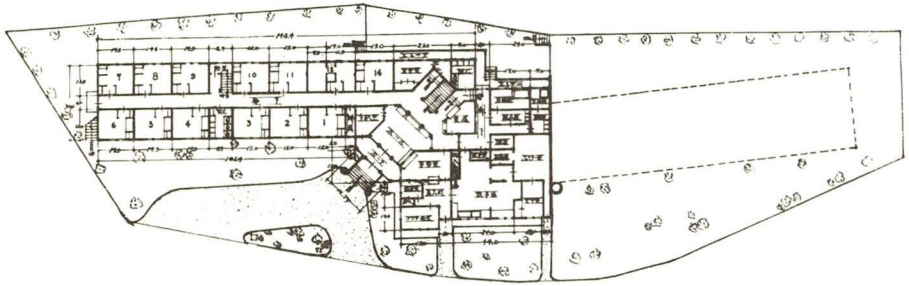
大阪市西區土佐堀通一ノ一 大同ビルヂング
發行所 社團法人 日本建築協會
電話土四二六五番 振替口座大阪三九、九七五

大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店 柳々堂書店
電話土佐堀二四四〇番 振替口座大阪二二〇八四番

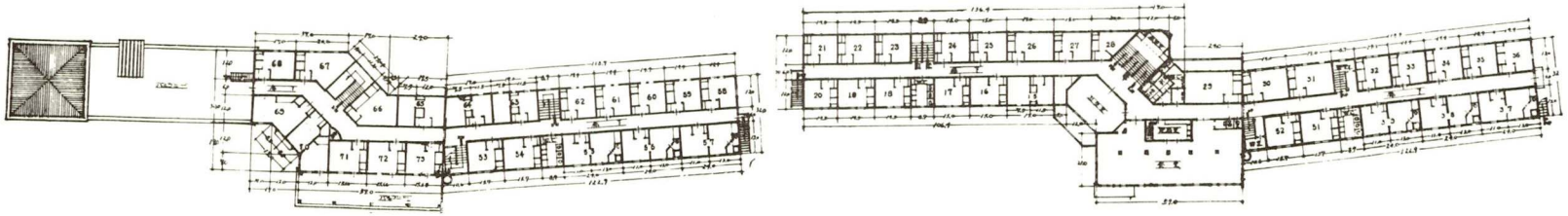
御購讀の向は本會直接又は特約店へ振替又は爲替にて前金御拂込被下度候



全　　景

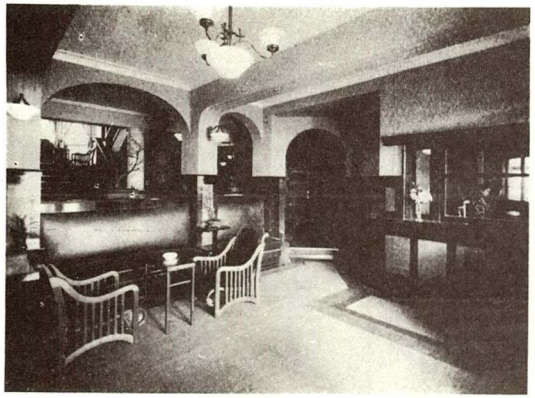


第三階　平面圖　　第一階　平面圖　　第二階　平面圖

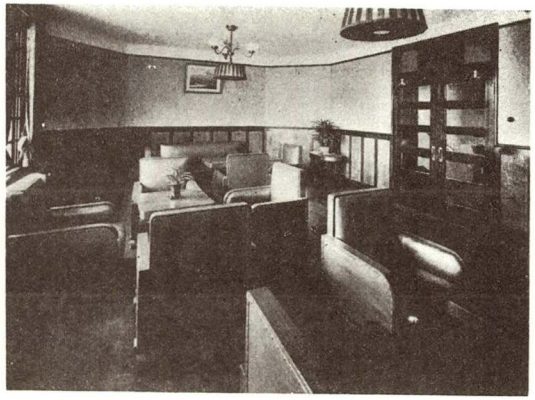


阪急夙川・パインクスト アパートメント ハウス

設計施工　石川屋　岡本工務店



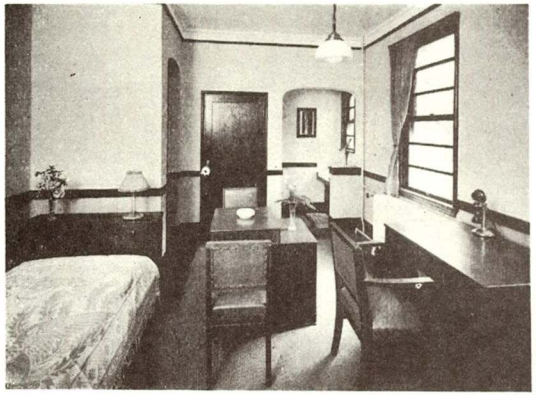
玄關ホール



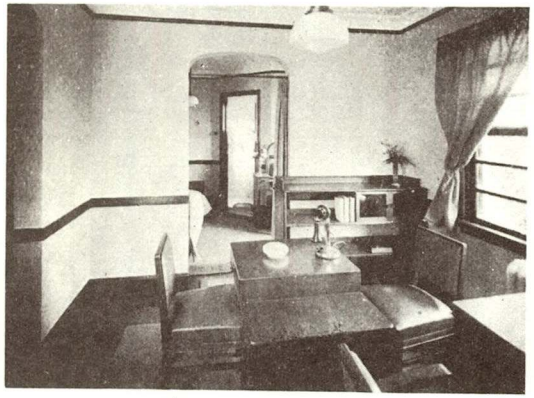
社交室



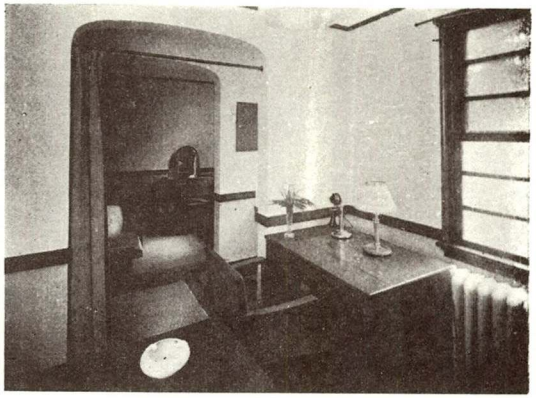
食堂



客室



客室



客室

パインクストアパートメントハウス建築工事概要

經營　大神中央土地株式會社
設計施工　石川屋　岡本工務店
位置　阪急線夙川停留場西北凡五丁
建築面積　七百十四坪三合四勺
客室　七十三室

客室設備　他にホール、食堂、社交室、賣店、事務所浴室、便所、脫衣室、煖房機關室、炊事竈浴室、便所、電話、煖房、洗面所、湯水の設備完成
ホテル　客室一部を以てホテル兼營
食堂　大宴會の設備在り
屋上　北六甲の連峯に向ひ殊に甲山手に取るが如く風景絶佳なり

様式　近世式
構造　鐵筋コンクリート構造、一部木造併用
大要　外部ホワイト セメント モルタル仕上げ腰小松石張
煖房「ホツトウオーターシステム」
屋上を露臺とす

阪急夙川・パインクスト アパートメント ハウス

設計施工　石川屋　岡本工務店

夏ノ蟲蚊ノ

ロールスクリーン

近來模造品多數あり本品御指定ありたし

Rolscreens

The Ideal Screen For Casements

特許第74197號



（型錄贈呈）

島貿易株式會社建材部

日本總代理店

本店　大阪市東區高麗橋四丁目
電話本局自五〇四〇—至五〇四七番

支店　東京市日本橋區平松町
電話日本橋　一二四番　三一六九番
　　三一六八番

晝は蠅、夜は蚊と

夏は閑靜な郊外の住宅に在つても中々に快よき休息は出來かねます。これ我が優美輕便な**ロールスクリーン**の御使用を切に御薦めする所以であります。

從來病院や郊外住宅や又は料理場などで、窓の設備中最も苦心して來たものは實に**スクリーン**の問題であります。凡そ傳染病の豫防とか、夏期蠅や蚊や、其他色々の虫類が飛込んで來るのを防いだり、又工場地帶で煤煙防止の必要な場所などには、是非共此の**スクリーン**の用意をして置かねばなりません。

然るに此迄のものは、何れも取扱上の不便や、不體裁の點や或は又、不經濟などの點で、其必要を生ずる都度、頭痛の種となつて居たものであります。

此の久しい間の、難問解決の使命を果たすものこそ、實に我が**ロールスクリーン**の出現及び提供であります

建築と社會第十四輯第五號

廣告目次

ア
有山組……一五
安藤組大阪支店……一五
旭硝子株式會社……五七
淺野スレート株式會社……二九
淺海商店……五〇
阿部鐵工所……四四

イ
池田建築事務所……一一
池田谷建築事務所……一一
池田組……一五
伊藤建築事務所……一一
伊藤製作所……六四

エ
榮進社……二三

オ
O・S・C建具金物大阪販賣所……四
オリエンタルメタル製造所……六一
オキナ商店……四九
大阪ビトロライト工事合資會社……三〇
大阪製鎖所エレベーター部……一六
大阪窯業セメント株式會社……三
大阪伊丹商店……四六
大阪橋本組……一六
大林組……一六
大倉土木株式會社大阪出張所……一五
大曲商店……五
大野製作所……一
大平工業所……六二
小笠原建築事務所……一一
奥村重兵衛商店……四〇
岡部建築事務所……一一
岡本工務店……一六
置鹽建築事務所……一一

カ
片岡、石本建築事務所……一一
關西ペイント株式會社……二七
葛野建築事務所……一一
龜谷開作商店……一七

キ
木下謹三商店……四六
桐田商會……四七

ク
クロースルーフキング製作所……七六
國枝工務所……一二
熊取谷熊治郎商店……一七
久保田組……二〇

ケ
建築金物商會……表紙四

コ
鴻池組……一七
駒井喜鐵工所……一七
工材社(阪口芳三郎)……七八
後藤商店……七六
宏昌大理石工作所……二〇

サ
佐伯組……一八
佐久間建材工業所……二一
佐渡島西店建材部……三二
笹岡家具裝飾店……三六
三機工業株式會社……表紙二
三正商會……七二
三稜社……三〇
阪本商會大阪出張所……三八
澤田合名會社……四八
齋藤省三事務所……七七

シ
清水榮二建築事務所……一二
清水組大阪支店……一八
城口研究所大阪支店……五九
設樂建築事務所……一二
島貿易株式會社建材部……九
集成社塗料部……三五

ス
須賀商會……四三

セ
清光社……五〇

ゼ
錢高組……一八

ソ
宗建築事務所……一二

タ
竹中工務店……一八
田中昌司商店……三六
田中源太郎商店塗料部……七八
田村商會……二六
田島工業株式會社大阪出張所……六三

ダ
WCフラッシュバルブ製作所……五二
大元塗料店……七〇
大和工業株式會社……七九

テ
寺井洋家具部……三八

ト
朝永建築事務所……一二
東洋陶器株式會社大阪出張所……六六
東亞鐵工所……五三

ナ
ナンコク商事株式會社……三一
中村建築事務所……一二
中川辰藏店……一九
內外土木建築材料合資會社……五八
南滿鑛業株式會社……五四
南滿建材工業所……三四

ニ
日本ドアーチェック製作所……七一
日本ペイント製造株式會社……三九
日本木材工藝株式會社……七四
日本建築紙工株式會社大阪出張所……四五
日本金具株式會社……六
日本工劑株式會社……七三
日本石綿盤製造株式會社……二八
日本碎石合名會社大阪出張所……二二
日本鋼製建具株式會社大阪支店……六七
西原衛生工業所大阪支店……一四
西孫南店建築金物部……三七
新田ベニア製造所……八〇

ノ
野村建築事務所……一二
野澤幸三郎商店……六〇

ハ
橋本建築事務所……一三
原科建築事務所……一二
原商事株式會社……七〇
汎建製作所……七一

フ
古塚建築事務所……一三
藤木工務店……一九
福原商店……四八
藤田商會……二四
藤井製作所……六五

ベ
ベニス工房……五二

ホ
本間建築事務所……一三

マ
眞水三橋建築事務所……一三
松村組……一九
松本商店……六八
万年スレート株式會社……三四

ミ
ミナト製作所……四二
三井物產株式會社……二五

ム
村上建築事務所……一三

モ
森本建築社……一九
森岡工業所……一三

ヤ
安井建築事務所……一三
山中商會……五五
山泰商店……四五
山本東作商店……二四
矢橋大理石商店……

ユ
ユニオントレーヂング……五一

ヨ
横河工務所……一三
横河橋梁製作所……四一
米本商店……五六
米山製作所……七五
米野商店……四二

ラ
ラバロイド商會……三三

レ
玲光社(木內眞太郎)……五六